を見、其間饅頭の如くに頭髪を薙ぎたる八九歳の小兒の嬉戯するを見る毎に、余は如何にしても四千里外の異域にあるを信ずる能はず。身は九州地方の田舍を旅行しつゝあるが如き心地す。唯此感想を破るものは處々の平地に椰子樹の並立し、其深綠なる葉色の、日光に驕るの一事によりてのみ。此間山川を上下すること多きに係らず、マヂスとの間一のトンネルあるのみ。岩角を縫ひ、山腹を迂回するを以て、車道割合に長しと雖も、動搖の憂少なく、乘客の愉快は極めて多し。確に蘭人、工事上の技能を示したるものと云ふべし。

**官立ホテル**

此日午後五時四十九分、余等の汽車マヂス驛に着するや、乘客皆な車室を捨てゝ出づ。是れ此地方の汽車は夜間の運轉なく、日没と共に休息することなほ人の如くなればなり。マヂスはスウラバヤとバタヴ井ヤの中間に當る寒村にしてホテルなく、料理店なきを以て、此鐵道線の持主なる政府は、煉瓦建築の一大ホテルを作り、自から宿屋の主人となりて營業す。中央は食堂と客室にして左右の兩翼を張ること二十有餘間、客室を離れて遠く便所と浴室とを設く。余は與へられたる十二疊ほどの部屋に入り、汗じみしたる衣服を脱し、襲衣を着けて浴室に至り、數十杯の水を雙肩より注ぎ、客室に歸ればベランダにはテーブルと長椅子ありて、ボーイはコーヒーを持ち來る。襲衣のまゝ、兩足を投げ出して之を飲むに、其香味の甘美强烈なる、余は未だ曾て此の如きものを試みたることあらず。然れども怪しむに足らず。瓜哇に於ては政府はコーヒー畑の大地主にして、其得たる最上のコーヒーを供するものなればなり。實に余は一杯のコーヒーにより、心身全く蘇生し、頗りに隣室の客と語る。而して八時には一聲の號鈴と共に、衆客皆な食堂に入り、余の如く白き略服の客あれば、正々堂々、タキシードを着くるものあり。全ホテル中、一人の婦人を使用せず、和蘭人の會計掛と、マレー人の給仕あるのみ。余が食堂

より歸るや、斬髪洋服、二十七八歳の支那人來りて余と語を交ゆ。其讀む處の書を見るにピール、ロチーの『お菊夫人』の英譯にして、彼は此書中に記する所は果して事實なりやなど、質問す。余は彼の名刺によりて、彼がジャヴァ第一の富豪建源の養子たるを知る。

**鐵道國有の計畫**　此夕、余はベランダにある長椅子に横はりて野外を望むに、微涼、新に渡り、蟲聲草間に聞え、蕉影階前に亂れて、疎螢窓外に飛ぶ。余始めて時の秋なるを感じ、身の旅中に在るを思ひ、鄕思迢々禁ずべからず。翌朝五時半ボーイに驚されて急遽朝餐を取り、六時の汽車によりてスウラバヤに向ふ。ステーツホテル一夜の宿料僅かに六ギルダア（一ギルダア八十一錢）にして、併せて輕き辨當を與ふるに至りては、また廉なりと云はざるべからず。蓋し汽車中食堂ありと雖も、料理受負は支那人にして、其ビーフステーキは雪駄の裏を燒きたるが如くに硬粗なれ

バタヴィヤの舞妓

パタヴイヤの土人俳優

ば、此辨當は極めて便利なりとす。マヲス以南は卽ち中部瓜哇にして、此地方より砂糖の耕作漸く盛んに、米田は已に二度作の熟したるを見る。余は此間、瓜哇土人に荷物を運ばしめ、或は物を買はしめ、報酬として銀錢を與ふるに、彼等が下座して、手を重ねて受くること古の我國の穢多族が良家に到るが如くなるを見る。北方瓜哇には此風なしと雖も、中部より以南は概して此の如し、古來の風然るものか。或は蘭人積威の然らしむる所か。此鐵道は官私兩種にして千五百マイルあり。近時日本が鐵道を國有としたるに鑑み、政府は凡ての私線を國有にせんと企て、略ほ會社と協議を遂げたるが如し。

**スウラバヤ附近の光景**

此日午後四時半、スウラバヤに着し、在留日本人の歡迎を受け、ホテル、シンパンに入る。此ジャヴァの南端に於て、三井は支店を有し、高野省三氏支配人たり。京都の稻垣幸之助氏夫妻共に久しく此地にあり、各群島に人を出し

て貿易し、潮谷商會、中川商會、川井、岡崎、高橋の諸氏あるを見ては、余は意外の感なきを得ず。此夜高野氏を東道としてスウラバヤ市中を見物す。流石に人口十五萬を有する商業上の首府にして、一般にバタヴ井ヤよりも生氣充滿し、車馬の來往極めて忙しく、バタヴ井ヤと同じく、壓搾蒸氣を動力とする市街鐵道、市中を一貫し、音響なく、煙毒なく、輕快便利を極む。此地バタヴ井ヤと同じく、大家巨屋は多くは庭園喬木を以て圍繞せらると雖も、市街の繁盛は漸次庭園を犯し、全市を熱鬧ならしめんとしつゝあり。然れども中央市部に於て猶ほ羅望子の喬木に掩はるゝ巨屋少からざるは聊か慰むるに足る。料理店へレン、ドーレンの如きは卽ち其一にして、内は料理店にして外はカフエーたること、歐洲大陸の如くにして天空に聳ゆる羅望子の下にテーブルを設けて食事す。余、此時身の炎南に在るを覺えず、夕露の衣を濕すに驚きてホテルに歸る。

## ジャヴア人の歌舞

余一日高野君の厚意によりて、瓜哇の歌舞を其家に見る。鐘あ
る、大鼓あり、小鼓あり、笛あり、絃あり、大小の樂器十二三、樂人、皆な足を投
げて坐す。暫らくして一舞妓立つて舞ふ。髪を束ね眦に朱を加へ、乳より上部と雙
腕とを露はし、胸は掩ふに鎧の胴革の如きものを以てし、腰以下はサロン、カバヤを
以て隱くし、腰を卷くに支那の玉帶の如きものを以てし、足は素足にして、足指に
は指環を着け、双手、絹のヴェールの如き長さ七八尺なるものを携へ、之を頸にかけ
て調子を取ると、日本の踊に手拭を用ゆるが如し。其舞ふや先づ左右の手指を動か
し、次に腕を動かし、次に腰を動かし、體を動かす。此間常に足指を動かすを怠ら
ず。其擧止全然舞にして、踊にあらず。殊に我踊を見るに慣れしものに珍らしく
思はるゝは、其舞ひ且つ歌ふの一事にありて、恰も泰西のオペラの如し。余は此舞
妓の風姿は曾て之を見たるが如き心地せしが、其理なきにあらず。即ち舞妓の風姿

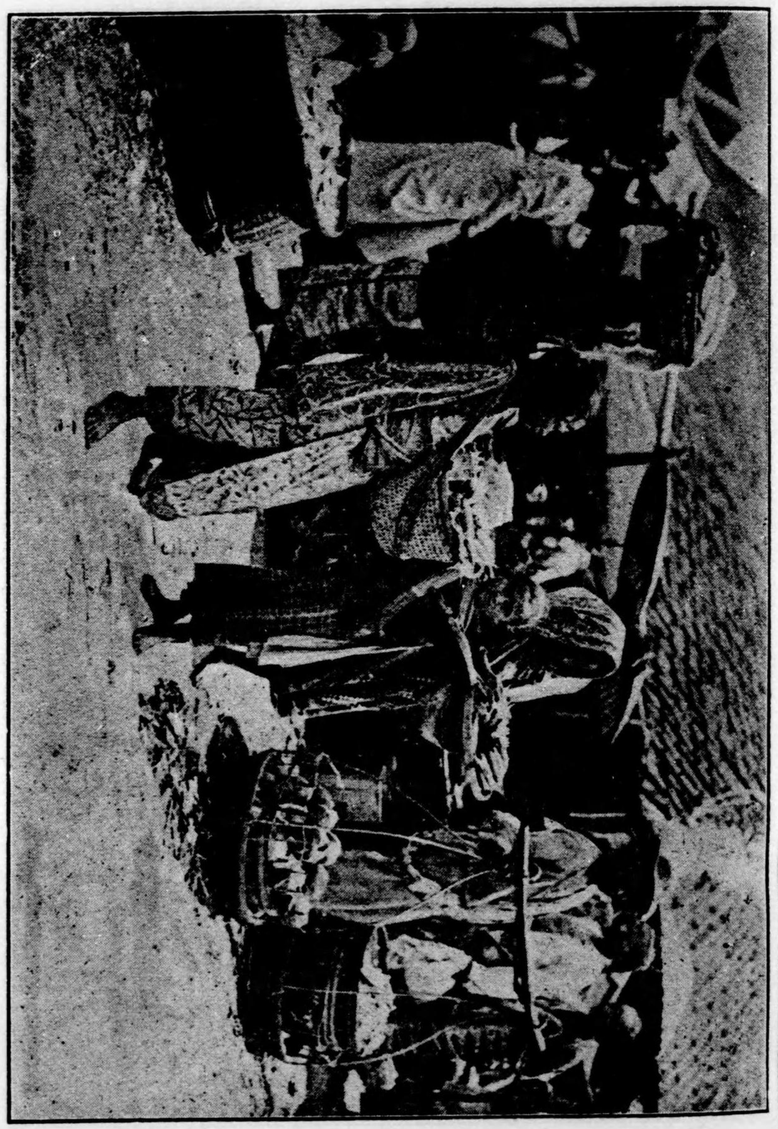
は全然余等が印度の佛畫に於て見る天人空を飛ぶの圖に近きが故なり。唯だ彼は詩化せられたるが故に美しく、是は事實なるが故に、彼の如くに美しからざるに過ぎず。此夜の歌曲の意義を聞くに、死者あり、親朋家族相集りて呼べども、幽魂長へに歸らずと云ふが如き宗教樂なりと云ふ。因て思ふに今日の瓜哇は全島悉くマホメット教徒なりと云ふも、其佛像の斷片、佛寺の舊跡の數々發見せらるゝに徵すれば、嘗て一たび印度佛教の教化を受けし時ありしものならん。而して歌謠もまた此間に印度の感化を受けしものならんか。瓜哇人最も歌謠を好み、其歌謠の調、平板にして愴悽、恰かも我國の歌謠に似たるもの少からず。結婚は多く男女の相愛に成りて、見聞する所少からず。此間頗る高野君を煩はす。高野君夫人快活慧敏にして而して相愛はまた歌謠より起ると云ふ。余は是より日々劇場に行き、或は耕地を見また能く客を待ち、怜悧活潑なる稲垣夫人と共に、ジャヴァに於て日本人のために光燄を發す。

## ソルタンに面會を得ず

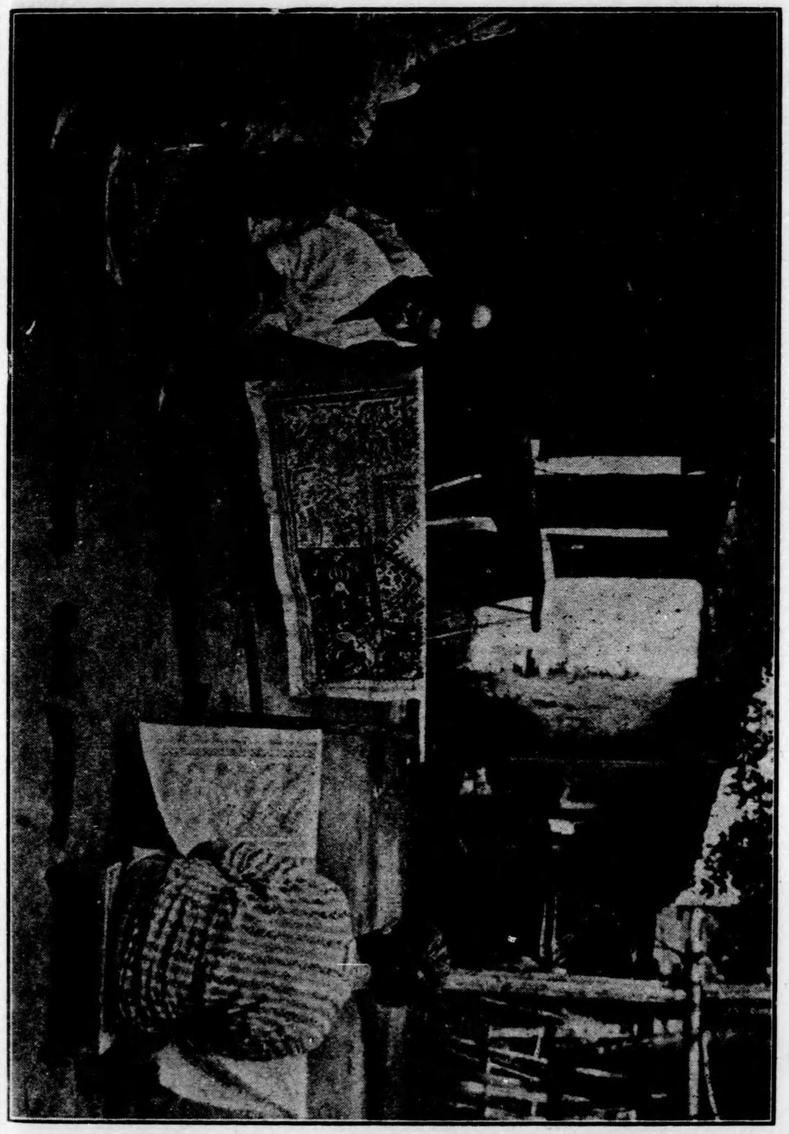
余は多くのものを見、多くの人を見るも、未だソルタンを見ざるを以て、一日ジョクジャ市に赴く。是れソルタンは現今ジョクジャとソーロとに在ればなり。バタヴ井ヤは東京にして、スウラバヤは大阪ならば、ジョクジャは名古屋とも云ふべく、兩府の中間に在る都會にして、名義上、ソルタンが政治を施すの地なれども、其實は萬事の決、和蘭理事官の手中にあり。十年前迄は外人のソルタンに會はんと欲する者は、容易に面會し得たりと雖も、今は總督府の紹介を有したる者に限られて、是すらも最後の許否は理事官の一存に在りとす。余は總督府の紹介狀を有するを以て一日、ジョクジャ府の理事官を其官邸に訪問したるに、玄關番は如何にして余の訪問を豫知したりしにや、余が直ちに官廳に到らんことは理事官の希望なりと云ふ。余は心中寧ろ理事官の直截簡明にして事務的なるを悅び

て、官廳に到れば、祕書官らしきもの出で來る。余は丁寧に來意を告げしに、彼は余の初對面の挨拶には何等の返答をも與へず、余に倚子をも與へず、直ちに余の紹介狀を一見せんことを求む。余が之を示すや、通讀一過、直ちに身邊の金庫を開らきて、一通の書翰を出して之を讀み終りて余に言ふ、ソルタンは其女の結婚のため、頗る心を用ゆるがため、面會は之を承諾せざるべしと。余は滯東の旅客にして再び來るの機會少きがため、兎に角ソルタンの意向を聞合さんことを求めたるに、彼は同一の返答を繰り返すに過ぎず。余は余の有する紹介狀に對して相當の考量を與へられんとを請ふと云ふも、彼は石佛の如く、三度同一の返答を繰り返すに過ぎず。かゝる押問答の間に電話の通じ來るや、彼は理事官の召喚ありとて、余を棄てゝ去りたりき。余は國内に於ても、國外に於ても、未た曾て斯の如き官人に接したることあらず。また斯の如き冷遇を受けしことあらず。理事官が余に接見せざる以前に、余の來訪を謝絶して、官廳に赴かしめたるも一の不思議なり。祕書官らしき官吏が、初より余に紳士らしき待遇を爲さゞりしことも不思議なり。察するに表裡二面の紹介狀ありて、余が携へたる紹介狀は表面の紹介狀にして、金庫中の紹介狀が裏面の紹介狀なりしやも知るべからず。裏面の紹介狀が何事を記しありしかは、余が得て想像する所にあらざるも、余がソルタンに面會し得ざりし一事に徵して畧ぼ知るべきのみ。支那の言に『地邊にして吏尊し』と云ふ。余は今始めて此語の深義あるを覺る。後、余、友人に告ぐるに此事を以てしたるに、友人曰く、ホテルに於て何等か不愉快を感ずることなかりしかと。余は友人のピントによりて始めて回顧す、ホテルに於ても、汽車に於ても、常に形影相伴ふが如く余と同行同宿し、汽車に於ては、余に日本の近事を質し、余に告ぐるにジャヴァ、和蘭の近事を以てし、極めて狎れ狎れしき人ありしを。瓜哇政府の神經過敏も此に至りて極まれりと云ふべし。

**城壁、更紗**　ジョクジャ市はスウラバヤ若しくはバタヴ井ヤの如くならざるも猶一都會たるを失はず。其停車場の廣袤、及び乘降客の多少より論ずれば、靜岡市位に匹敵するもの丶如くなれども、人口は僅かに一萬五千を數ふるのみ。余はソルタンの舊城なるものを見たるに、殘壁敗門、長草に埋もれ、見るものをして亡國の恨に堪へざらしむ。城郭の組織、屈曲を首として、出入を難からしむるに於て、我國の古城に相似たりと雖も、我城郭が主として石を用ゆるに反して、多くペトンを用ひて、恰かも旅順の城壁の如くならしめたる一事は、頗る我と趣を異にす。加ふるに砲彈の降下を遮るがため、處々ペトンを以て天を掩ひたる部分あり。此城、名くるに水城を以てし、城の中心に處々池沼あり。ソルタンの妃妾等の浴して以て暑を避くるに供す。曾て和蘭の大將デンデールが事を以てソルタンに面會せんとして此城に至りしに、ソルタン、妃妾と水中に嬉遊して容易に面會せざるがため、大將赫然として



ジョクジャ近傍の王墓



ムスリム人の土産物を讃へる圖

憤り、徑路より池邊に突入し、其狼狽に乘じ自からソルタンを捕へて政廳に至りしと云ふ。規模廣大にして防備す可く、當時、嚴守の狀を想像すべし。蘭人は此城、葡萄牙人の手に成ると稱するも、ジャヴァ人は支那人と印度人の手に成ると稱す。其何れが是なるを知らず。余は城を出で士族屋敷とも稱するものを見て市中に出るに、到る處更紗を書き、且つ賣るものあり。全市更紗を業とすと云ふも過言にあらず。是れ所謂るジョクジャ更紗にして色澤模樣は、頗る我國に舶載し來れる古代更紗に類し、古朴愛すべきもの多し。其最も鮮麗の色彩あるものはベカロンガンに於て製せらるゝと云ふ。

**スマトラ島の上陸**

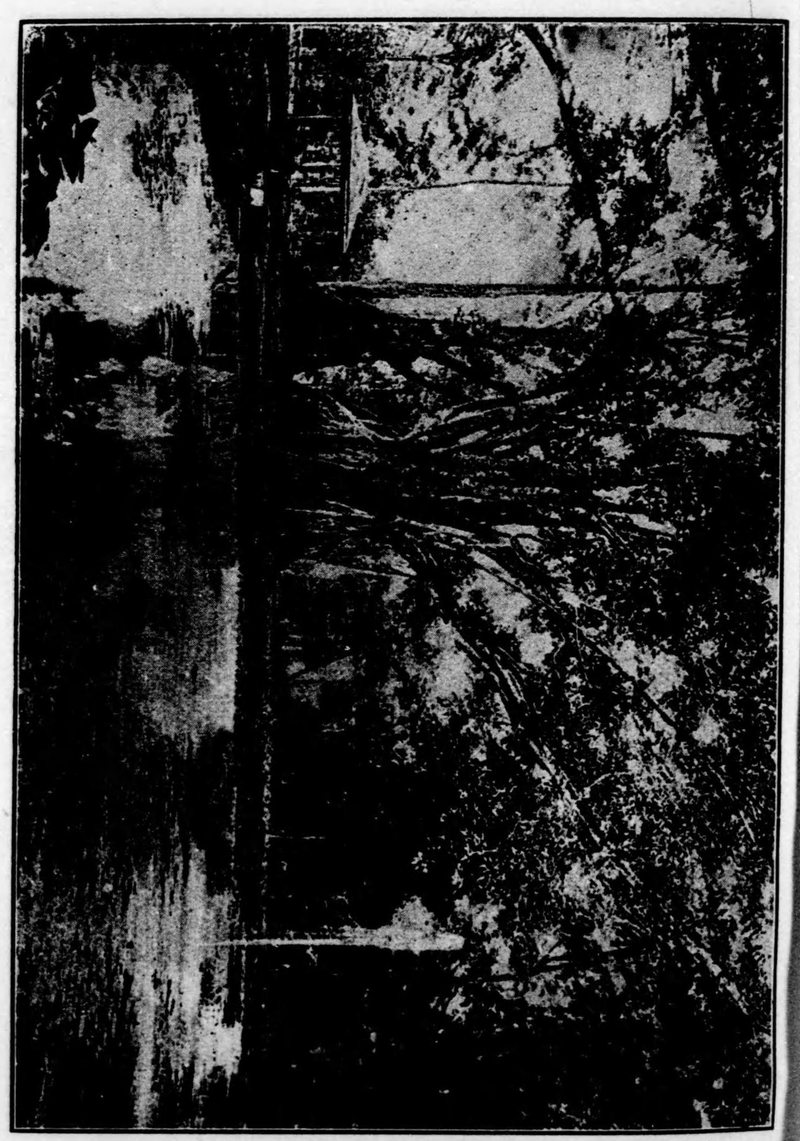
瓜哇の南港に立ちて東方を望めば、マデュラ島は呼べば答へんとし、セレベスには一月三回の汽船あり、ボルネオには毎週一回の汽船あり。スマトラには新嘉坡を經て、毎週一回の汽船あり。而してジャヴァは其心中にあり。ジ

ヤヴァに居る者、豈に知らず識らず此等の群島の事情に通じ、遂には其處に到らざるを得んや。故に瓜哇の主人たる蘭人が、此等群島の主人たるは自然の勢のみ。然れども和蘭人はかゝる形勢に處しても、未だ十分に群島に其勢力を樹立せざるものゝ如し。例せば余等のスマトラを見るや、已に全然征服せられたる國土なりとして、和蘭人の權利は、寸毫も疑議なきものと信じたるに係らず、余は其地に入りて、土匪、盗賊の横行に止らず、アチーン地方に於ては、殆んど純然たる交戰國の狀態を存するものあるを見て、一驚を喫したりき。スマトラは面積十六萬千六百十二哩にして、日本本國よりも廣く、人口四百三萬人あり、面積の割合には少なし。余は其東岸の港ベラワンより上陸せしが、港口遠淺なるがため、到着の三時間前より船を除行せしむ。已にしてベラワンに到れば、河口の小港なりと雖も、四千噸の汽船猶ほ棧橋に繫留し得るの設備あり。此地方來往の船舶は勞働者の輸入と、土産の輸出によりて荷物の平均を維持す。勞働者の輸入と云ふは、人口稀少なるがため、耕作地主は人を派して瓜哇、シンガポール等より契約勞働者を紹介するなり。土産の輸出とは、石油、鑛物、コーヒ、煙草、米等を輸出するなり。余はベラワンより汽車に乘りてチチバハンに到り煙草耕地を一見せしが、土人、皆な顔面灰黑に、只眼眸のみ輝けるスマトラ人にしてジャヴァ人とは頗る面目を異にし、山地の生蠻バタックの血液を有するものゝ如し。蘭人は今や全力を盡して山地を夷平し、煙草耕作に供しつゝあり。唯熱帶地の樹木、之を燒くに一臭と一種の瓦斯ありて、尋常農夫の堪ゆる處にあらず、最も能く之に堪ゆるものを印度のクリング人種とすと雖も其人多からざるを以て、瓜哇、ボルネオ、支那より勞働者を招徠す。而して煙草の收穫せられたる後は、土人、耕地主人と約束して米を植ゑ、翌年の煙草を蒔きつくるまで、之を耕作すと云ふ。此地方の煙草耕作は最も有利にしてデリ煙草會社は二

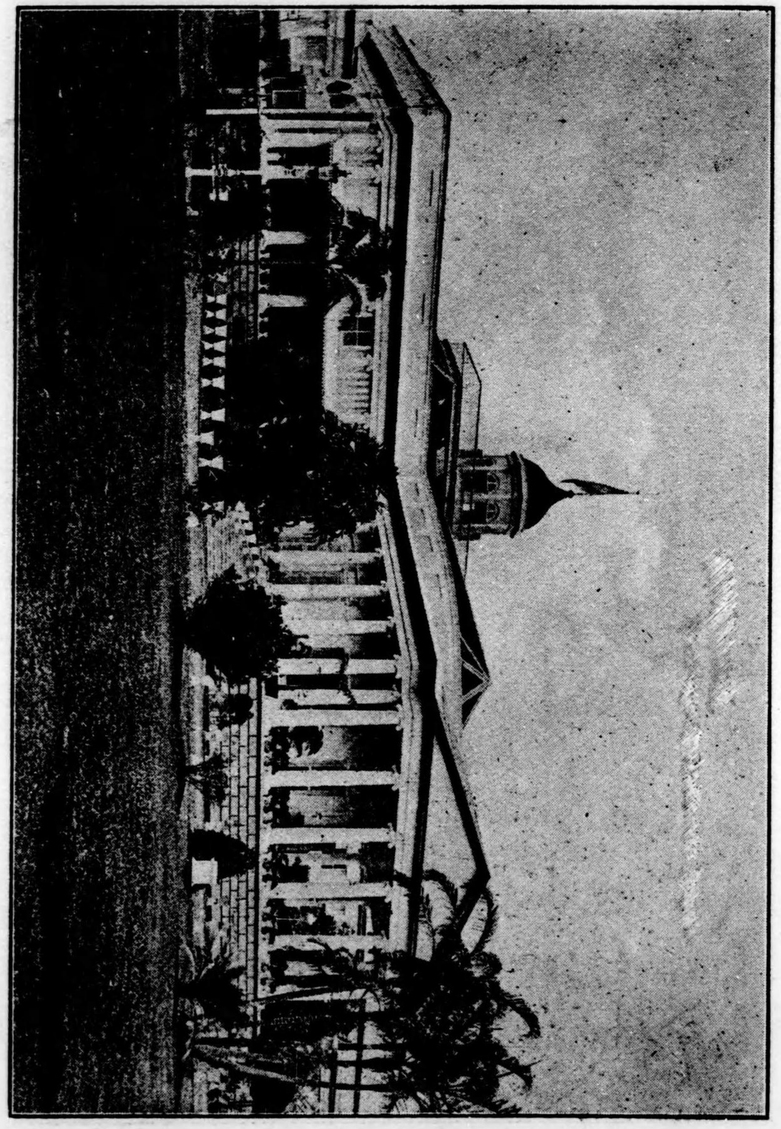
十六年間、毎年七割五分の配當をなしたるほどなりとす、是等スマトラの土地は、一切土酋の有なるを以て、概して一エークル毎年十弗を拂ふものには、土酋は隨意に之を貸與するを得、唯鑛山の貸與に就ては瓜哇總督府の許可を要するのみ。

**意外なるメダン府**

メダンは東スマトラにあるデリ州の首府にしてチヽバンより汽車にて上ること三十分程にあり。此間汽車沼澤を横り、深林を過るもの數々、澤中、鰐魚あり、林中怪異あるは云ふまでもなし。メダンはバタヴ井ヤ式の都會にして、最も多忙なる街路の外は、公園より成り立ちたりと云ふべき清麗なる都會にして、停車場には不愉快なる人力車なくして、却つてドクカァに似たる馬車ありて客を待ち街道には並木を植ゑて、日光を遮り、家々戸々、電氣燈によりて夜を照すなんど、生蠻の住居する山下に、斯の如き好都會あらんとは何人も期待せざる處なるべし。此地に於ては日本商人は予が豫期したるよりも多く、而して其多くは成功者なるが



日本人ホテル
植物園
巻末
麻雀



瓜哇バタヴィヤ港の市場

如し。市街を散歩するに、往々體格偉大、顏色黎黑、眼光頗る穩かならざる人種の徘徊するものあり。是ぞ卽ち山地のバタック種にして往々にして騷亂を起す。此地方に於て著しき現象は其都會の生活がバタヴ井ヤ等の老都會よりも歐洲風にして商業もまた割合に活潑なる一事なりとす。事に熟したるもの之を說明して云ふ、此地方は新開の地にして近年に至りて歐洲より來りしもの多く、また商業上の關係より歐洲に到るもの多し。是れ三十年來バタヴ井ヤに滯留して半ばマレー的老癈の氣質を帶び來れる蘭人に勝る所以なりと。若しそれ土人に至りては、體格に於ても、精神に於ても、ジャヴァ人よりも剛健にして、外人に對して屈從することジャヴァ人の如くならざるに似たり。故に蘭人また其鞭撻政治を此に及ぼさず、名義に於てのみならず、事實に於て、土司土酋の手を經て政治を行ふ場合多し。然かも此懷柔政策も土人を甘服せしむるに足らず、北スマトラのアチーン地方に於ては、土人、蘭

人の政令に服せず、今猶ほ攻戰寧日なし。

**スマトラ島人の風流**　ジャヴァの土人が歌舞を好むが如く、スマトラの土人もまた極めて歌舞を好み、結婚するも往々歌舞によりて起るものあり、宴會あれば必ず歌舞あり、歌舞は必ずしも專門の歌妓、伶人によりて爲されず、村中の男女相進みて歌舞す、歌舞の中、最もスマトラ人の好むは掛合歌にして、男女合席して左右兩隊に分れて坐し、一人起つて歌へば、次の男女また歌を以て之に答ふ。斯の如く相連續して、適當なる返歌を歌ふ能はざるものを敗者とす。而して此歌が新歌古歌を問はず、男女の意中を歌ふものなるは云ふまでもなし。恰も古の我公卿男女が、歌によりて其志を語り合しが如し。其一例を擧げんに左の如し。

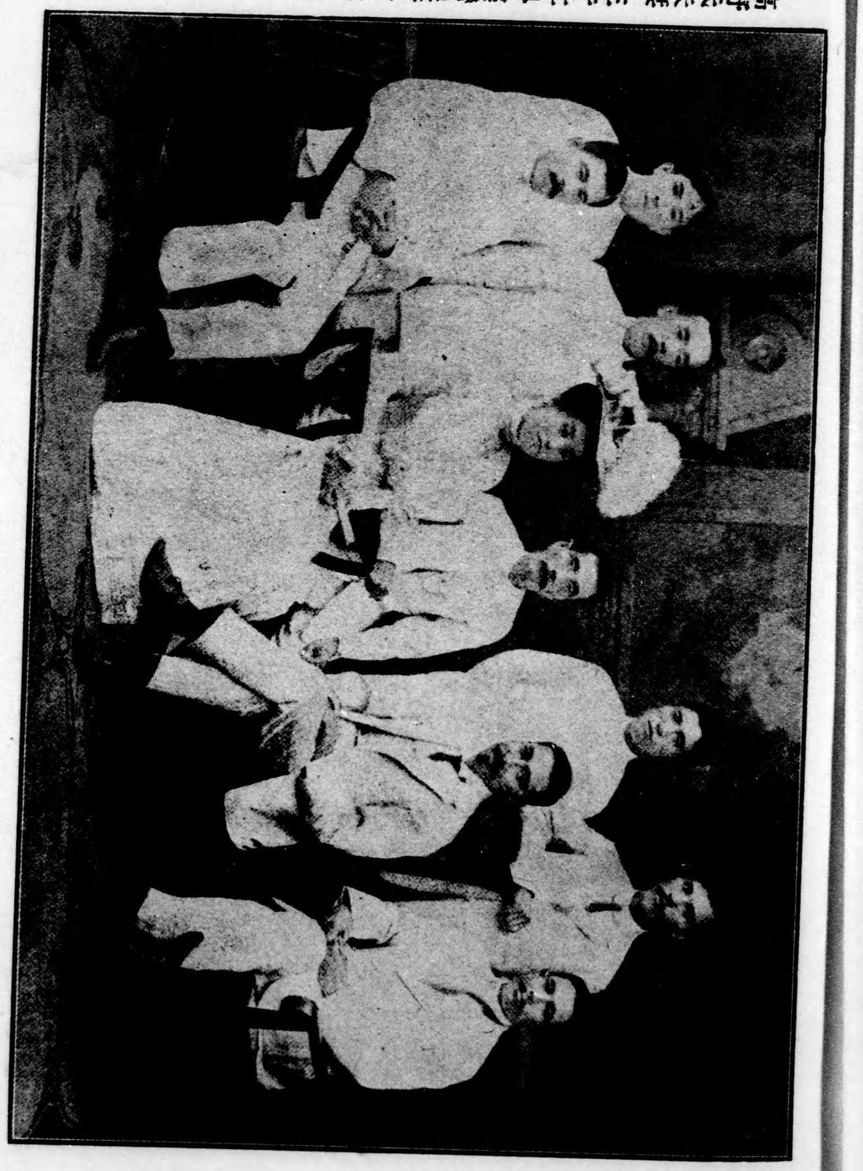
男　深き水は益す深けれど、小山の雨は已むときなし。君を思ふ我が心は益す深けれど、我思の遂げん望もなし。

女　月若し全く滿ちなんには、何故か衆星の中に現はれざる。君若し操に變りなくば、何故か我見ることを許さゞる。

**スマトラ土人の家系**　慓悍にして獰猛なる山人の間にも、かく歌謠によりて心を得んとする優しき心あり。而して剛健にしてかゝる伎倆ある男子が、最も美しき婦人の心を得ると云ふに至りては、東西古今の人情、同一なるを見るべきか。結婚は此の如くにして成立するも、婦人は男子の家に來らず、男子が己の家より妻の家に通ふこと、上代に於ける我國風の如し、是れスマトラの社會は母系組織にして、一家の母は一家の中心なればなり。方今スマトラ人は四十姓に分れ、一姓、一系にして、一姓の中、互に相婚嫁するを得ず、人事の上に斯の如き太古の遺風の存續するほどなれば、東岸より中央の山地を超ひて西岸に行かんとするに、往々、山中に於て野象の大隊を作りて來往するに遇ふと云ふ。

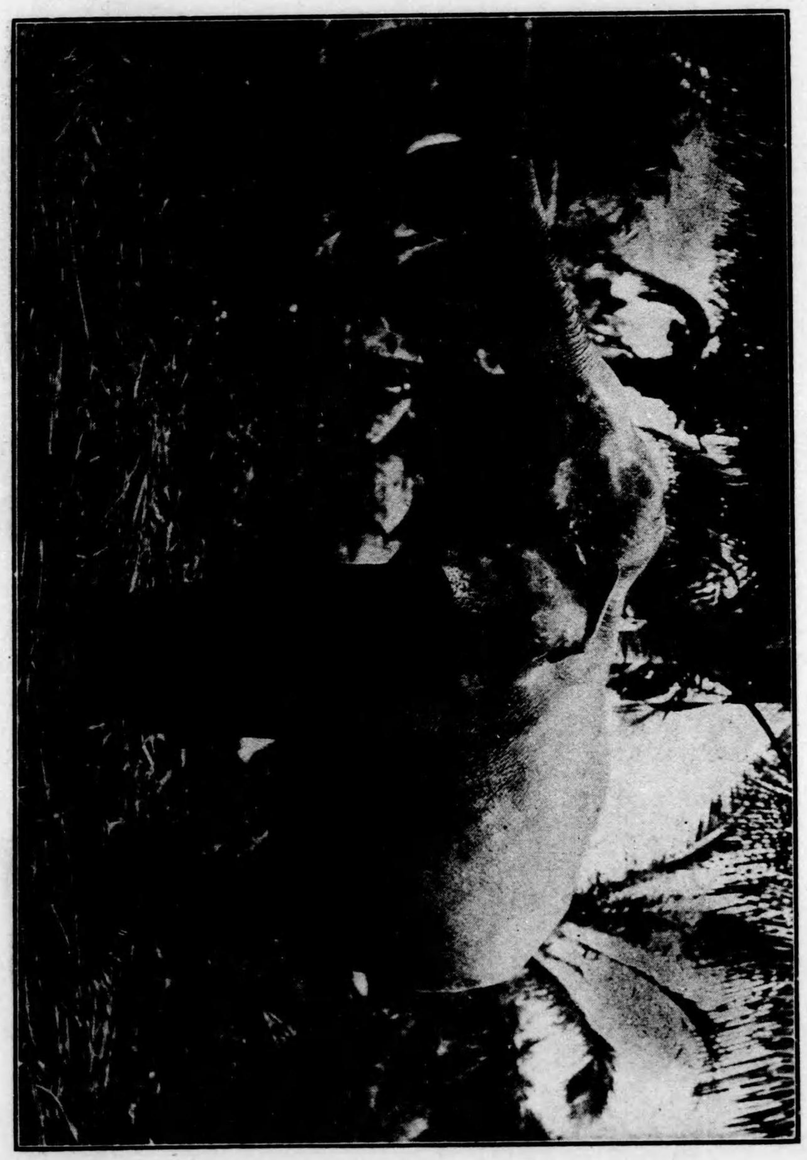
## 元史以前のジャヴァ

案ずるに瓜哇は荷蘭の領地たるに先ちて已に支那の藩屬たりしものにして、其沿革を尋ねるに頗る興味多し。瓜哇の名が始めて支那の文學に現はれたるは、法顯の佛國記にあり、法顯が佛國記を書きしは紀元四百十一年にして其記する處によれば、セーロン島を發してより、風艱雨難、九十日にして耶婆提に達し、耶婆提よりまた九十日にして廣東に達すと云ふ。耶婆提は即ち今の瓜哇なり。以て當時の航路は印度洋よりスンダ灣に出で、ジャヴァ、スマトラの間を航行するにありしを見るべし。法顯の記行中、一字も瓜哇に支那人あるを記さざるを見れば當時尚ほ支那の移住民なかりしを想ふべし。而して唐史に於ては已に社婆、亦の名は訶陵と云ふとなす。其記する處によれば『木を以て城を作り、大屋と雖も覆ふに桄榔を以てし、象牙を牀となす。文字あり、星曆を知り、食ふに匙なし、貞觀（紀元六百二十七年我欽明天皇の御宇）中、使者を遣はして入貢せしかば、大宗璽詔を以



高野氏大美・三井社員・蘭製糖會社員

スウラベサ時に於ける（二）



爪哇人とその妻

て優答す。上元の間、其國人女子を推して王となし。悉莫と號す。威令整肅、道に遺ちたるを擧けず、大食の君之を聞き、金一囊を齎らして其郊に置かしめたるに行くもの之を避く。是の如きもの三年、太子過つて足を以て金を躙む。悉莫怒つて將さに之を斬らんとす。群臣固く請ふ。悉莫曰く、罪、實に足に本づく、趾を斷べしと。群臣更に請ふに遇ふて、乃ち指を斬つて以て殉へしにぞ、大食聞きて之を恐れ、敢て兵を加へず』と、此說當時の爪哇政治としては少しく高尙に過ぐ、或は他の小說と混合したるにやあらん。大食とは即ちスマトラの西北地方に於けるアラビヤ人の殖民地なりしが如し。其後、宋の歷史に於ては已に闍婆の字を用ゆ、民は十の一を輸して租となすと云ふ。刑禁を設けず、寇盜は之を殺ろし、雜犯は輕重に從ひ、黃金を以て贖ふ。其、王、推髻、金鈴を載き、錦袍を着、革履を履き、方牀に座し、出入象に乘り、或は腰輿に坐す。壯士五六百人兵器を執つて從ひ、國、人王を見れば皆坐

し、其過ぐるを俟ちて、乃ち起つ。元嘉十二年淳化三年共に使を遣はして入貢すとも云ふ。此記事中、中國の譯者を記し、中國の賈人至れば待つに賓館を以てすと記せば、宋時代には已に支那人の來往多かりしを見るべし。元起りて其日本に試みたるが如く、一介の使者によりて之を招降せんと欲して、右亟孟琪を遣はすや、瓜哇王、服せず却て之を捕へ其面に黥して之を放つ、思ふに元の使者が日本に加へんとしたるが如く、大言を以て瓜哇を威嚇せんとしたるものなるべし。此に於てか元、兵を擧げて之を征して勝たず、至元二十九年更らに史弼を大將とし、福建、江西、湖廣三省の大兵を擧げて之を征せんとし、先づ悉く福建泉州に集らしめ、十二月、後渚より啓行し、翌年正月、拘欄山に到る。拘欄山は恐くは今のビリトンなるべしと信ぜらる。然らば即ち當時尋常の海客が爲すが如く、福建より新嘉坡に出でスマトラに寄り、而して後、瓜哇に至らず、福建より直ちにビリトンに到りしものにして、當時の船舶を以てしては、大膽勇敢の兵略と云はざるべからず。瓜哇人は固より抵抗したり。然れども勝ち能はざるや初より明なり。而して其敗るゝや弱者の武器たる欺譎を用ゆ、然れども至大なるものに對しては、欺譎もまた力なく、遂に一國を擧つて敗殘し四月の末、元軍は圖書、金銀、王族、戸籍を奪つて歸る。然れども元もまた殺戮を縱にしたるのみ、其國を統治したるにあらざるを以て、爾後、土酋の興廢に一任す。

**明史のジャヴア**

明に至り洪武二年、行人、吳用錫を遣はし、明朝得意の外交術を施したるが爲め、瓜哇王、使を遣はし元が與ふる處の宣勅を返す、而して明は此時已に三佛齊を以て瓜哇の領屬たるを認むと云へば、瓜哇の勢、漸やく盛なりしを見るべし。三佛齊は即ちスマトラの一部を云ふ。此時支那人の瓜哇スマトラに入るもの甚だ多く、廣州の逃民梁道明、其の首領となり、出でゝは海賊を業として、入

ては商人となり、頗る勢威を立つるを見、明は行人譚勝受、千戸、楊信等を遣はして道明を招撫し、募るに重賞を以てせしかば、道明、遂に勝受等と共に國に歸りて歸順し、其黨、施道卿、代つて其衆を領す。其後、中官鄭和が西洋を巡遊して歸るや、スマトラに寄港し、支那人が海賊の首領たるを聞き人を遣はして之を招諭せしめ、其來るや襲つて之を捕へ、其黨五千餘人を殺すと云ふ。之によりて之を見れば明季に於ては支那人が已にスマトラの沿岸に漲溢したるを見るべし。支那は此時スマトラに宣慰司を設け、支那人の頭目たる施道卿を以て宣慰使となし、冠帶を賜ひたるを見れば、支那の瓜哇スマトラを見る雲南貴州と異なるなかりしを知るべし。其他ブルウセンビランは九州の名を以て、スマトラの西岸サコルは花面國の名を以てアチーンは南渤利（ラングリの轉訛）の名を以てボルネオは、婆羅（バラ）若くは文莫（ブルネー）若くは勃泥の名を以て、スウルウは蘇祿の名を以て、チモールは吉里地の名を以て、モラッコは美洛居の名を以て、呂宋は呂宋の名を以て、遠きは南宋より、近くは元明に至り支那に朝貢す。其或る者は朝貢の名の下に土産を賣らんと欲し、或る者は眞に勢力に附隨せんと欲して使者を出す。而して支那もまた朝廷は屬圖の空名を得て、虛榮に誇らんと欲し、使臣は其間に功名、利益を得んと欲するに過ぎずして、眞に政治を施さんとするものありしにあらず。即ち永樂年中、瓜哇が東西二王に分れ、西王が東王を擊つて之を亡ぼし、其土地を併すや明帝、詔を下して之を責め、黃金一萬を獻じて其罪を償はしめたるが如き、其所謂宗主藩屬の關係たる知るべきのみ。

**印度の感化**

政治上に於てマレー群島は斯の如く、支那の正朔を奉ずるに方りて印度の文化は滔々として此地方を襲ひ、最初は佛教を以て、次はマホメット教を以て之を侵襲したるが如し。即ちジョクジャ府附近のボロブドルの佛寺を初として、東

西至る所に發掘せらるゝ廢寺殘院は、一として佛教が一時ジャヴァを風靡したる事跡を語らざるはなし。ボロブドルは丘陵の上に建てられし佛寺にして、久しく沙塵に掩はれしが、近世に至りて發掘せらる、一個の丘陵悉く寺院たり、其最上に現はれし部分に就て之を言ふに、一百五十メートル四方あり、考古家之を以て八世紀の建築なりと爲す。而して今や全島悉くマホメット教徒にして其姓名すらも亞剌比亞風のもの多く年々メッカに參詣するもの數萬を以て數ふるを見れば、佛教徒は平和の間に於て改宗したるにあらず、劍光火影の間に改宗せしめられしならんに、瓜哇の歴史、一も其詳を語るものあらず。而して其教化の佛教たるとマホメット教たるとを問はず、殘る處のものは、印度の文化が全島に侵染したる一事なりとす。實に瓜哇に於ては歌謠、生活、服裝が印度に酷似するのみならず、其人民の生活に必要なる樹木、花草、野菜、穀類に至るまで、多く印度より來りしものなるは、また

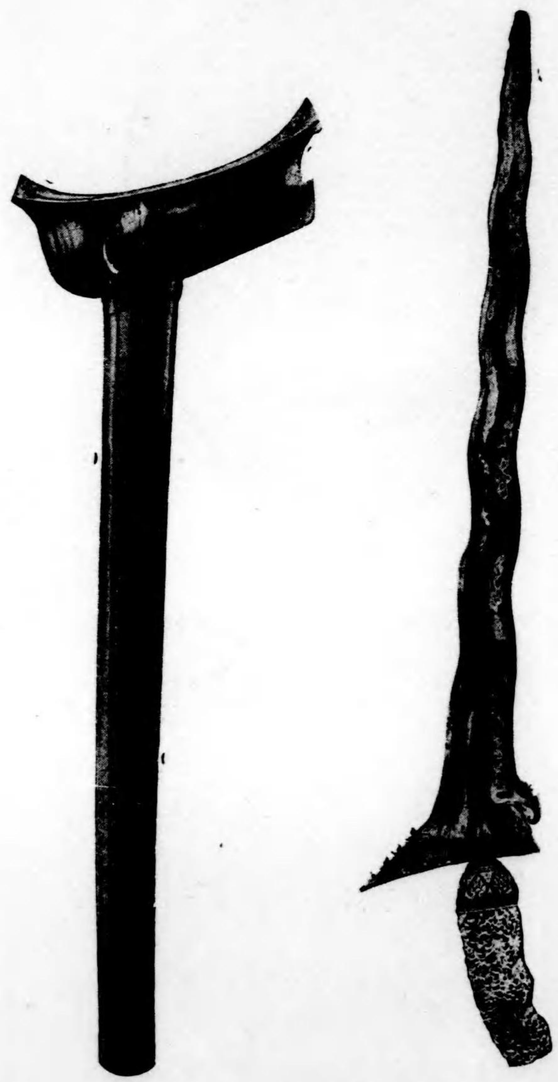


專門家の立證する處なり。然ればマレー群島は十一二世期より。政治に於ては支那に父事し、文化に於ては印度に母服したりと云ふべきか。かゝる間に十四世期頃には已に瓜哇全島に君臨する王家ありて、其權力、スマトラ、ボルネヲ以下スンダ群島に波及したるものゝ如く、其制度を見るに純然たる封建にして、朝廷の大官は即ち地方に封土を有し、封土の大小によりて其養ふべき兵士の多少を規定せられ、一定の數だけは必らず養はざるべからざると共に、一定の數を超ゆべからざること我封建諸侯の如し、而して此封建君主の外、別に中央朝廷の威權を代表して諸侯を監察し、且つ中央朝廷のために租稅を集むる代官ありて、郡邑、都市、必らず諸侯の權力を奉ずる地方官吏と、中央朝廷の權力を奉ずる官吏の相竝行すること、猶ほ我鎌倉時代に於て、各州郡國、舊來の官吏の外に別に鎌倉の官吏を並遣したるが如し。此外また更に觀察使と云ふべきもの二人ありて、各州に其部下を發し、日々、各地

の形勢を中央朝廷に報告す。思ふに斯の如きは蓋し中央朝廷は外來の印度人にして土着の封建諸侯を相疑ふの餘に出しものならん。之によりて之を見れば、其制度の才、政治の術、相當に發達して、決して當時世界の諸國に比して、甚しく後れたるものにあらざりしを知るに足らん。而して其内に於て相攻戰するのみならず、外に向つては海賊を業とし、王公貴人も、海賊たるを以て自ら誇るに至り、遂にマレー半島までも其勢力の下に置くに至りたるは氣力剛健、海濤を家とする一國民なりしを卜するに足らん。

**ジャヴア征服の順序**

かゝる間に西方歐洲に於ては敢爲大膽、組織の才あつて把握の力ある和蘭の勃興するあり。遂に西班牙をして東方の利益を專にせざらしめんと欲し、葡萄牙の首府リスボンの經驗家より聞きし報告を便りて、千五百六十五年一艦隊を發して東方に向はしめしが、其事失敗に終り、船と人とを失したるも、蘭



爪哇の王宮の模型
[illegible]

人猶ほ悔いず、千五百九十八年に至りて、更に個人、會社の船舶を合して二十二艘の艦隊を出し、資本に對する四割の利益を見るや、東方經略の精神全國に横溢し、幾多の船舶利を爭ふに至り、遂に千六百一年國會の法律によりて、東方貿易の船舶を合同して一の組合を作らしむ。是れ所謂東印度特許會社なるものにして、東方貿易專有の權と、兵馬交戰の權とを有し、喜望峯よりマゼラン海峽に至る間に於て、國會の名を以て同盟を約し、條約を結び、城郭を築き、文武一切の政治を施す權ありて、居然たる一大政府を現出し來る。是より和蘭船舶の東洋に趣くもの多しと雖も、多くモロッカス群島のスパイス（香料島）附近を來往して、土産を貿易すと雖も、艦隊に組織なきを以て、同一會社の船舶、相競ふて同一島嶼に買ふがため、蘭人の利益漸やく少なし、此に於てか是等の船艦、商業を組織して紀律約束を立るの必要を感じ、千六百九年會社の總督を置くに至りしか、自然にまた總督の居住する

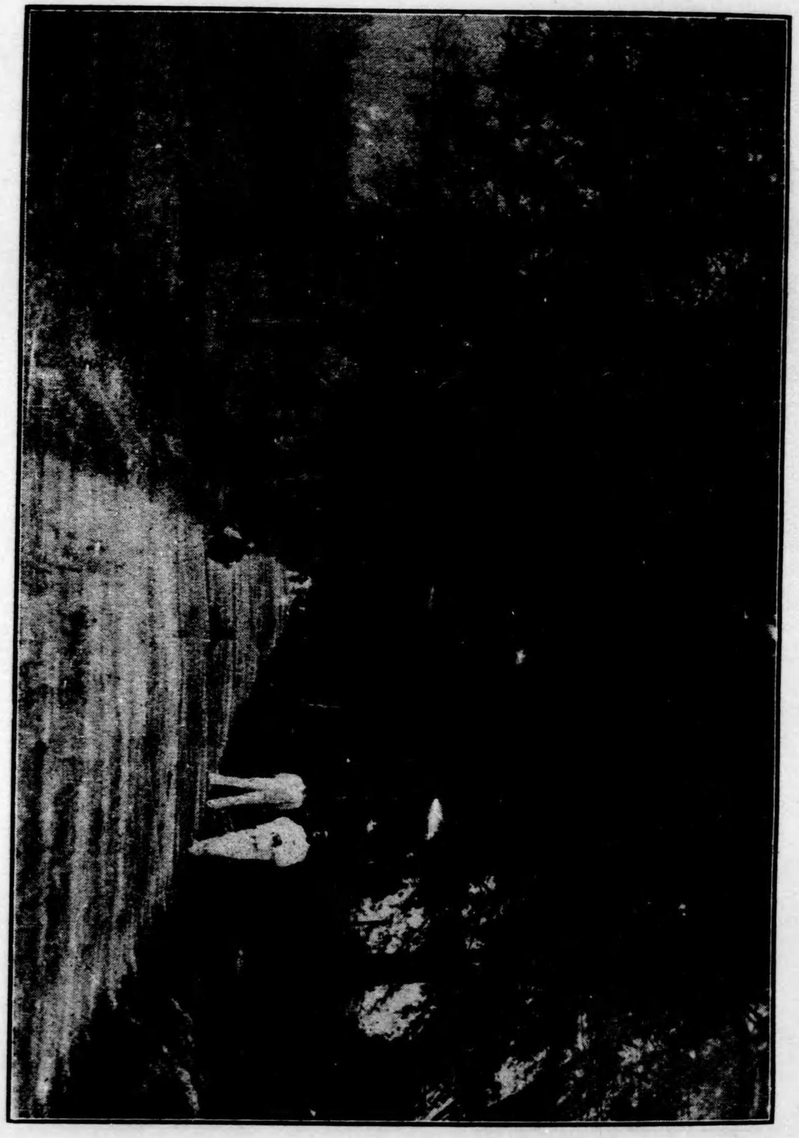
男女の假面

首都を定むるの必要を感じマレー半島のジョホールと瓜哇を得んと欲したるが、ジョホールは當時已に葡萄牙の手中にあるを以て、先づ瓜哇を得んと欲し、千六百十九年總督クーン一千五百の兵を以てスンダより上陸し、バンタムに居住するジャカトラ王に對して其土地を求む。ジャカトラ王、英船の助力を得て之を拒むも、其効なく、遂にジャカトラを奪はる。東印度會社已にジャカトラを取るや、都を此に定めて其貿易を擴張せんとす、然ども蘭人の望む所、尙は商利にありて政權にあらず、此時に方たりて、瓜哇はバンダム及びマトラムの二王國ありて、互に相侵害しながらもまた互に蘭人の貿易を妨ぐるを怠らず、此に於てか會社總督は其貿易の安全を保護するが爲め、國王土酋等に外交關係を生ずるに至り、時としては之を欺き時としては之と戰ひ、時としては之に賄遺し、知らず識らず領土を擴張せざるべからざるに至る。然れども多くの場合に於て蘭人は土人全體を敵とせず、或る時は王室の利益を代表し、或時は平人保護の名により土人の勢力を代表して其利害のために戰ふの地に立ちたりき。此の如くして商業會社は、漸く政治會社となり、遂に瓜哇よりマレー群島全體に、和蘭の政令を行はざるべからざるに至る。即ち千七百五年にはマトラム王と約してプレンガルを得、千七百四十五年にはセリボンよりバンユワンギに至る東北地方一帶は會社の有となり、千七百五十五年にはマトラム王國は遂にスウラカルタとジョクジャカルタの二國に分れ、千八百八年にはバンタム王國は遂に全然夷平せらる。

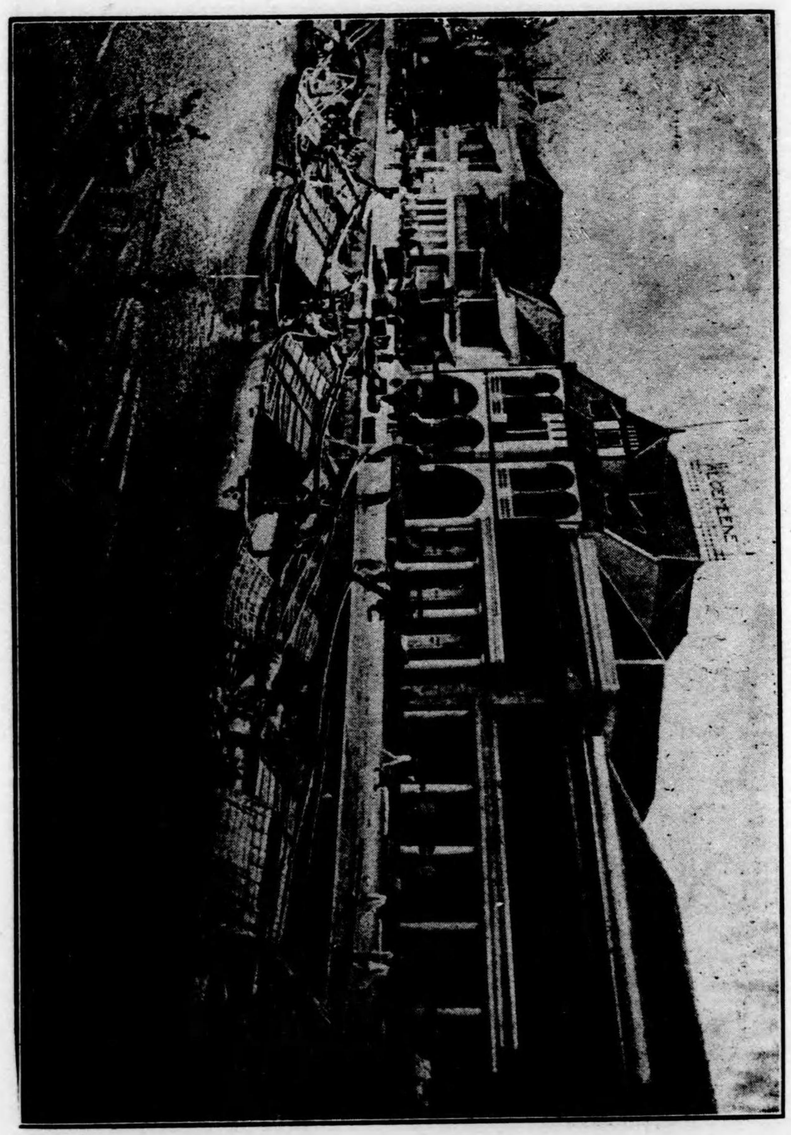
**英國ジャヴァを取り且つ返す**

此間千七百九十五年、佛國の大革命に際し、和蘭の共和黨、兵を擧げて佛國の共和黨を迎へたるがため、和蘭の王ウィリアム五世、逃れて英國に去りしかば、千八百十一年英國、其囑託により、和蘭に代りて一時、瓜哇以下の蘭領殖民地を統御せんとす。瓜哇在留の蘭人は、固より之に抵抗したれども

其効なく、遂に佛蘭の同盟破るゝ時まで、之を占領すと云ふ條件の下に、英人の占領に一任す。英國は當初より瓜哇の一大富源たるを知らず、唯だ知る處は、土酋と交戰寧日なく、財用、日に費ゆるの一事のみ。故に深く之に意を注がず、遂にナポレオン沒落の後、之を和蘭に還附し、和蘭また英國が新嘉坡を占領するを公認して已むを若し英國にして當時瓜哇の資源を知つて、之を和蘭に還附せざりしならば、東洋の局面別に一變し、歴史は更に數頁を增加したりしならん。已にして千八百二十五年、瓜哇全島の王號を僭稱したるジッバ、ネガラ意を決して蘭人と戰ふ。是れマレー人の最後の戰なりしがため、交戰最も困難にして、和蘭兵の死するもの五年間に一萬五千人、財用最も窘窮を告げしが、遂に千八百五十年に至りて辛うじて之を夷ぐ。然れどもネガラの膽氣と善戰は、深甚なる印象をマレー人に遺し、土人、其死を信ぜず、再び現はれて土人の爲に戰ふべしと信ずるもの多かりき。ジッバネガラの死後、年を



ペナンの裝飾



スウラメナ市街河

追ふて和蘭の政令、全島に普及し、純然たる和蘭の殖民地となる。此の如く瓜哇スマトラ以下のマレー群島は、隋唐頃の朝貢を初として、明の鄭和がスマトラ宣慰使を置きしを終りとして、支那の威令、マレー海に行はるゝもの久しかりしに係らず和蘭がマレー群島を取るに方りては、支那は全然之を知らず、之を知るも、一辭を挾む能はず。其殖民地の離脱すること熟柿の風に逢ふて地に落るよりも脆弱なるに至りては、深く驚嘆して已む能はざるものあり。而して和蘭が瓜哇を取りし後も多數の支那人は異圖を抱くの名の下に虐殺せられ、數萬の良民、肝膽地に塗るの慘事あるも、支那の朝廷之を知らざるに至りては、何ぞ其政府たるにあらん。余はマレー諸州を見るごとに、和蘭の之を得たることよりも、寧ろ支那が之を失したることに對して、無限の感慨を生ずるを禁ずる能はず。

**土人の社會組織**

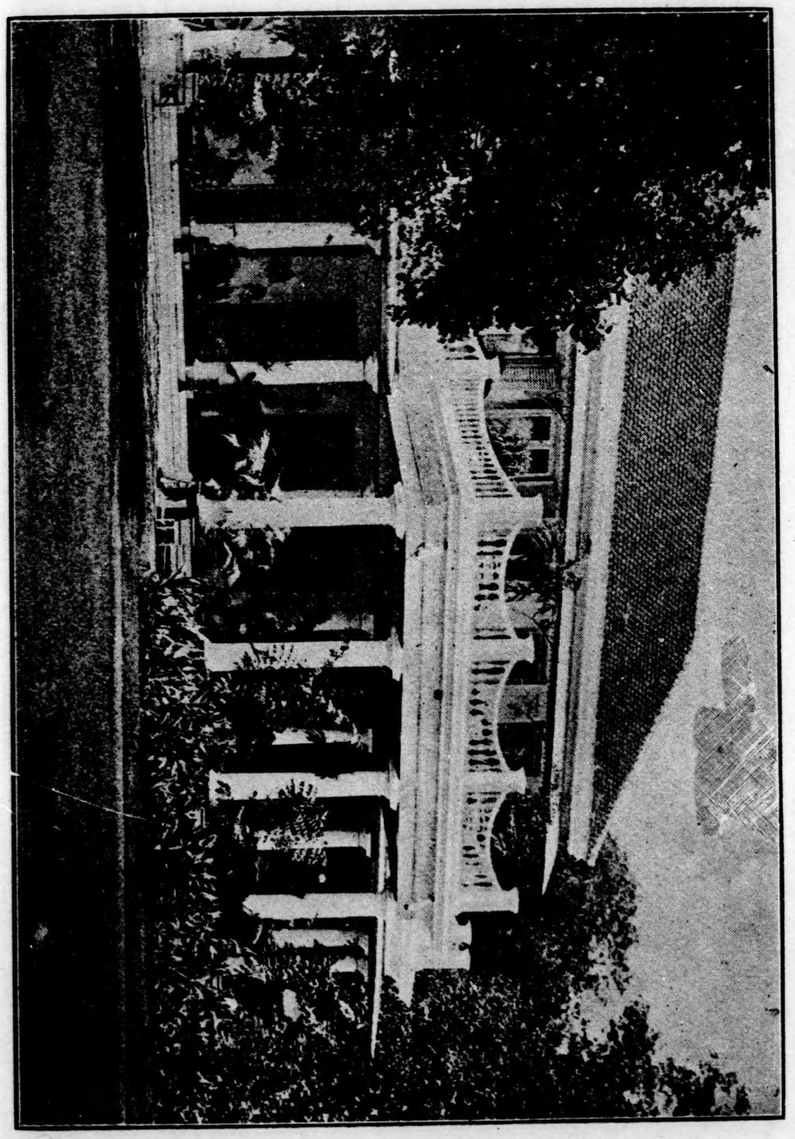
和蘭は或は自から撰びて、或は已むを得ず、瓜哇及びマレー群島

を畧取したり。其政治は人心腐敗して、百揆弛廢せる支那に比して善良なるべくして、事實は然らず、支那は宗國の空名を得て、多少の朝貢を收めんとするに過ぎざるに、和蘭は政權の外、經濟的組織によりて利益を吸取せずんば已まざらんとす。故にマレー群島は蘭人の手に歸したる日より、爐中に投ぜらる。凡そ緬甸、暹羅等の他の東洋君主專制國にあるが如く、瓜哇以下のマレー諸州に於ては、君主專制は極端まで實行せられ、人民、國土山川、皆な王の有にあらざるはなく、王者の一顰一笑は、人民の生命財產の安否に關す。臣民若し美婦人を有せんか、其人の妻たると娘子たるとを問はず、王若し求むれば其後宮を通過せざるべからず。何となれば人民は王のものなればなり。人民は一年三百六十五日の中、九十日は王のため勞銀なしに力役せざるべからず。王若し求むれば一百五十日までも辭すべからず。何となれば、土地もまた王土にして、人民は王澤によりて地上に生存するものなればなり。

其村落制度を見るに支那の儒者が、歷代人類社會の理想と信じたる周の井田の遺法にして、各村の田畑は村民協同して之を耕作し、得る所の產物は、之を六分して、其一分は其土地の所有を王室より許されたる者に分ち、其一分の二朱を僧侶に與へ、餘ます所の四分と八朱は、之を耕作者と王室との間に平分す。土地已に一村共同の力によりて耕作せらるゝを以て、田租の責任もまた一村共同の責任に歸す。是より延きて村落に罪人ありて之を發見する能はずんば其尤は村落に歸するに至る。瓜哇君臣の關係此の如し。然るに佛國革命を生じたるほどに風氣開發したる歐洲より來りたる和蘭人は、此の如き君臣の關係を見て、之を怪まず、之を其儘に繼承して、更に組織的に有効的に之を運用して、曰く、瓜哇人は、その王に對するが如く、我等にも爲せば即ち足れりと。而して此等の君主專制の繼承者たる會社は、專制政治を行ふに方りて、決して自から直接政治を行はず、舊王土酋の手を經て之を行ふ。即ち

其形に於ては、王若しくは土酋は、會社と契約を結びて其土地を蘭人に讓與し、會社に對して、或る物品は有價にて、或物品は無價に納むべく、有事の日は武器を以て會社を助くべしと爲し、一方に於ては會社に讓與したる土地を、王自から借り受けて、更に之を小分して農民に貸與し、その報償として生産の一部を己に納めしめ、此中より半ばは會社に納め、半ば自家の用に供し、曾て地主たりし舊王土司は、飜つて受負人の地位に立つ。それ已に蘭人の受負者となり、蘭人は文武の權力によりて、其契約を果さんことを迫る。此に於てか舊王土司は、人民を鞭韃して勞作せしめ、以て其會社に對する貢納を果さゞるべからず。是より人民牛馬の如く。鞭影に驚くに至り其疎懶性を爲して勞作せざるものは、其舊王土司の領分以外に放逐せらる。何となれば土人には土地所有の權なければなり。是より土人山に入りて天生のバナナを食ひ、野に至りてアンボの土を食ふものあるに至る。然れども其久うして堪へず

スウラバヤ府に於ける稲垣氏夫妻



スラバヤ
蘭領東印度

して村落に歸るや、再び鞭撻の下に勞作せざるべからず。是れ所謂る强迫勞働法にして、瓜哇土人の幸福此より亡ぶ。

**蘭人政治の妙**

余は此の如き政策を案出したるは、何人の頭腦なるかを知らず。世間、バンデンボッシュ總督となすも、必ずしも一人の力にあらざるべし。後來二百年間、和蘭の瓜哇に於ける成功は、此原則を隨處に應用したるに外ならず。此制度の下に於て、舊王土司は和蘭の統治に屬するも、猶ほ名義に於ては治者たるを失はざるを以て、燕雀の君臣、自大の心、之がため滿足す。彼等は其官職を保たんがためには、東印度會社の總督に約束したるものは、之を納付せざるべからざるを以て、極力人民を鞭撻す。故に人民、若し負擔の重きに苦しまんか。彼等怨恨の情は舊王土司に集りて、總督蘭人に集らず。蘭人は制度の上より此の如く思考せしむるのみならず、時に觸れ、折に遇ふて、土人をして此く信ぜしめんことを勉めて怠ら

ず。故に若し舊王土司が總督蘭人と相爭ふに當りては、農民の同情は常に總督蘭人に集り、ブランダ人は人民を舊王土司の壓抑より救はんがために戰ふものなりと信ずるに至りたりき。固より一の國家が殖民地を有するや、政治上の責任は其避くべき所にあらずと雖も、新附の民を得て、國礎未だ固からざるに方りては、勉めて事端を釀すを避けざるべからず。事端已に釀すべからずとせば、現在存立する社會組織は、勉めて之を利用し、漫りに變革破壞せず。蘭人、自から其大綱を攬り、形勢の推移によりて、事を進めんとしたるもの、政治家の經綸なりと云はざるべからず。余は私かに疑ふ日本人をして若し此地に立たしめば、性急短慮なる政治家、必らず、同化、畫一、根本的變革等の意義なき壯語に醉ふて、舊王土司を排し、自ら直接政治を行ひ、事あれば舊王土司を味方とする能はず、一般平人の同情をも有する能はず、萬里獨往の客となるにあらずんば止まざるべし。余は此點に關して、蘭人、我に比して一日の長あるを否定する能はず。

**會社の失敗**

蘭人の政術は此の如く巧妙なりしに似ず、其商業政策は、全然失敗に歸したりき。其原因は會社が當初の目的を忘れて、政治を主とする政府となり、國土を擴張するに力を用ひて、商業に注意を怠りしこと、官吏の人選宜しきを得ず、會社の事業以外に、官吏自から私かに貿易を營み、船荷過重のため沈沒したる船舶少からざること、東洋貿易を專有するがため、怠慢放縱に流れしこと、其船舶往々英國船の攻擊する所となりて、或は捕獲せられ或は沈沒するものありしこと、及び資金の缺乏せること等にありと雖も、詮じ來れば會社の組織宜しきを得ず、重役自から株主を欺きて利益を占め、其寵幸によりて匪人を用ひ、之より萬事混亂、紀綱廢頽したるに外ならずして、猶ほ我日糖事件の如きのみ。故に千七百九十八年に至り、政府は全然會社を廢し、其負債一億三千四百萬フロリンを國庫の負擔として、國家

自から會社の事業を繼續するに至りき。而して此後の瓜哇統治に關しては、政府に『亞細亞領院』を設け、其政策を定めんが爲め、委員をして事情を調査せしめ、委員は『和蘭は其殖民地に對しては直接政治よりも、寧ろ監督政治を行はざるべからず。土人は其風俗習慣と共に、舊法舊制の下に土司に一任せざるべからず』と報告す。是より爾來制度に幾變更ありと雖も、此政策は歴代準據せられて今日に至る。

**強迫勞働法一變して耕作法となる**

東印度會社は失敗したりと雖も、二百年間國家が之によりて利益したるは、殆んど計量する能はず。何となれば和蘭が一時、世界の銀行翁となりしもの、實に東印度會社によりて、南國の利益を吸集したるが爲に外ならざればなり。去れば政府も東印度會社を廢止したる後、委員を設けて其破産始末を調査して後、其政策は大體に於て之を繼承するに決して更らに幾多の改良を加ふ。所謂强迫勞働法は、一轉して耕作法となり、其政術一層組織的となりて、一層掃蕩的の性質を帶び來る。即ち會社時代にありては、舊王の權力を其儘に繼承して、國土人民、悉く會社の有にして、舊王土司は會社より土地を借りて、更らに之れを小作人に小分して貸與するが如き關係となりしが、今や政府は獨り租稅として、人民の勞力を以て作りたる作物の幾分を受納するのみならず、全國の土地が其所有權の下にありと云ふ理由の下に、其土地に植付くべき作物の種類を制限し、或る地方には珈琲、或る地方には藍草、或る地方には香料を課して、之れを耕作せしめ、米其他歐洲の市場に於て需要なきものは、土人の生存に必要なる少量の外、之を作ることを禁ず。此命令耕作は獨り人民が借地人として納むる租稅に用ひらるゝ作物のみならず、政府が人民の所有品として、一定の代價を仕拂ふて買取する作物にまで應用す。而して此價格ある耕作物すらも、政府に賣拂ふの外、他に賣ることを禁ぜられ、而して其價格はまた政府の命令によりて定めらる。若し舊王土司にして一片、其

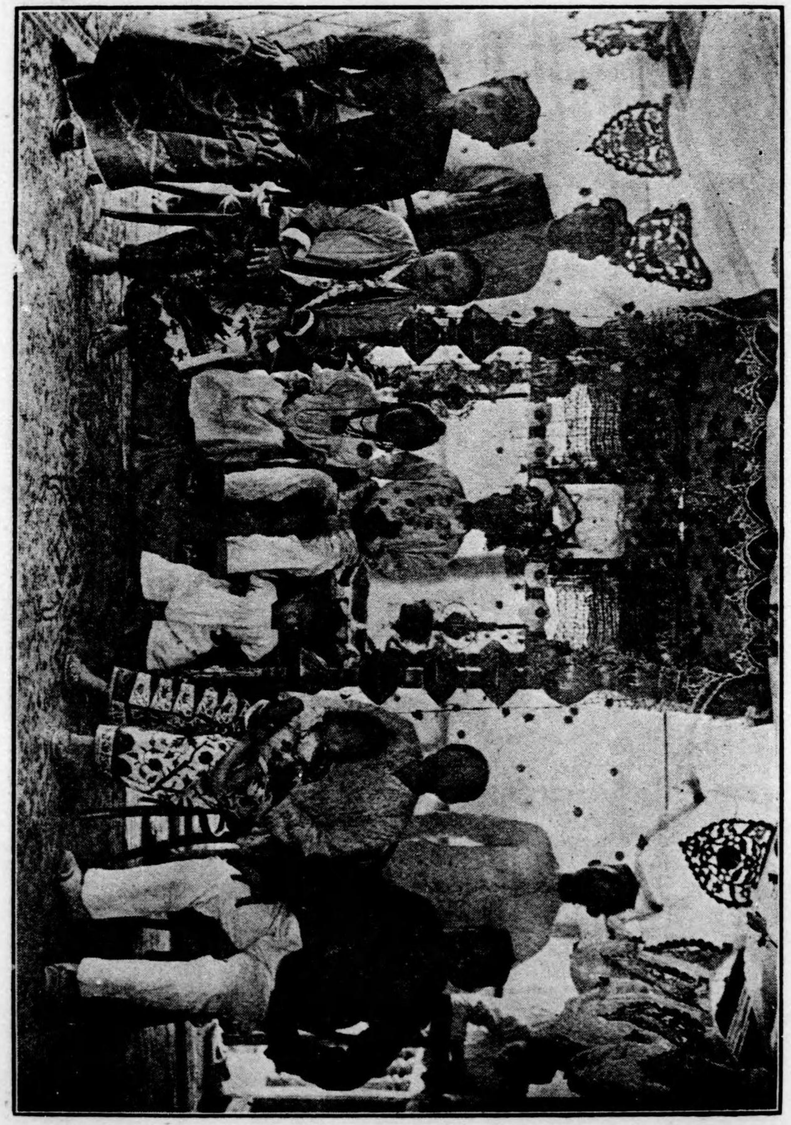
人民を憐むの意あらば、極力此の如き政策を匡正すべきに、彼等は寸毫匡正の志なきのみならず、政府より來る賂遺に迷ひ、却て蘭人を助けて其統治區域内より、年々必らず幾何の砂糖珈琲を賣り出すべしと約し、人民を鞭撻して其約束を果さんとす。余が最も驚愕したるは、蘭人と舊王土司との約束賣買が直接に條約せられず、支那人か其間に立ちて契約當事者の一人たることにして、舊王土司は己の所有したる土地を蘭人に與へて、却て自ら大借地人たるのみならず、此大借地人たるの權利すら之れを用ゆるの道を知らず、また一定の年限を期して、之れを支那人に貸與して利を貪り、而して支那人は政府と約束して、一定の作物を年々政府に賣らんとし舊王土司は之に必要なる勞力を集むるに就きて支那人を助くるの義務を負ふに至つては、其愚憐むに勝ゆと云ふべし。今熱帶地方に於て最も困難なる問題は、勞力供給の一事にあり。是れ熱帶は人口の稀薄なるに加へて、山にバナヽあり、河海に魚あり、風雪を防ぐ家屋の必要なく、寒氣を防ぐ衣服の必要もなきが故に、人民の勞作を促がすべき誘因なく、一日勞作して賃銀を得れば、三日は逸樂飲宴せんとするもの多ければなり。然るに舊王土司は僅少なる利益を分配せられて、此最も困難なる義務を負擔し、其勞力の得られざるや、鞭を用ひて人民を強ゆ。此に至りては人民悉く奴隷の域に墜落したるものにして、從前の政治も人民が悉く王臣たる原則は相同じと雖も、此の如く統率的に實行せられざりしを以て、多少生を聊するの地ありしと雖も、此に至りて人民最も痛苦を極む。然れども此の如き鞭撻も、猶ほ十分の作物を生ぜざるや、民屋農家の前後にある僅少の園庭にまでも珈琲を植ゑざるべからず。先人の墓上にまで、砂糖を植ざるべからずと云ふに至り、人民の逃散相尋ぎ、村邑の烟火、爲めに消えて蕭條たるものすらありたりき。會社廢せられて百事改端すと雖も、此田制のみは益々苛酷を極む。唯だ舊來農耕の上に人民を苦しむ

るの外、舊王土司及び會社、共に故なく多數の土人を家事、旅行等に使役して賃銀を與へず、或は與ふるも名義に止るまでの少額を與ふに過ぎざりしが、會社廢せられて後、總督デーンデル極力此等の弊風を匡正せんとし、凡て無報酬を以て土人を使役するは道路溝河の修築、政府用物品の運搬、船舶荷物の上下等に限ると規定したる一事のみは、多少土人の痛苦を減少したりき。

**英人が試みたる自由主義の失敗**

和蘭が東印度會社を廢止して總督府を設け、其後久しからずして佛國大革命の結果として、英國が一時瓜哇を占領したるは前章已に論じたるが如し。自由及び個人の權利を主張するに熱心なる英人は、瓜哇に於ける蘭人が土人を强迫して勞作、農業を爲さしむるを見て、傍觀することなく、直ちに之を改革せんとして、第一强迫勞働によりて作りたる產物を、法外の低價を以て買取ること及び舊王土司が縱まゝに土人を使役することは、全然之を廢止し、第二に

蘭領セレベス群島サマリンダの王及妃



爪哇人とゝもに暮せる土人の一族

政府は各土人の土地より、一定の租税を徴收することを得るも、土地の耕作は何物にても人民の自由に一任し、且つ其賣買も人民の自由とし、土司の手を經ず、政府自から直接に人民に政治を行ふこと、第三地方の事情を案じ、穩當なる借地料を以て、土地を人民に小作せしむることを原則として法令を作り、且つ此法令に準據したる仁政を行ふこと頗る勉めたりと雖も、その結果は案外に良好ならざりき。是れ爪哇人、久しく奴隷の境界にあり、卒然として解放せらるゝも容易に自から方向を定めて自立する能はず、且つ怠慢、性となりて、他より强迫する者なくんば、努力勞役するの氣魂なく、耕作者は其賃銀を增加して、勞力を得んとするも容易に之を應ずるものなく、其結果として農業は衰退し、貿易は縮小するに至りたりき。

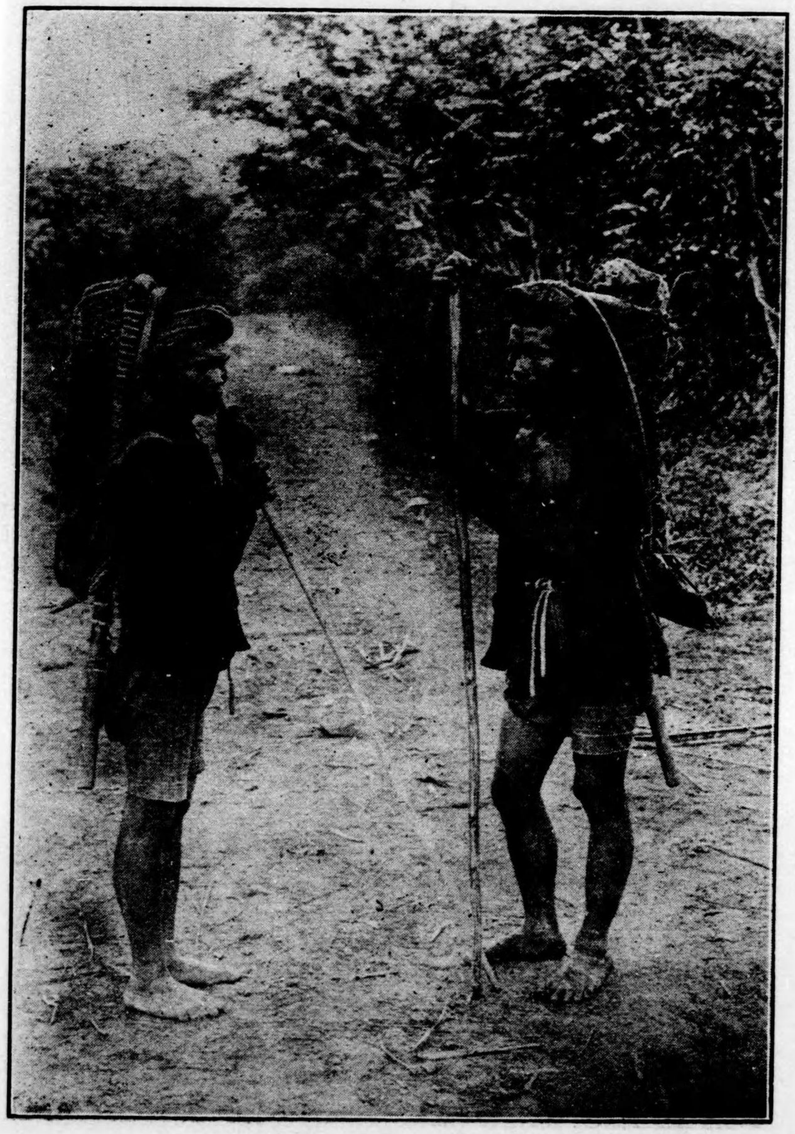
**和蘭本國の輿論耕作法を一變す**

故に革命戰爭の後、英國が爪哇を和蘭に返附するや、和蘭はまた一時に英人の施設を廢絶して、多く舊制に復し、多少の改修を加ふ。

即ち英國時代にありては、各土人より租稅を徵收したるも之を復舊して、一村若しくは一邑より徵收することゝす。是れマレー及び多くの東洋各地にありては、村落は一の自治體にして、刑罰すらも村落に課し、以て罪人隱匿の地なからしむるの風習なるを以て、一村に稅を課し、轉々して各人に分課せしむるは、怠納者なく且つ割合に公平なるを以てなり。但ブレンガル地方のみは納稅は個人の責任たり。第二、村落の課稅は年々の定額を定めず、收穫の狀況を案じて毎年之れを變更することとし、第三に人民は其租稅として納むるものは、必ずしも金納に限らず、其便宜とする所によりて納稅するを得しむ。而して、英國が土司の手を經ずして直接に人民を統治せんとしたるを排し、全然舊制に復し、土司を以て人民直轄の治者となす。是れ最も土人の感情利害に通じ、到底外人の得て學ぶ能はざるものを有すればなり。而して舊王土司が土人を强迫して勞作せしめ、且つ耕作物の產出を受負とする一事のみは、愈よ勵行せられて力を餘ます所なく、政府が製產多き地方にありては、舊王、土司、及び村老に與ふるに政府の土地を以てして、之を褒賞するに至りて極まる。元來、舊王土司が勢力なき所以は、土地を有せざるが爲めのみ。今や土地を得るやマレー人間に於ては人民は土地に附屬するものと信ぜらるゝがため人民に課役を命ずるの權を生じ、自大、放縱、壓抑を極め純然たる封建の舊制を小模型の中に再生して、甚だしきは怠納者を追放し、其妻子を家に入れて奴隸たらしむるものあり。痛苦の聲全島に充溢し、遂に千八百二十年エヅ・ウアルド、デツケルを『和蘭貿易會社の珈琲競賣』と題する小說を著はして天下に訴ふるの已むを得ざるに至らしむ。デツケルは和蘭政府が瓜哇に遣はしたる小官吏にして、官、副理事に至りしが、其長官が土司と通謀して、土人を掠奪抑壓するを見て、慷慨の情禁ずべからず、蘭人が飲むコヒーが、如何に土人の血によりて栽培せらるゝかを述

べて、其義憤を公衆に告げたるものにして、一時、天下に傳唱せられて、人心を鼓動す。此時瓜哇總督は其權力の過大にして、且つ其事實を母國に秘したるより、各黨の猜疑を受け、加ふるに自由黨漸やく議會の勢力を得て、其自由主義を隨處に應用せんとするの氣運に際會し、此等の著書によりて煽揚せられたる人心と相吻合し、千八百七十年の議會には殖民政策に關して討議を開くに至り、遂に田制法を制定して强迫勞働を禁じ、併せて政府の事業專有を廢し、單獨なる歐洲人の渡航營業を奬勵し、且つ一村が勞働契約を結ぶを禁じて、土人を土司政府の强迫より保護す。此に至りて瓜哇は他の諸國に於けるが如く、自由勞働、自由營業の國となりて、二百年來の歷史此に終を告ぐ。唯だ政府が國有土地の珈琲耕作に適當なりと見る地方に居住し、且つ政府の土地を借受くる土民に對してのみ地租に代ふるに勞力を以てし且つ其生產する珈琲に、强迫買收法を適用するは以前に異ならず。故に千八百七十

蘭領セレベス島土人



蘭領セレベス島ゴロンタロ土人

年の法律によりて強迫耕作法は廢止せられたりと雖も、珈琲耕作に對しては除外例ありとす。但し此方面に於ける強迫耕作法も年々歳々消滅して、自由耕作に變じつゝあるは掩ふべからずとするのみ。然れども爪哇が今日の如く砂糖コーヒーの耕作全國に普遍して、一大國産となりしものは強迫勞働の結果たるを忘るべからざるなり。別に強迫勞働法を行ふもの、英領印度に於て、少しく別個の形式に於て之を行ひたることあるも、今は已に之なく、西班牙は曾て之をヒリッピンに行ひたるも、千八百八十年之を廢止す。此等の制度今日に於ては行ふべからざるも、其當時該地方にありては奴隷制度より自由勞働に移るべき過渡時代に於て、一大有效の制度たるを忘るべからざるなり。

**土人の教育**

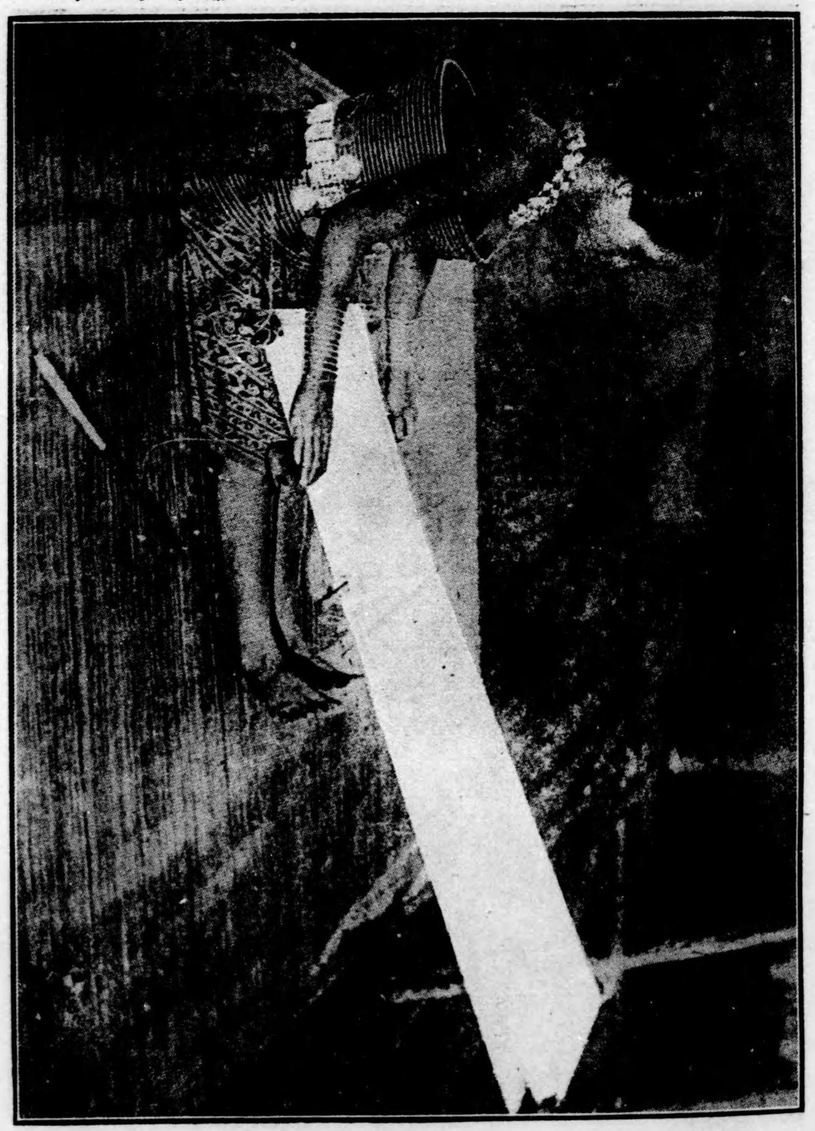
以上は爪哇が蘭人の手中に落ちし以來の政治及び制度變遷の大要にして、如何に蘭人が土人を待遇したるかを見るべし。今や慘虐なる制度は悉く撤廢

せられ、土人は自由の天日を得たるが如し。然れども是れ唯だ一人の壓政者を離れて、他の壓政者の手中に落ちたるのみ。智識なき自由は、適ま以て人をして陷穽に陷らしむるを助くるに過ぎず。舊王土司の鞭韃を免れたる土人は、却つて歐洲人、支那人の經濟的繩索に縛せられて、また動く能はざらんとす。且つ久しく奴隷の狀態にありたるものは急に之を解放するも、容易に奴隷の心性を脱する能はず。之を脱するは唯だ教育の力なりと雖も、和蘭政府はまた危險を犯して、土人を教育するの愚を爲さゞらんとするもの、如し。即ち千九百六年の報告によれば、瓜哇及びマヅウラ島に於て、土人の爲めの官立小學校は三百二十三にして、七萬五千人の學童あり。私立小學は四百四十六にして、五萬人の學童あり。政府が之に費す所は二百三十萬ギルダアに過ぎず。此外別に舊王土司の子弟の爲めに、四個の學校ありて二百六十人の學童を有す。三千萬人の子弟を教育するに、此僅少の學校を以てす。思ふに政府は學校を以て一種の裝飾とするに止まり、其普及を望まざるものか。蓋し土人教育問題は何れの殖民地ありても、一大難問題たり。大抵殖民地には固有の文學の、土人を教育するに足るものなきを以て、宗國の文字文學を教へざるべからず。然れども宗國の文字文學を知らしむれば、日常の用に供するに止らず、必らずや其中に周流する自主、自立、國民、人種等の精神に感觸せざる能はず。服屬したる人民をして此等の文學を知りて、此等の精神に感動せしむるは、即ち彼等に叛亂を教ふるに等し。是れ英國が印度に行ふたる所にして、其結果として、『印度人の權利』、『印度人の印度』なる運動を生じて、自から其控御に窮するは中外の等しく見る所なりとす。此點に於ては、蘭人は英人よりも却りて實際的人種と稱するを得べきか。

**奴隷の如き生活**

其結果として土人は依然たる土人にして、近代生活は寸毫も彼等の間に入らずと云ふも過言にあらざるが如く、柱は依然として竹にして、屋根は舊

の如く藁にて掩はれたる家屋の中に、葬式にて唱ふが如き音樂を歌ふを聞きては、亡國の民の亡國の哀音を聞くの感、禁ずる能はず、彼等は曾て洋服を着る能はず、靴を穿つ能はず、歐洲風の帽子を着くる能はず。若此禁令を犯すものは、一ヶ月の禁獄に處すべしと定められたるが、今日に於ても昔時の風俗を墨守して遷らず、依然として熱天炎地に素足にて歩行し、體を掩ふにはマレー風の上着と、湯文字とを以てし、上流の婦女のみは、我國にて幕府の貞享前後まで用ひられたる『かつぎ』の如き更紗木綿を頭部より被むり、男子は風呂敷の如き更紗木綿を以て頭部を掩ふ。蓋し風俗上の禁令は今日は効力なしと雖も、和蘭官吏が土人の風俗は斯くあれかしと望む一事已に足れり。土人は無効の法律をも墨守して移らす。土人は富人と雖も一等汽車に乗る能はず。和蘭人は如何に貧窮するも、土人の家の雇人となる能はず。是れ祖國の自尊心を傷くればなり。土人は如何に有爲卓拔の才幹あるも、歐洲人を妻



ジャワ人の古式　ミナハサ族人の婦人

皮膚、もふる所相貌、なりは千二百年の頃、性格、生活の狀、漂流してゐる日本人に酷似す、土着した日本人が此に土産した口碑たの

ドイツ領三島こどもの踊

同盟海岸風土記こどもの

とする能はず。是れ土人をして歐洲人を天上の人種と信ずる『美風』を破らしむる端緒なればなり。和蘭人は如何に才色雙絶の土人女子を發見するも、之を正當なる妻女として迎ふる能はず。是れ土人をして歐洲人と同等なりと信ぜしむるの基なればなり。余は中部爪哇より南部爪哇に到る頃、汽車、市街等にて勞働者を使役して賃銀を與ふるに、彼等が膝を屈し、雙手を重ねて之を受くるを見　また土人のクーリーが車室の中に入り來りし時、蘭人が之を蹴るも一言を發せずして逃げ去りしを見たり。

## 爪哇の將來は一大雜種國

蘭人は斯の如く、土人を敎へて蘭人を天上の人の如く見て、敢て抗する能はざるを信ぜしむと雖も。『愛』の力は、法制を破ること、猶ほ我上代の良民賤民の區別が、賤民中の美人の力によりて蹂躙せられたるが如く、蘭人は如何に人種的自尊心を維持せんと欲すと雖も、愛の前には法制なく、相競ふて

蘭人を娶る。然れども法禁の命ずる所を破る能はざるを以て、正當の妻とせず、妾婦として養ふのみ。和蘭政府また此事實を默認するの外なく、蘭人は土人を娶る能はざるも、蘭人と土人との間に生れたる混兒血を妻とすることは公認せられ、而して土人は軍隊に入るも、其昇進は制限せらるゝ所あるに反して、混血兒は昇進して將軍たるの權利を有し、現に瓜哇守備隊司令官は此種の人に屬す。夫れ斯の如く土人の婦女は蘭人と相娶る能はずと雖も、其蘭人の妾婦となるや、其子は蘭人と同一の權利を享有するを以て、所謂る母は賤しけれども子は尊ときの風を生じ、土女相率ゐて蘭人の妾婦たらんとするを希ひ、全國到る處混血兒を見ざるの地なしと云ふも過言にあらず。殊に瓜哇の守備隊は和蘭の常備軍を派遣せるものにあらず、給料を懸けて募集したる雇兵にして、其給料は以て歐洲婦人を妻として養ふに足らざるが爲め相率ゐて土人を妾とし、非常の速力を以て混血兒を製産す。余は多くの殖民地を見たれども、瓜哇の如く混兒血多きものを見ず。而して和蘭政府また此事實を承認して、三種の法律、二種の政治を行ふ。曰く、歐洲人及び之と同階級の國民に適用する法律政治、曰く、土人及び土人と同階級の他の亞細亞人に對する法律政治是なり。而して滔々たる混血兒が、皆な歐洲及び是と同階級の種族中に編入せらるゝがため、其自尊自大の氣、近つくべからず。邊境、群島、瓜哇の中央と交通少なき地方に於て、日本人及び英人に對して、往々亡狀あるものは、多くは混血兒官吏なりとす。余は曾て和蘭の一官吏に對して、瓜哇の混血兒は和蘭人よりも、更らに一層和蘭人なりと評したるに、其人唯だ苦笑するのみなりき。而して彼等は土人と親近ならざると共に、和蘭人に對しても、中心欝々悶々たること少なからず。往々にして本國より來る輕薄少年が、本國人たるの特權によりて、經驗ある老人の混血兒の超越するを誹るものなきにあらず。思ふに瓜哇に於ける將來の一大問題は、混血

兒にあらんか。

**瓜哇歳入の缺陥**

和蘭人が土人を待つや抑壓を極む。余は之を評して不法若しくは慘虐と云ふを好まざるも、和蘭人が、文明の名によりて之を領有せんには、今少しく土人の生活慾を刺激するも、決して和蘭の患を爲すものにあらざるべしと信ず。然れども和蘭政府は其慈悲深き壓抑によりて、飽まで土人の生活を現狀に止まらしめ、永久に此國を農業殖民地たらしめ其土の産する所を以て、歐洲の市場を控制せんとするの外、餘念なきもの、如し。今瓜哇の面積は五萬五百五十英里にして其十分の四は開墾せられたりと云はゞ、蘭人が如何に農業に勉勵せるかを想像するに難からず。過去三十五年間に和蘭政府が此領島より本國に吸集したる純益、四億グルデンにして、毎年の純益或は一千萬グルデン、時として四千萬グルデンに當る。蘭人各自の貿易より得る處は此外にありと云へば、其土産の如何に豐富なるかを想見するに足らん、然るに瓜哇政府の歳入は左の如く、近年不足勝にして大凡毎年八百萬圓内外の不足あり、一に本國の補助を仰ぐと云ふに至りては、驚くべき現象と云はざるべからず。

| 歳 | 入 | 歳 | 出 | △不足 ⊙剩餘 |
|---|---|---|---|---|
| 千九百四年 | 一五二六一七二三三 | 一六六五三七〇九〇 | △ | 一三九一九八五七 |
| 千九百五年 | 一五五六四六〇六三 | 一六六二二二七七八 | △ | 一〇五七六七一五 |
| 千九百六年 | 一六九三四〇〇〇四 | 一六七九五〇八五一 | ⊙ | 一三八九一五三 |
| 千九百七年 | 一八四七一六七六七 | 一七一九九〇五〇〇 | ⊙ | 一一七二六二六七 |
| 千九百八年 | 一七五一四二三九六 | 一八一七四六〇一二 | △ | 六六〇三六一六 |
| 千九百九年 | 一八〇一四八七五五 | 一八六三四八五一〇 | △ | 六一九九七五五 |

右の歳入の内容を案ずるに、輸入税、輸出税、消費税、地租、營業税、人頭税、相續税、印紙税、專業受負税（阿片吸煙舖、賭博店、質屋）、礦山、山林許可税、政府所有の土地より生ずる産物の賣上高（コヒー、錫、シンコナ）等にして、甚しきは

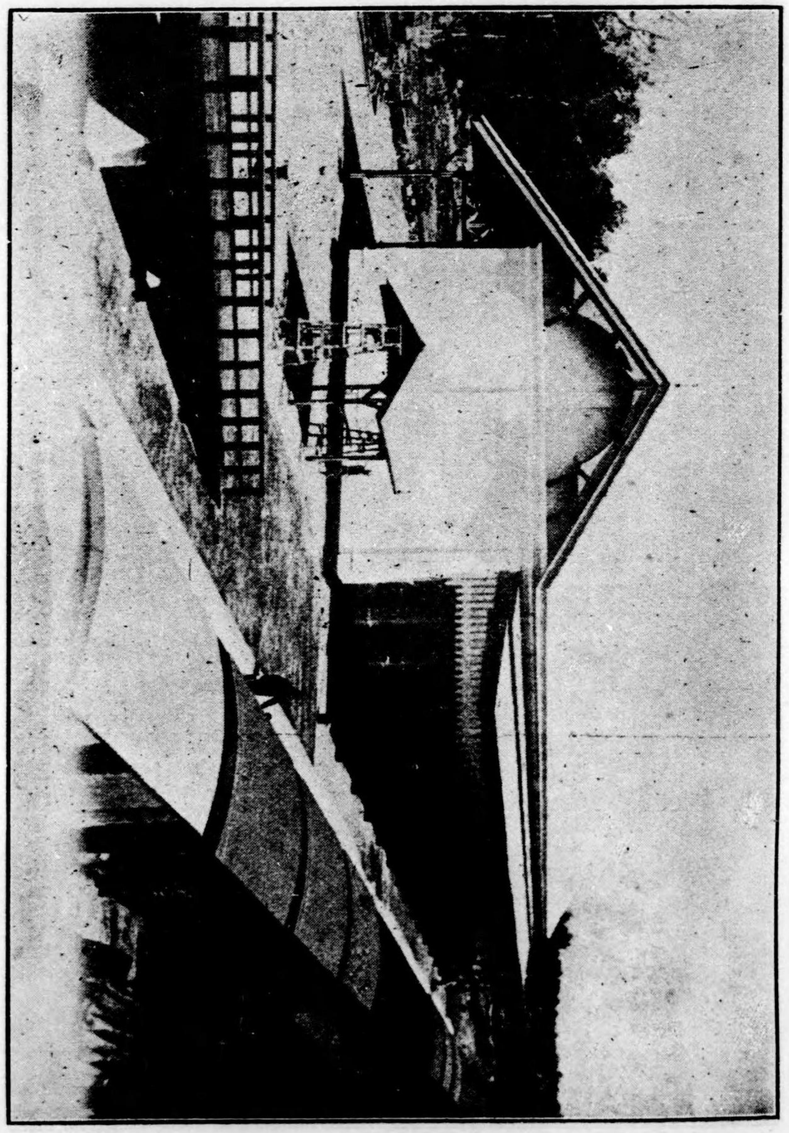
一本の菓樹にまでも課税す。而して其税目に於ては前後變化なきに係らず、漸やく不足を生ずるに至りしものは何ぞ。蓋し會社時代は言ふまでもなく、總督時代に至りても千八百七十年の改革以前は、蘭領印度の財政は之を議會に詳示せず、總督の獨斷を以て萬事を決定したるがため、好都合に運ばれたりと雖も、七十年の改革以來、殖民地の財政は、本國政府之を定め、議會の協賛を要することとなりしを以て、收支の增減自由ならず、同時に强迫勞働法の廢止以來、政府は無代價に等しき勞働を以て、國有の土地を耕作せしむるの便宜を失したるもの、歳入缺陷の重なる原因たりと云はざるべからず。

**和蘭政府の短見**　斯の如き形勢の變化に處して、和蘭政府が取るべき政策は土人の生活狀態を改良して、生活慾を刺激し、彼等をして自から蘭貨の購買者たらしむるにありと雖も、和蘭政府は依然として、土人を壓抑して其耳目を開かしむるを好まざるが如し。蓋し殖民政策に關する和蘭人の智能は、殆んど東印度會社及び、爪哇總督府に蓄藏せられたりと云ふも過言にあらず。而して會社の廢せられて、總督が其專制獨斷の權を奪はれて以來、和蘭には殖民政策と稱するものあることなく、唯だ勉めて殖民地より收歛せんと欲する外あらざる凡庸政治となり了る。千八百七十年殖民大臣ドアールは自今蘭領殖民地よりの貢金を毎年一千萬圓に制限し、之より以上の剩餘金あらば、之を以て殖民地の改良進歩のために消費せんと計畫したれども、衆議院は之を否決し、剩餘金は一切本國國庫の所得とするに決したり。是れ衆議院は多くは算數を尚ぶ中等社會の代表にして、殖民地を開發して、未來の寶庫とせんと云ふが如き遠謀深慮は、其能く解する所にあらざればなり。此の如く中等民族の勘定政略と、政治家の殖民政策と相爭ふ間、千八百七十三年のスマトラ戰爭起り、兵禍連年結びて解けず、此役に費したる數千萬圓と、爾後年々の設備との爲

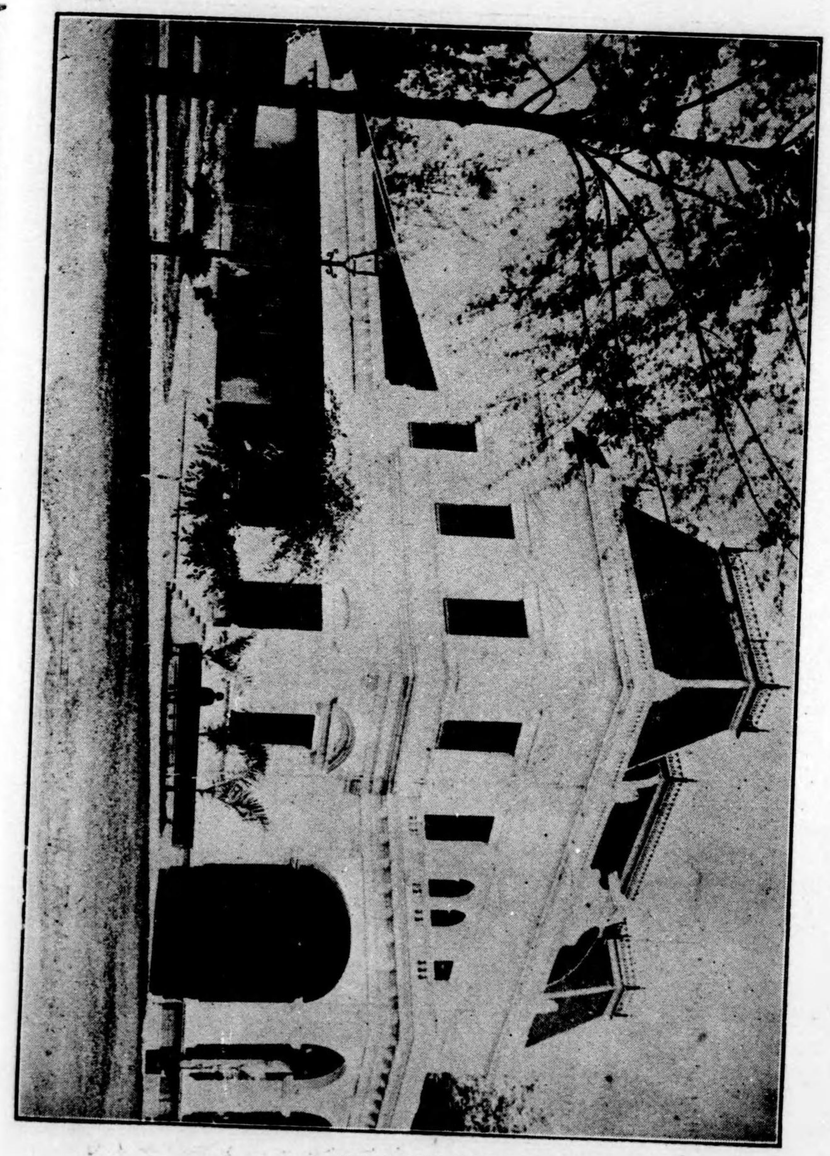
め、蘭領印度の財政は、漸次、剰餘金を生ずること少なきに至る。然れども和蘭政府は、猶ほ此殖民地より黄金を收集するの政策を廢棄せざるが如し。

**外國人蘭人共に土地を買ふ能はず**

蘭領殖民地を開發して、其財源を涵養する第二の手段は、外國の資本を注入せしむるにありと雖も、和蘭政府は一切の土地を、外國人は勿論、和蘭人にすらも賣却せしめず、土地の轉移は唯だ其借地權の轉移に過ぎず。東印度會社時代より、瓜哇及び各島嶼の土地の大部分は國有にして、舊王土司も皆な國有の土地を借受けて、更らに之を土人小民に分貸するものに過ぎざりしは余が前條に於て說きし所なり。其後東印度會社の役員に賞與せんが爲めに、土地を與へたるより私有地を生じ、また英國の一時占領時代に私有地を增加し、更に總督府時代に入りて强迫耕作法を勵行せんがため、舊王土司に土地を分與してこの政策に協力せしめたるより、更に私有地を增加し、土地國有の原則ありと雖も、事實は



メイドラ島ゑるフラバヤ停車場



スイトラ島メダン府理事官邸

往々にして例外の私有地あり。而して此私有地の大部分が土人の手中にあるを以て狡猾なる蘭人、支那人等が土人の愚朴に乘じ、名義のみの金錢を與へ、甘言を以て其土地を奪取するもの少からず、今日に於ては、私有地の大部分は蘭人支那人に歸す。此に於てか法令を以て土人の外、土地を購ふの權なしとするに至りたり。然れども猶ほ借地權の名義の下に、土人の土地が外國人の手中に入るもの多きが爲め、政府は全國の私有地を買上げて再び國有の故態に復歸せしめんと欲し、近時毎年五十萬圓の豫算を計上して私有地を買上つゝあり。然れども事業の宏大に比して金額少きがため、今や公債を發して、一時に全國の私有地を買上げんと計畫しつゝあり、本國政府の同意せざるが爲め、其事容易に行はれ難しと雖も、本國政府も結局殖民地政府の提議に同意するの外なからん。余曾て政府の官吏に問ふに何故に土地を國有とするかを以てす。彼答て曰く、何故と云ふか、請ふ蘭人支那人が如何なる手段を以

て、土人を欺きて土地を盗むかを見よ。彼等が借地の名義の下に所有する土地は、一エークル六七圓の少額を以て買ひたるに過ぎず。夫すらも借金の利子のために抵當として占領せらるゝなり。甚しきは其製造所に通ふ職工に給料を前貸して、其償還の後るゝや、其所有地を占領せしものすらあり。而して強迫耕作法は已に法律によりて廢棄せられたりと雖も、然れども蒙昧にして久しく奴隷の境遇にありしマレー人は、土地を有するものは即ち人民を有するものなりと妄信し、他人の土地を借るものは、地主のため奴隷の如くに使役せらるべきものなりと信ずるもの多きがため蘭人支那人にして、土地を私有せば、強迫耕作の舊習を呼び起すは勢ひ自から然らしむる所なり。是れ政府が土地回收に鋭意する所以のみと。今や世界の經濟學者の多くは、多少にても社會主義の色澤を帶びざるもの少なし。社會主義の極意は土地の國有にありとせば、瓜哇政府は社會主義の理想を實行しつゝあるものにして頗る興味ある政治と云はざるべからず。

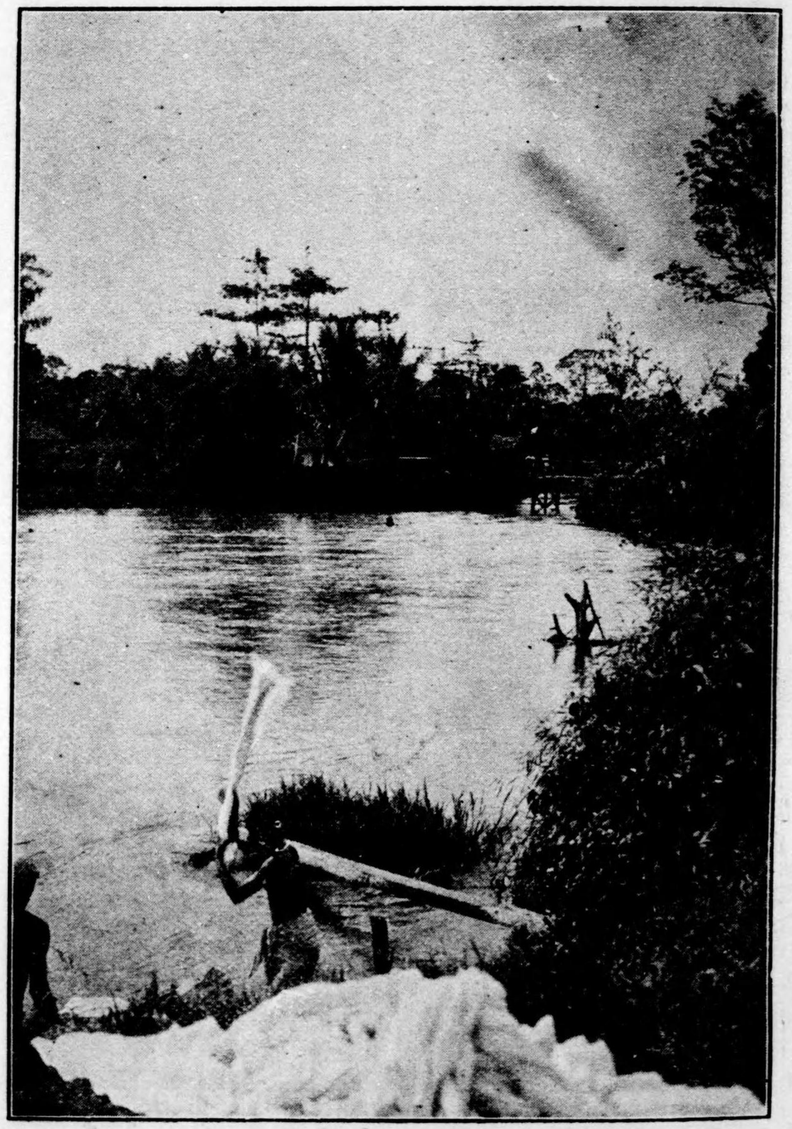
**今日の田制**

以上の制度の結果として、蘭領殖民地の土地には三種の耕作者あり。第一は政府の土地を政府自から耕作する者にして、此土地に於ける珈琲の耕作には強迫耕作法を用ひ、珈琲以外には自由勞力を雇使す。而して此強迫耕作法を施行せざる地方に於ては、凡ての階級の土人より、毎年一ギルダアの人頭税を徴收して、強迫勞働に代ふ。第二は私有地にして、曾て其大部分が土人の所有なりしも、今は大部分、蘭人、支那人の所有に歸す。第三は政府の土地なりし藪澤山林を私人が借用して開墾したるものにして、其年限は七十五年の長期契約にして、其子孫之を繼承するを得べく、一種の有限所有權と云ふを得べし。殖民地政府は此の如くして土地所有權の蘭人外國人の手中に落つるを禁ずと雖も、其排外心に由來せざるはバンカの錫鑛事業は、政府の所有たるに係はらず、其開掘、溶解、運搬等は一切を支那人

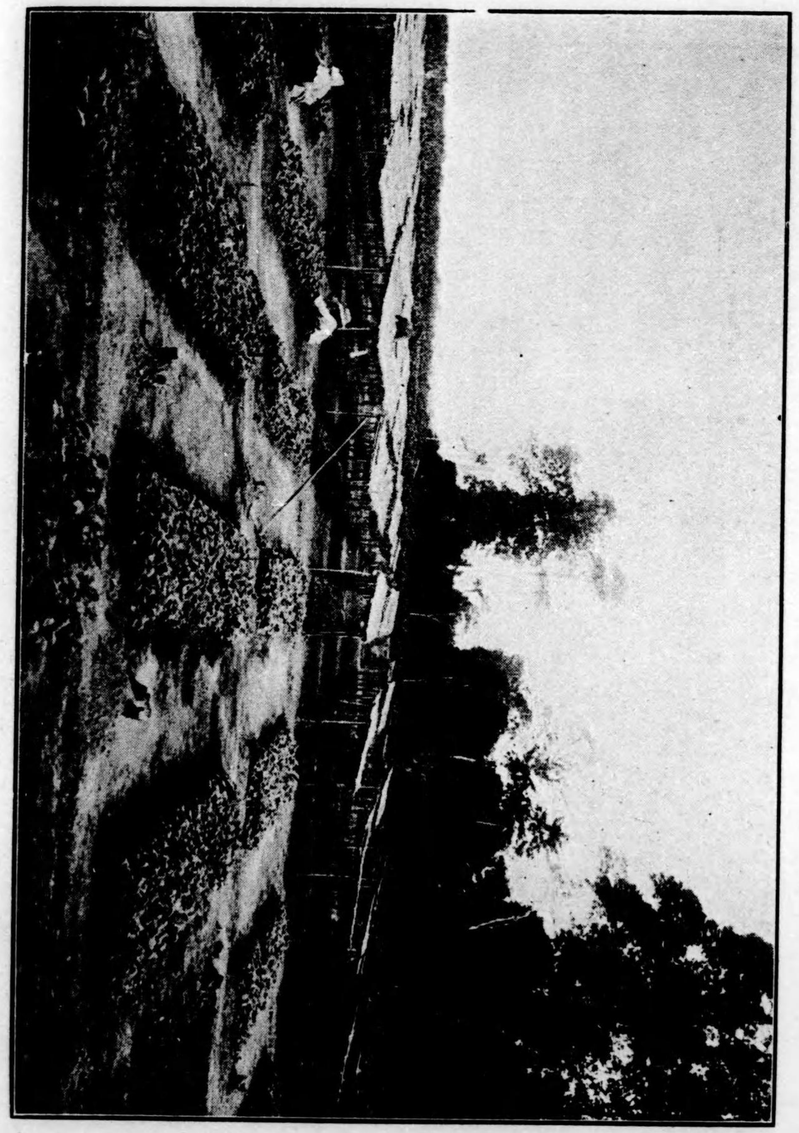
の受負に一任し、或は瓜哇支那汽船會社の如きは、支那人の株主たるに係らず、之に保護金を與ふるを見て知るを得べし。

**土人日本を好む**

和蘭政府は以上の如く土人を保護するに於て極めて力を用ゆ。其衣服風尚に就ては勉めて舊態を維持せんと欲するが如き、學校教育の普及を謀らざるが如き、或はまた歐洲人共通の風習に背きて、基督教の傳播を助けず、土人をしてマホメット教の信仰より移らざらしめんとするが如き、確かに壓抑政策に相異なしと雖も、余は之を以て慈愛ある壓抑と稱するに躊躇せず。何となれば若し教育行れ變革來り、近世式の生活侵入せば、土人の幸福は永へに去るべければなり。然れども春來れば、都邑にも、深山にも、花は一時に開く。人種的覺醒の精神は、漸く世界の全面を吹き回り、此南荒の地に於ても、蘭人の家長政治は、醒めかゝりたる土人の目を閉ざしむるに足らざらんとす。蘭人は瓜哇其他の島嶼に於て、善政と惡政と



スマトラ土人布帛を打つて漂白する圖



スイフラ極東耕地の圖

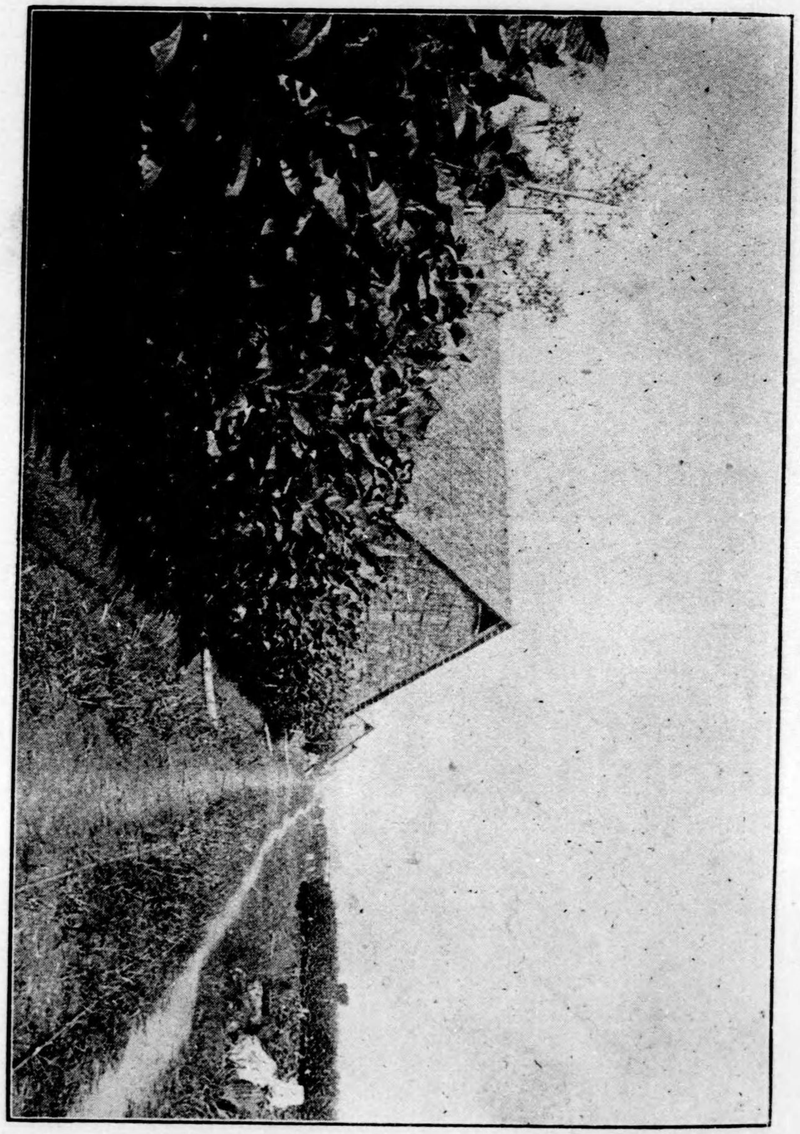
を併せ布きたり。土人は曾て蘭人の善政に隨喜したるも、覺醒したる眼に見ゆるものは惡政のみ。且つ三百年間蘭人に屈服したるを見て、マレー人に剛健なる氣魄なしとせば誤謬たるを免れず。曾て元人が大兵殺到を以てバタヴィヤの王廷を威迫したる時、其使者の面に黥して之を放ちたるマレー人は、元の使者を鎌倉に斬りたる日本人と、其自尊無諱の一點に於て徑庭あるを見ず。蘭人が其城郭をバタヴィヤに構へて、堅艦利砲を以て之を守りし後、二百餘年にしてマレー人の權利を回復せんとして起ち、五年の間全島を騷動せしめ、和蘭人をして殆んど國力を擧つて鎭壓に勉め、一萬五千の壯丁を戰場に捨て、幾千萬の國用を費して僅かに能く全島を鎭定せしめたるジツボネゴロ（ジヨクジヤ王の妾腹の子）はマレー人の勇敢膽略のために氣を吐くものと云ふべし。マレー人は今猶ほジツボネガロの死を信ぜず、マレー人危急の時は再び顯れて戰ふべしと信ずる者少からず。去ればスウラカルタに於て

もジョクジャカルタに於ても、舊王の朝廷は坐しながら年々幾十萬の贈遺を和蘭政府より受け、其家居生活は其自大の心を滿足せしむるに足るものあるに係らず、心中常に蘭人を怨恨して、且つ之を輕侮するの念禁ずべからざるものありて、其臣僚の貧困苦痛と相合して、常に瓜哇内政の困難を釀生す。凡そ何れの殖民地にありても其舊王、土司を待つの厚さ、和蘭の如きは少なく、其成るべく舊王、土司を用ひ、且其名によれる政治を行ふの一點は最も巧妙なる政策にして、蘭領統治の成功は、首として此政策に歸せざるべからずと雖も、此厚遇重遺も、以て中心より彼等の心を攬るに足らず、滿腔の不平、時ありて和蘭人を憂虞せしむるものあり。卽ちスマトラのアチーンに於ては、土人蜂起して殆んど交戰國の狀態にあり。ニユギニアに於ても、セレベスに於ても、土人の叛亂絕えず、常に兵禍に勞る。若し和蘭人にして馬上に取りし天下は馬上にて統治すべしとの思想を以て、單すら威力を以て諸島を治めんとせしならば、其統治は決して今日の如く成功せざりしならんと稱せらる。然るに此マレー人は今や日本が海表に崛起し、一戰して支那を破り、再戰して露國を破りたるを見て、歐洲人にあらざる者、また能く爲すに足るとなし、恰かも旅客が長夜を脫して曉星を望みたるが如く、日本人を思慕するもの少からざるに至りて、瓜哇政府の憂虞一層增加するに至りたり。

**蘭人の憂虞**

和蘭の國際的地位は常に甚だ不幸なりと云はざるべからず。千八百年の大革命に方りてや、佛國革命の侵入に逢ひ、中立を維持する能はずして、佛國に黨し、佛國敗績の後、漸やく英國の厚意によりてセーロン島を除くの外、東洋の領地を回收するを得たりき。近時露國がバルチック艦隊を日本海に送るや、和蘭政府局外中立を公表するも、殆んど露國のために之かられんとしたりき。當時和蘭人は心中また私かに露國に黨したりと思はるゝもの少からず。瓜哇の新聞紙が露國

の敗北を報道するを禁じ、土人をして成るべく露國の敗北を知らざらしめんことを謀りたりき。而して此頃より瓜哇在留日本人の擧動に對して深く注目し、殆んど十中の八九、皆な國事探偵なるかの如く、監視の下に置かるゝに至りたりき。然れども禁菓を食はんと欲するは、エデンの花園を追はれたる以來、生人の通情なり。土人は此の如くして其耳目を掩はるれば掩はるゝほど、日露の關係、日本の近事を知らんと欲して已む能はず。昨年スウラカルタのソルタンが其市中を通行するに方りて、日本雜貨店の前に至りて其馬車を止めしが、車中にて陪乘の和蘭侍從武官と相語るもの久うして、侍從武官、車を出で、日本雜貨店に入りて日本皇帝の年齡幾何を問ふ。雜貨店主が陛下の寶算を以て答ふるや、彼は一揖して去り、王を促して一鞭を加へて馳せ去りたりき。思ふに是れ王の意、日本雜貨店に入り、日本人の口より、日本の近事を聞かんと欲したるも、侍從武官の何事を知らんとするかとの質問



スイトラ島ケチンベン
薩摩雜誌の圖

メイドの間でよく流行なる煙草

に逢ふて、僅かに陛下の寶算を知らんがためのみと推諉したるならん。而して侍從武官は陛下の寶算ならば余之を問はば足れりと號し、王を止めて車を下らしめざりしならん。玆に至りてはスウラカルタの王も一の俘囚に過ぎざるを知るべく、其日本の近事を知らんと欲する所以の心事も、また畧ぼ察すべきのみ。またボルネオに於ては土酋、一日、日章旗を掲げたるに、四隣響應したることありと云ふ。若し文學的修辭を以て之を形容すれば、瓜哇の婦人は蘭人を好み、男子は日本人を好むと云ふを得べきか。

**窘迫せらるゝ日本人**

以上の如き關係より、蘭領印度に於ける日本人の位置は甚だ愉快なりと云ふ能はず。日本人の此地方にある者を數ふるに、瓜哇本島に三百人、スマトラに千百人、ボルネオ其他の群島に在る者と合して二千六七百人になるが如し然れども瓜哇政府は各地に散在する是等少數の日本人に對して、極めて神經過敏に

セレベス島のトンダノウに於ては、日本行商の上陸を禁止せられたるあり。其人、言論の才あり、巧みに條約を楯として官吏を難詰し、官吏をして言辭に窮して上陸を許さしめたるも、該官吏は更らに附近の土民に命じて、日本雜貨を買ふ勿らしめたるを以て、行商は力盡きて遂に退去したりき。またバリー島にブレレングと稱する小島あり。日本行商の此に入らんとするや、官吏之を禁じ、此地方は日本人と英人の入るを許さずと傲語し、遂に之を退去せしめたりき。一昨年和蘭女皇降誕節に際し、スマラン市中の日本人も、また和蘭人と慶を分たんと欲し、各軒頭に日章旗を掲げたるに、理事廳の警察官來りて、日章旗を除去せんことを要求し、且つ和蘭の國祭に際して日本國旗を掲ぐるを不敬なりと言ふ。スマランの日本人は純粹の商人にして書生少きを以て、平生に於ては從順なりと雖も、此の如く國旗を侮辱せらるゝに遇ふては默過する能はずとなし、總代を選びて理事官に面會せしめて、其不法を詰難す。理事官は其決して自己の命令に出でたるにあらざるを辯疏すと雖も、日本人聽かずして謝罪を求め、遂に理事官をして該警察官の行爲は自家の命令に出でしにあらざる旨を記したる覺書を自書せしめて甘心したりき。如何に邊境の官吏と雖も、理事が此の如き命令を發したる者にあらざるは之を信ずるを得べし。然れども警察官の言行は、無意識の中に瓜哇官憲の間に行はるゝ思想感情を洩發したるものと云はざるべからず。余がジョクジャカルタの舊王を見んと欲して、理事官の拒絕する所となりしが如きも、また此思想の發露したるに過ぎざらんのみ。

**支那人の位置**

蘭人をして日本人に戒心せしむるに至りたるものは、支那人問題もまた與かりて力ありとす。支那人の蘭領群島に移住したること一日にあらざるは、余が已に論じたる所にして、東印度會社を助けて强迫耕作法を行はしめたるは、支那人の力、少なきにあらず。其後前後二回大虐殺を受け、一時は殆ど遺種なきに至

りしが、再び滿潮の勢を以て移住し來り、今や政府の報告によれば支那人の數を五十五萬人なりとすと雖も、實際の事情に通ずるものは、之を以て少きに失すとなし、七十萬人と數ふれば事實に近かるべしと論ず。彼等は礦山の工夫より、田畑の耕作より、小賣商人より、大商店の主人より、製造所の社長に至るまであらゆる階級に普及す。今蘭領印度全體に於て政府が官有地を人民に貸附せるものを見るに、歐洲人に二百三十七萬エークルにして、支那人に三十萬エークルあり。以て本國政府より何等の援護を受けざる支那人が、其單獨の力量によりて、如何に政府の援護を有する歐洲人と相頡頏して、經濟上の大勢力となりつゝありしを見るに足らん。瓜哇の支那人に建源と號する商店あり、其財力三千萬ギルダアにして、獨り支那人中の富者たるのみならず、瓜哇全島を通じての最大富者なりと稱せらる。蓋し和蘭政府は其殖民地を開拓するに方りて、歐洲人は勞役に堪へず、土人は朴愚にして氣力なく、其間に立ち、勞役にも堪へ、且つ氣力と知識とあり、歐洲人と土人との媒合的勢力たるものは支那人にして、熱帶地には缺くべからざる要素たるを知ると共に其勢力を過度に助長するは、また自から一個の危險を釀すものなるを知る、故に支那人に對しては其勞力と財本とを使用するに止め、其自由を制限して、成るべく其發達を妨げんと欲するもの丶如し。

**支那人の痛苦**

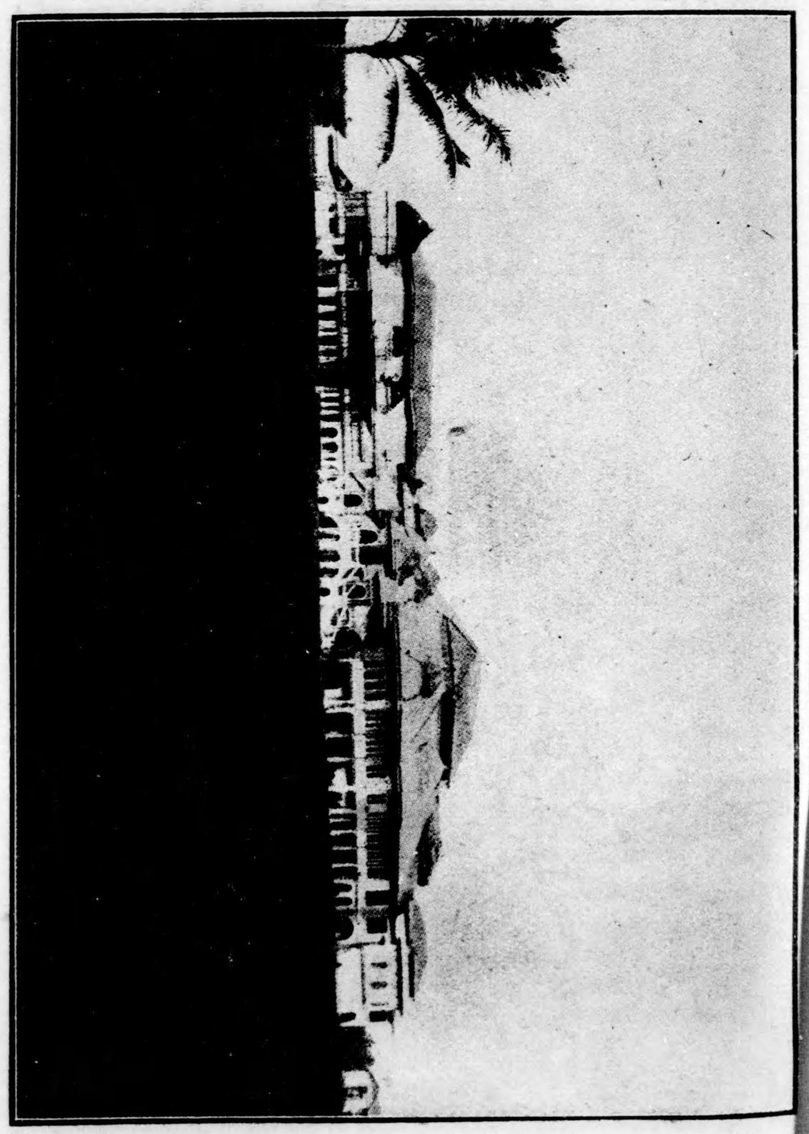
蘭領印度の法律行政に二個の區分あり、一は歐洲人及び之と同階級の國民を主とし、一は土人及び之と同種類の國民を主とするは已に之を說きしが、日本國民は其優等なる國家の位置より、歐洲人と同樣の待遇を受け、支那人は土人と同樣の待遇を受く。故に辮髮を着けたる支那人は往々一等汽車に乘ることを拒絕せられ、日本人は三等汽車に乘ることを拒絕せらる。是れ一等汽車は歐洲人のためにして、三等汽車は土人のために設けられたるものなればなり。支那人はまた自家の居

處を轉ずるごとに旅行免狀を要求せらる。凡そ如何なる國人と雖も、蘭領印度に入るものは、必らず旅行免狀を要求せらるゝが故に、一回は必らず之れを受けざるべからず。而して紳士の旅客には二圓五十錢の免許料を納むれば、ホテルの支配人は政府に至りて之を受くべきが故に手數なしと雖も、支那人に至りては一々政府に至りて之を受けざるべからず。支那人已に旅行免狀を有すれば、蘭領の何れの地方に行くも、宜しく有効なるべし。然れども支那人のみは蘭領の一の地方より、他の地方に旅行するに、また別個の旅行免狀を要す。支那人若し行商にして日々居處を轉ずれば、日々免狀を要す。是れ支那人の至る處、土人の利益を吸集すること、恰かも猶太人がバルカン半島の如き未開の地に入るが如く、殆んど土人の利益を枯渴せしむるものあるがためなり。歐洲人はまた租稅徵收の時にも、其財産營業狀態を宣言すれば、政府は之に應じて徵稅命令を發すと雖も、支那人に至りては、政府は其宣言に滿足せず、政府自ら財産營業狀態を檢討せずんば已まず。之がため支那人の課稅は常に歐洲人に二倍するに至る。また支那人は銃器を藏する能はず。是等は其一例なりと雖も、萬事に就きて政府は支那人を抑制するを以て其政策とするが如し。此政策は固より歴史の殷鑑に顧念したる者にして歐洲人全體の贊同を得しものたるや疑ふ可からず。何となれば此等の支那人は、殆んど一百年前、或は二百年前より此地方に住居したる者たるに係らず、依然たる支那人にして、其土風に同化せず而して本國に於ては僅かに墳墓あるのみにして生業なく、進みては和蘭人民たらず、退きては支那人民たらず、世界無宿の浪人たるに過ぎず。之を取締るは相當の抑制を要すればなり。

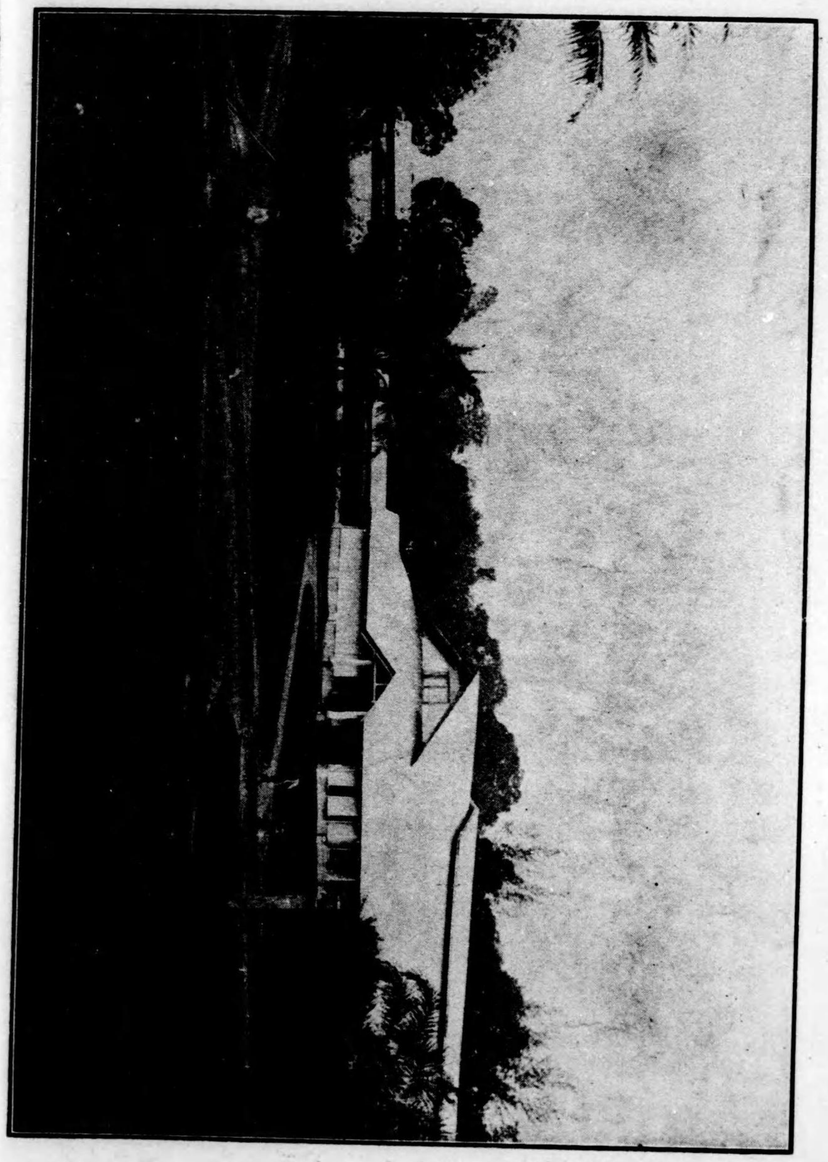
**臺灣人の位置**

然るに玆に支那人種にして而して支那人ならざる一種類あり、即ち臺灣人是なり。彼等は名は臺灣人と稱するも、其父祖が臺灣より出でたりと云ふのみ

臺灣を知らざるものすら少からず。臺灣は彼等が蘭領に生を托する間に日本の手中に歸せしものなるが故に、當時に於ては、彼等もまた私かに日本を罵りて倭奴、我が故郷を取ると云へるものならん。然るに彼等は今に至りて始めて日本政府に感謝するに至る。何となれば彼等は日本帝國の統治を受くる臺灣の民たるが故に、而して日本政府は他國と制度を異にし、殖民地にも憲法を適用するを主義とするが故に、臺灣人は日本帝國の臣民として、憲法の保護を受くる文明人として、蘭領印度政府より歐洲人と同一の待遇を受くるが故なり。余が南方スウラアヤより中部ジョクジャカルタに入るや、茲に李の一姓あり、兄は清國人にして福州の民と稱し、弟は臺灣人にして、日本帝國の臣民たり。余の歴遊を聞知し、日本人を介して、其家に宿泊せんことを求む。余が到るや一族友人、相會して余を迎ふ。聞く所によれば兄弟等しく三十萬の財産あり。而して兄は清國人なるがため三千圓の租税を徴收せられ、弟



スイトラ、メダン市郊外
ソルタンの宮殿



ケイプ、タウンの公園

は日本人なるが爲め、一千五百圓に止ると云ふ。斯の如くして支那人の間に生ずる問題は、何故に同一人種にして、一人は痛苦あり、一人は幸福なるかと云ふにあり。而して此問題の解決として、彼等は日本に歸化して、日本臣民たるを以て捷徑なりと信ずるもの少からざるに至りしが如し。而して此間往々にして、自から子爵、若くは男爵と號する豪傑の一族類あり、支那人を欺きて日本臣民たらしむべしと稱し、多少の黄金を奪ふを業としたるものありたり。

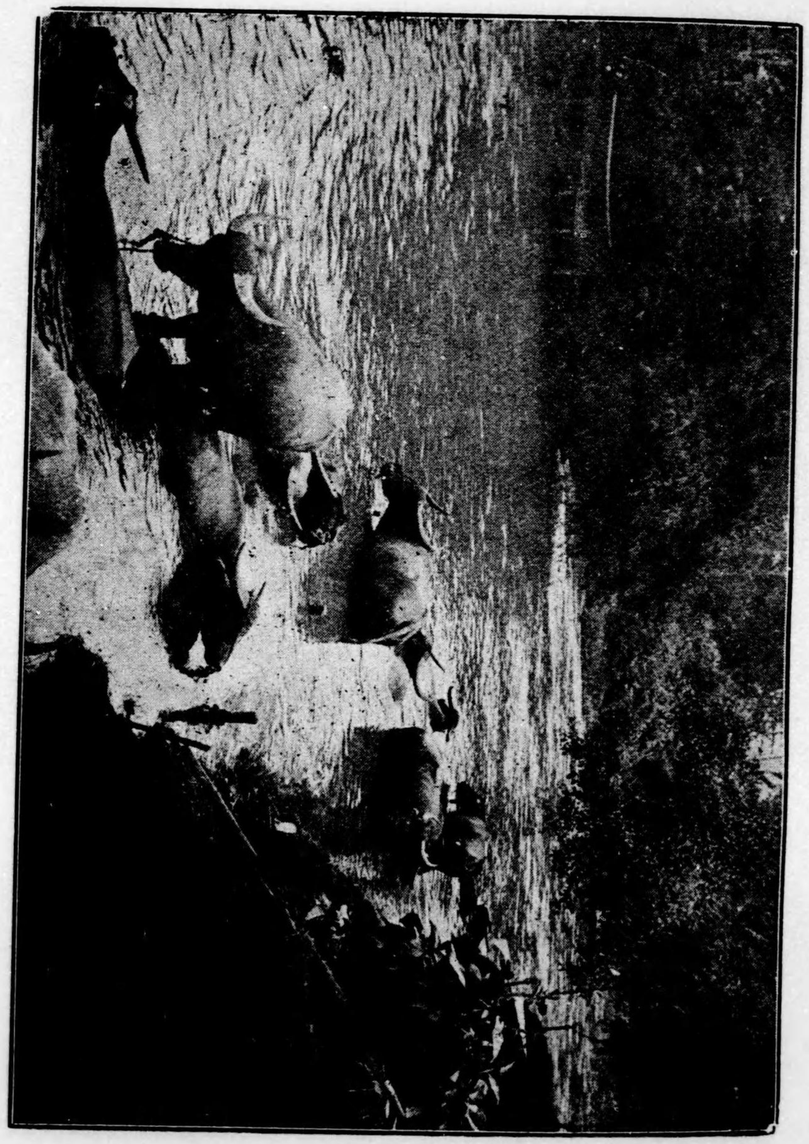
**支那人歸化問題**

蘭領印度に居住し、居ながら日本に歸化すと云ふ、甚だ突飛なるが如くして、實は前例なきにあらず。佛國政府は暹羅と境を接して佛領印度を有し、頻年暹羅の地圖を縮少するに怠らざるのみならず、暹羅の内政に對しても、威力を及ばさんとして手段百端施さざる所なし。而して暹羅在留の支那人が自國政府の保護の力足らず、往々枉曲を蒙むるや、則ち去つて佛國公使館に至りて、佛國に

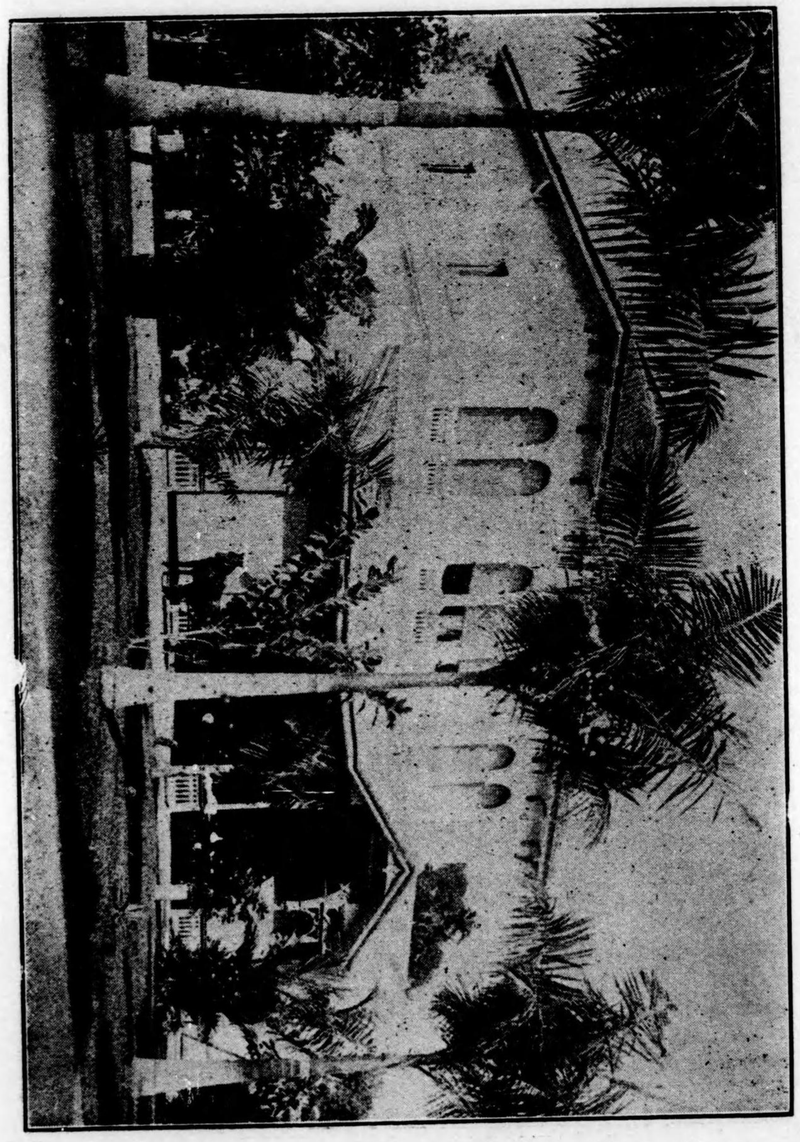
歸化せんことを乞ふもの多し。佛國公使館其請を容れ、一定の登錄料を收めて之を佛國臣民として其保護を與ふ。今蘭領印度に於ける支那人が、坐ながら日本に歸化して日本人たらんことを望むは、此前例を學ばんと欲するのみ。然れども我政府は之を好まず、眞に臺灣に事業を有するものにあらずんば、歸化を許さざらんとするもの〻如し。思ふに日本政府は此點に關して和蘭本國の政府に對して、一種の質言を與へたるものにあらざるかと疑はる。夫れ支那人居留民の數已に五十五萬人に達し、而して日本臣民たらんとするの風靡然として起らば、蘭領殖民地に取りては、一個の困難と云はざるべからず。而して此困難の原因は、臺灣人が帝國臣民として支那本國の人民と異なりたる待遇を受くるにありとなし、和蘭政府は此根本の問題を除かんと欲して、力を用ひんと欲するもの〻如し。和蘭政府思らく、英領印度人は英國皇帝の臣民たること、猶ほ臺灣人が日本皇帝の臣民たるが如く、佛領印度人は第三共和國の下にあること、猶ほ臺灣人が日本帝國の人民たるが如し。然れども英國も佛國も其印度領の人民を以て、純然たる本國の自由人民と同一視せず、蘭領印度に來りては、英領印度人も、佛領印度人も、蘭領印度のマレー人と同一の待遇を受くることを承認す。獨り日本の領土たる臺灣人民のみ其本國及び歐洲人と同一の待遇を受くべきの理なしと。和蘭政府は此の如くして日本政府をして、臺灣人をマレー土人と同一の法律行政の下に置かしめ、以て五十五萬の支那人が動搖するを豫防せんと欲するが如し。然れども日本政府は臺灣に憲法を行ふの主義を取る。余は其決して和蘭政府の要求を容れざるべきを信ず。和蘭政府は唯だ宜しく日本政府が佛國の暹羅に試みたるが如きブロタージ法を行はざるべきを信じて、心を安んずべきのみ。而して支那人には何時までも從來の如く壓抑を施し得べきにあらざるを知りて、其抑制に多少の緩和を與ふること、最も緊急なりと云はざるべからず。

**總督の位置**

和蘭人は蘭領印度占領の三百年間に多くの痴愚と賢能とに示したり。痴愚は歴史と共に消え、賢能は殖民地と共に殘留す。余は和蘭の近世史に於て、英國のクロムウエル、若くは佛國のナポレオンの如き赫々の大名あるを聞かず。然るに其和蘭統治の跡を見るに、天才の遺風少からざるは頗る異しむべしとなす。和蘭人が始めて東印度會社を興すや、總督なく、組織なく、策源地なく、散漫荒忽として、殆んど商業的十字軍に類す。已にして其マレー海中に來往して策源地の必要を見るや、バタヴィヤを取り、其組織の中心として總督を置くに至れり。此時に方りてや、政權の中心は總督にあり。總督は國王と内閣とに其機密を語るも、自餘の官吏政治家に對しては、絶對に其事を秘密にし、其報告にも二種の帳簿あり、其眞正の報告は總督獨り之を握り、其表面の報告は之を公衆に示めし、眞正の報告は會社の重役すらも知らざるもの多し。爾後國會議員にして其眞相を公表せんとを求むる



メイナラ島にて水牛遊泳の圖



スイトラ島メダン附近ヲ

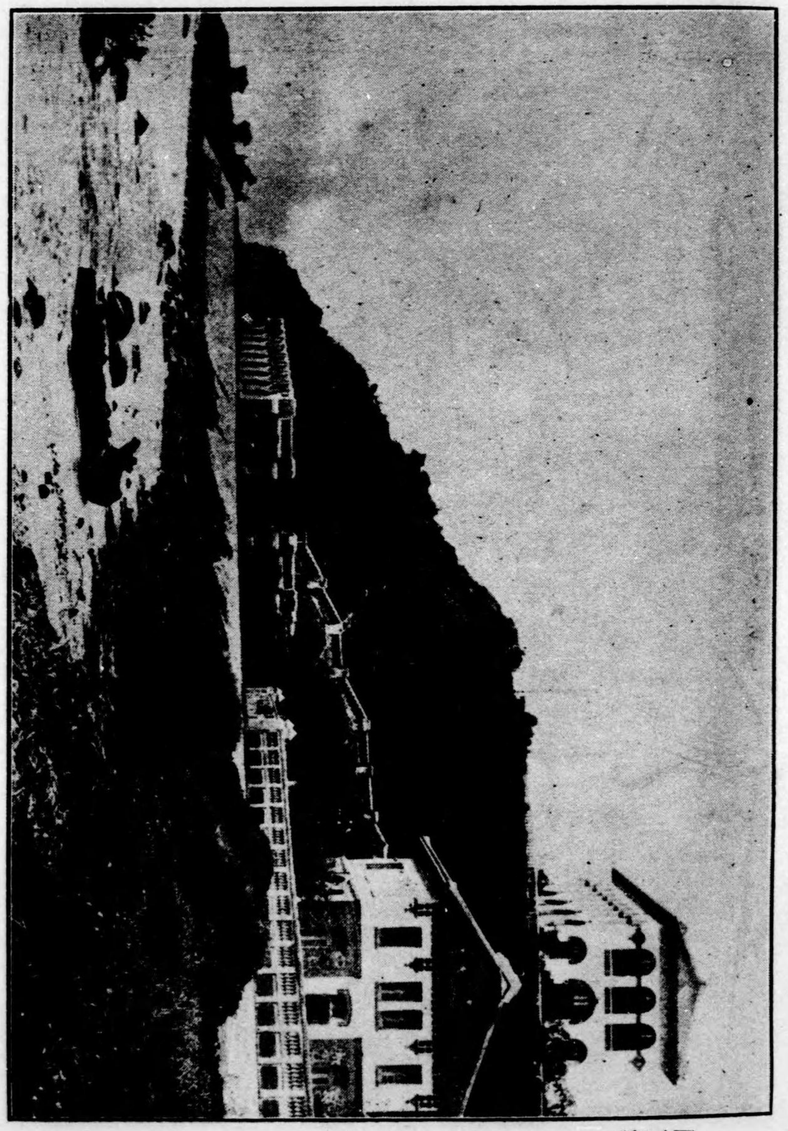
者ありしも、久しからずして會社の勢力に服せしが、社會公衆は猶囂々として其眞相を知らんことを求めて已まず。然れども政府は會社を特別保護の下に置き、例へ何人が之を告訴するも、之を受理することなからしめ、併せて公衆が會社の株式に就て投機することを禁令す。勿論會社は此報酬として政府に貢金を納付せしは云ふまでもなし。會社時代の總督の權、此の如くに絶大なりしが故に、千七百九十八年に會社が廢せられて、總督時代となりても、總督の權、依然として大に、千八百十八年、蘭領印度總督府は蘭領印度憲法なるものを私定して、之を公布し、一切の官吏は此憲法を遵守せんことを誓約し、其間本國に於て殖民地憲法なるものを作りたりしも、實際に於て行れず。私定憲法却つて行はる。而して此私定憲法が九年間の經驗によりて缺點あるを見るや、千八百二十七年更らに總督府令を以て新憲法を發布したるも欽定裁可を經たるものにあらざりき。爾來千八百七十年の變革あり、交通

機關の改善、自由主義言論の勃興の爲め總督の權力に多少の變化あり。蓋千九百五十四年の殖民地憲法によれば、殖民地の豫算は獨立ならず、之を本國政府の豫算中に包含することゝなりしを以て事ごとに議會の容喙を受くるに至りしもの其第一の變化なり。また其豫算が本國政府のために作爲せらるゝがため、本國の官僚等之を機會として、種々の干涉を殖民地に試みんとするに至りしもの第二の變化なり。第三の變化は本國議會は殖民地のために法律を作るの權利を得、而して總督も亦法律を作り、及び本國議會が制定したる法律を適用するが爲めの法律を作るを得べしと雖も、此二箇の權力共に千八百五十四年の和蘭殖民地統治法に準據せざる可からずと規定せられたること是なり。然れども近來國會に於て殖民地の事情に通ずるもの少からざるを以て、漸やく寛大となり、異常の大事にあらずんば、國會が殖民地に干涉することは甚だ多からず。余、バタヴヤに於て一官吏に語りて、國會の干涉と官僚の干涉と、何れが最も事に妨害あると質問したるに、彼れ答へて國會の干涉は得て之を說破し得べし、唯官僚の干涉に至りては其事外に現れず、何等の公論に訴ふる道なく、而して往々私心を挾むものあるが爲め、最も痛苦を感ずと云ふ。然れども此等の中央の干涉を除きては、總督は專制君主にして、人民に對して責任を負はず、何等の民選議會なく、土酋に對して宣戰講和の權を有し、一切の文武の官吏を任免するの權力を有し、事情によりては一切の法律を停止することを得。唯此專制權が印度評議會と稱する五人の委員の助言によりて行はるゝのみ。而して此評議會員か總督の指名によりて任命せらるゝこと、英國の多くの殖民地に於けるが如くならずして、國王の勅任に成るに至りては、和蘭固有の政治的猜疑心に出でしと、從前總督の權力の絕對的なりし反動に過ぎざるべきか。蓋し殖民地の政治は、最も直截と敏活と實行とを要す。種々の機關を設けて經綸を拘束するは、殖民政治に成功する所

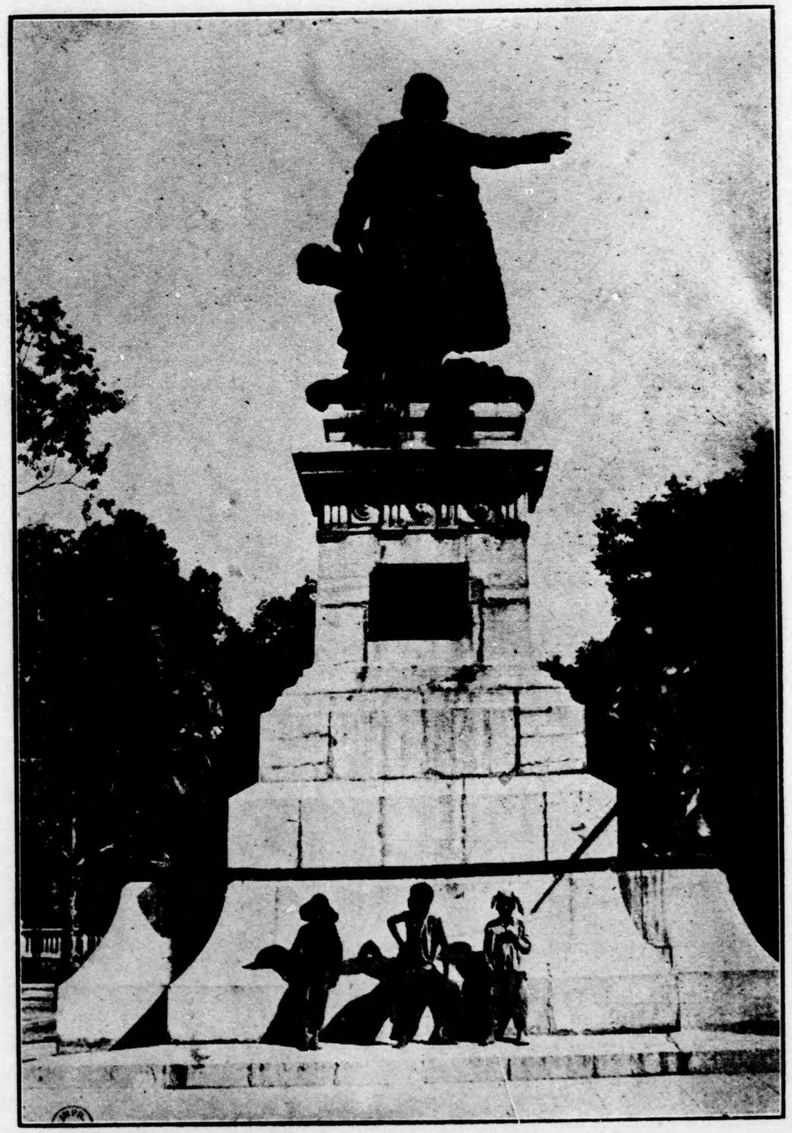
以にあらず。和蘭殖民地が國王の如き總督を有したる時に於て如何に成功し、中央より干渉するに至りて、如何に其進歩を止めたるかを見れば思半ばに過ぎん。

**政府と土司との關係は兄弟なり**

等しく蘭領殖民地なるも、隨處に其行政を異にするは、此殖民地の特色にして、瓜哇を分つて二十二個の行政區となし、一行政區に一理事官を置くこと、恰かも我府縣知事の如し。此行政區畫は大體瓜哇王國時代の封建的區畫に從ひたるものにして、毎區必ず一人若くは三人、王國時代の土酋を以て輔攝官となし、輔攝官をして直接に政治を施さしめ、理事官は唯だ輔攝官の長兄として勸告を與ふるのみにして、直接に人民を統治せず。然れども輔攝官は勢威赫々たる和蘭大官の親愛する家弟なりとの名稱を喜び、且つ其配下の人民に威柄を示すの機會あるを喜ぶを以て、勤勉事を見て上令を下達し下情を上達す。故に人民は其國家の亡びて人の掌中に入りしを辨ぜず、舊土酋が己を治むるを見て、大體に變



西貢河口キシドラの光景



西貢府ガムベツタの像

化なきを信じ、若し租稅其他の痛苦あれば痛苦は土酋の與ふるものなりと信じ、和蘭人が此痛苦を救はんことを望むに至る。全島輔攝官の總數七十二人にして、此下に村老四百三十四人副村老千三十三人あり。皆なマレー土人にして、補攝官の命を奉じて政治を行ふ。而して理事官の下、別に七十八人の副理事あり。副理事の下、別に百六十五人の監督あり。副理事は補攝官の政治を監督し、監督は村老以下の政治を監督す。概して論ずれば、土人の政治は監督政治にして、直接政治を行はず。政府は補攝官以下の土人をして其局に當らしめて成を彼等に責め、彼等をして、一は之によりて閑を消さしめて不平なからしめ、一は之によつて衣食の道を得しむ。其俸給を見るに、理事は一年一萬五千フロリン、副領事は七千二百フロリンにして、而して補攝官は一萬二千フロリンを得、村老は二千五百フロリン、副村老は一千フロリンより七百八十フロリンを得。それ土酋に與ふるに一萬二千フロリンの給料を以

政府と土司との關係は兄弟なり

てするに至りては、此中士族授産を意義あるを解すべし。補攝官已に此高給を得て生活の不平なく、且つ其風俗人情に通ずるを以て、能く土民を治む、和蘭殖民政治の成功したる所以、偶然にあらずと云ふべし。若し夫れスマトラに至りては、行政組織、概して瓜哇に異ならずと雖も、土酋の權力利益は瓜哇よりも多く、政府の理事官はマレー以外の外國人を治むと雖も、マレー土人は全然土酋の配下に屬し、土酋は和蘭統治以前に治めたるが如く、土人を治むること瓜哇と異なり、各區の歳入中より第一に取り去らるゝものは土酋の給料にして、第二に取り去らるゝものは和蘭官吏の給料なりとす。而して剰餘あらは之を以て、公共事業、土地の改良、民政の爲めに使用す。此剰餘はシャク地方に於ては一割五分にして、ランカット地方に於ては九割とす。若し夫れセレベス、ボルネオ以下の群島に至りては、土酋の權利利益、更にスマトラよりも多く、和蘭政府は僅かに官吏を派して、他國の侵蝕を防ぐと、租稅を收むるとの二事を勉むるに過ぎず。近世的行政なるものあることなし。然れども是また治めざるを以て治むるものにして、夷狄統治の法、斯の如くならざるべからざるのみ。

**我朝鮮との比較**

余は蘭領印度の統治を見て、深く朝鮮の事を慨するの情禁ずべからず。今や朝鮮の我國に於ける、單に瓜哇スマトラの和蘭に於けるが如くには止らず。何となれば蘭領殖民地は國利養成の地にして、之なくとも和蘭存亡の憂あるにあらず。然るに朝鮮の我國に於ける、之を失すれば即ち我國門を失するものにして其有無は即ち我存亡の問題なりとす。是れ理宜しく皆な百年の大計の前に其私心を捨つべきなり。然るに朝鮮を治むべき官吏は、其政務の上より見て朝鮮人に政治を托すべからずと信じ、悉く日本官吏を以て之に代らしめんと欲して已まず。また民間の志士等は、政府の爲す所緩慢なりとして、期年にして之を同化せんと欲し、同

じく朝鮮の官吏を一掃して、日本人を以て之に代らしめずんば已まざらんとす。今日朝鮮問題に關して朝野相爭ふと雖も、其實は性急短慮、日本人を以て一切の政治を行はんとする一點に於ては、朝野同主義にして一人の異論なしと云ふも不可ならず。然れども二三千年の歴史ある國民豈に一朝にして同化し得べきものならんや。之を同化せんとするものあらば、其轉覆や期して待つべし。余はかゝる夢想に近き空論を戰はす前に、先づ朝鮮が眞に平和に治められんことを望まざるを得ず。之を治むるの道如何と問はゞ、また宜しく和蘭人が瓜哇に成功したるが如く、兩班以下の土官土司の力を外にせず、與ふるに巨利を以てして其欲を遂げしめ、授くるに名譽を以てして其虚榮心を滿たし、彼等をして喜んで我用を爲さしむべきのみ。兩班は如何なる缺點あるも、朝鮮を動かす所以の精神氣力にして、此勢力を外にして、日本自から直接政治を行はんとするは、殆んど歴史の教訓を蔑にするものなり。若し瓜哇の事學ぶに足らずと云はゞ、宜しく明治七八年より十八九年に至る我内政は、土族處分の一事にありしを顧みるべきのみ。

**殖民地官吏任用法**

和蘭政府が蘭領殖民地に派遣する官吏の選拔に就きて、心を用ふるの一事も、また外人の注目を要す。凡そ蘭領印度總督府の官吏は、總督其參議官、各局長の外、一切の白人官吏は皆な文官試驗に及第したるものより取り、殊に東洋の法制言語を以て其試驗科目とす。是れ和蘭は其殖民地に對して和蘭語を强ひず、土語を以て官府通用語となすを以てなり。之より先き會社時代にありては吏員の選拔、放漫にして紀律なく、會社の重役の推薦あらば、何人も之を用ふるの風あり。且つ殖民地に於ては善良勇敢なる紳士によつて組織せられたる社會の、官吏を監察するものなきが爲め、紀綱敗頽、會社の衰滅を來たす。殊に其報酬少きは最も腐敗の原因たり。例へば和蘭の海外王とも云ふべく、殖民地全體の生殺與奪の權

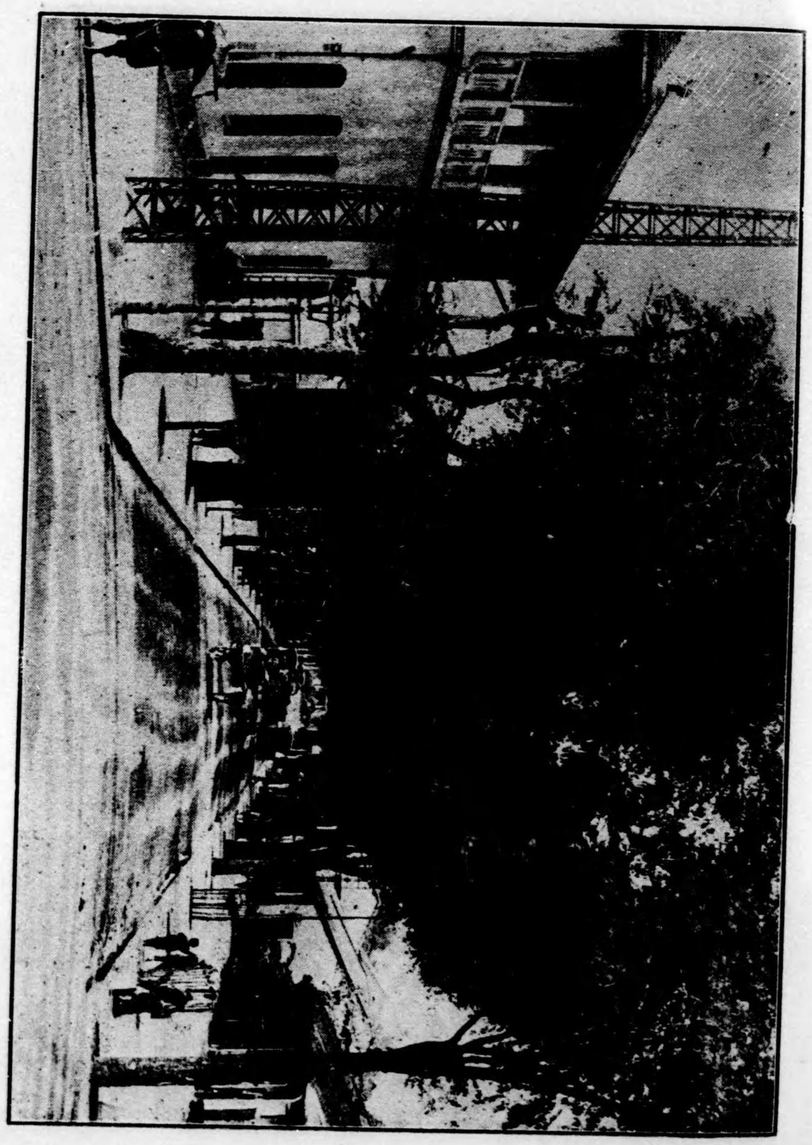
を握ぎりたる總督が、一ケ月千七百圓の給料を受け、一年數十萬圓の正金を收入する出納者が、一ケ月一百十圓を受くるに止るが如き是なり。然るに會社は此等の官吏に養廉銀を與ふることを謀らずして、單に會社員を戒めて金銀珠玉を鏤めたるものを用ふる勿れと言ひ、一片の訓令、以て其清廉を維持すべしと信ず。故に會社時代にありては多少の材幹あるものは、多くは不當の利益を漁して一身を富まさんことを企て、然らざるものは殖民地に行くを欲せず、殖民地に行くものは殆んど孤兒、浪士、投機師のみ。會社衰滅の原因實に此にあり。故に會社の廢せられて總督府時代となるや、主として此點を改革するに力を用ひ、善良にして材幹ある官吏を選拔するに勉め、其報酬もまた本國に比して頗る潤澤なりとす。今文官試驗の科目を案ずるに、第一は地理學、第二は一般立法論、第三は蘭領印度の宗教法、宗教制度、第四はマレー語、第五はジャヴァ人のマレー語にして、以上の試驗を通過したる者は、一定の歲月の後、第二の試驗を受くるを得べし。第二試驗の科目は、第一歷史、第二地理學、人種學、第三宗教法、宗教制度、宗教風俗、第三蘭領印度の制度、第四マレー語、第五ジャヴァ人のマレー語にして、以上の試驗は和蘭本國に於てもジャヴァに於ても、孰れに於ても受くるを得べしと雖も、實際に於ては全員の三分の二は之を本國に取り、三分の一はジャヴァに取るを定則とす。和蘭は今や歐洲に於ては第二流に墜落したるに係らず、其殖民地が平靜に發達する所以のものは、主として官吏が土情に通じ、土官と協力するが爲に外ならず。余は我朝鮮に於ける施設も少しく之に鑑みて、朝鮮の制度、風俗、習慣、言語に通ずる官吏を養成することに勉めんこと最も緊急なるを信ず。豐太閤が『彼をして我言語を學ばしめよ』と云へるもの英雄一時の權略のみ。二千萬人の朝鮮人を殺盡するにあらずんば、朝鮮の風俗言語は、依然として存在せん。それ已に言語風俗あり。之に臨むもの其言語風俗に通じ

て、土情を審にするにあらずんば、眞正の政治は行ふべからざるなり。

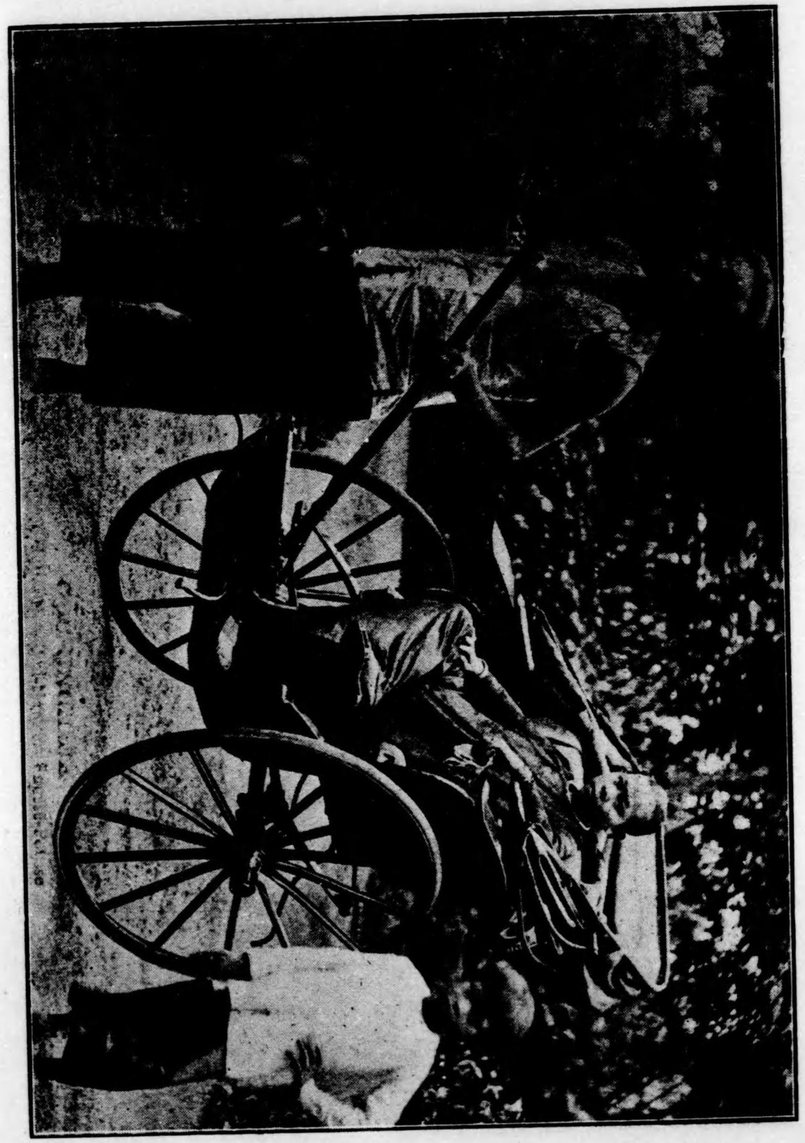
**瓜哇の關稅政策**

若し和蘭の政治に忌はしき所ありとせば、其猜疑心に富みて排他的なるにあり。此缺點は其各種の制度に見はるゝに係らず、殖民地の貿易のみは排他的ならず。瓜哇に輸出入するものは、和蘭の物貨も、他國の物貨も、同一稅率の下に取扱ふの一事は稱賛すべき政策と云はざるべからず。彼等豈に東印度會社が貿易專有を試みて失敗したる殷鑑に顧みて發明する所ありしか。東印度會社が輸出入の權を專らにするに方りては、瓜哇以下のマレー人は理必らずや和蘭の物貨のみを買ふべかりき。然るに當時和蘭の權力猶ほ全島に及ばざるものありしが爲め、英國の物貨はバンタム地方より、和蘭の物貨に比して廉價なること二三割にして輸入せられ、東印度會社の吏員すらも之を使用するに至る。是れ權力と保護のみは、以て貿易を奬勵するに足らざるを證明するに足る。去れば和蘭政府は關稅政策を以

輸入品は概して六分稅にして從量と從價との兩種あり稅目は極めて微細にして區分せられ而して金屬機械石炭木材の如き未製品馬其他家畜工藝科學用品の多くは輸入稅なし輸出稅目は甚だ多かるず煙草蜂蜜に二



西貢附近チョロン市



西貢附近チョロンに於ける支那人部落

分島巢に六分と云がふ如しまた島嶼により税目を異にするアルコール酒類石油等に輸入税と共に消費税を并課せらる

て、本國の貿易を助くるの愚を繰返へさず、其收税は單に税關の事務を敏活周到ならしめんが爲めの財用に供せんとするのみ、本國との貿易を助くるは唯だ船舶運輸の便を謀るにありとなし、コーニンクルウク、バケットバアルト、マアトシャパイと號する會社を保護して、本國と瓜哇、及び、瓜哇と各群島との間に定期航海を開らくと、別にネーデルランデッシ、ハンデル、マアルトシャパイと號する和蘭貿易會社を起し、利子補給政策によりて之を助くるのみ。此和蘭貿易會社は即ち蘭領殖民地が東印度會社より總督府に移るとき、政府の耕作品を本國に賣らしめんが爲めに起したるものにして、寸毫の政權なき商事會社なりとす。但し輸出入は以上の如く公平なりと雖も、マニラ煙草は一百キロごとに二百フロリンの重税を課して、殆んど之を禁止せんとするものゝ如し。是れ蓋しスマトラの煙草を保護せんと欲するが爲めなりとす。

**輸出入**

今、蘭領印度の貿易を見るに、千八百九十八年の輸入は一億七千九百八十三萬フロリンにして、輸出は二億千七百七十五萬餘フロリンなりしものが。千九百六年には輸入二億三千四百八十八萬餘フロリンにして、輸出三億三千九拾二萬餘フロリンに達し、前後八年の間に輸入は二割を增加し、輸出は五割を增加したるは健全にして有望なる兆候と云はざるべからず。

| | 輸入總額 | 輸出總額 | 政府輸出 | 私人輸出 |
|---|---|---|---|---|
| 千八百九十八年 | 一七九八二四三二 | 二一七七五四〇八七 | 一三五六〇一八九 | 二〇四、九三八九八 |
| 千八百九十九年 | 一九一三二二七〇 | 二五〇九二三二五八 | 一四九四四三八七 | 二三五九七八八七一 |
| 千　九百〇〇年 | 一九五九二三五二二 | 二五九〇三三六〇六 | 二六九五四三〇四 | 二三二〇七九三〇二 |
| 千　九百〇一年 | 二二九二二九〇六九 | 二五五二四一七一四 | 二〇二一七三二五 | 二三五〇二四三八九 |
| 千　九百〇二年 | 二〇二九五八〇四〇 | 二六五四七一四八四 | 一八三四七一〇七 | 二四七一二四三七七 |
| 千　九百〇五年 | 二一八七八一三七一 | 三〇九一〇三四二八 | 二二六七六一五五 | 二九六四二七二七三 |
| 千　九百〇六年 | 二三四八八九三九三 | 三三〇九二九六四二 | 一六二五〇二九〇 | 三一四六七九三五二 |

**和蘭政策の過誤**

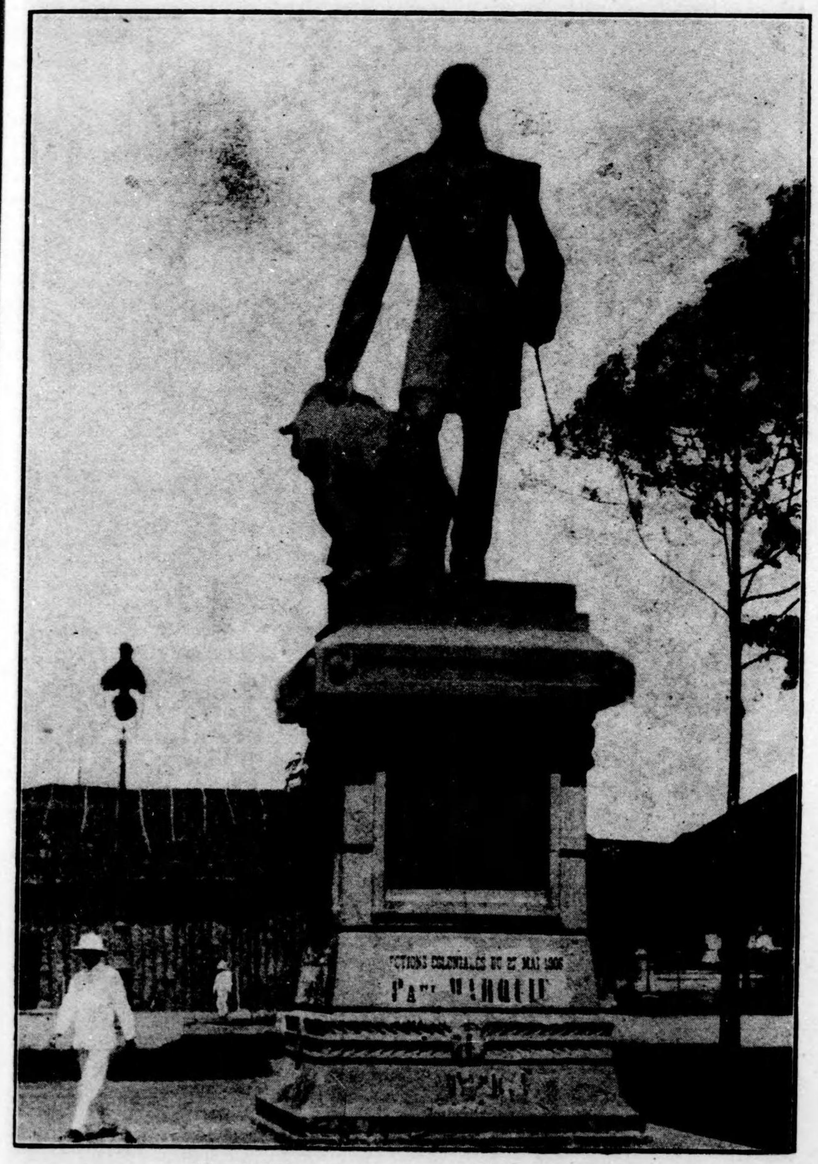
余は蘭領殖民地に於ける和蘭の政策を見て、大體に於て嘆賞せざる能はずと雖も、唯一の缺點は、其眼前の利益に迷ふて、殖民地より歲計剩餘金を吸集せんことのみに苦心して、また遠大の計畫なき事にありとす。殖民地を飽まで絞れとは、千七百年代の殖民政策にして、此政策を繼續したるもの、概して覆滅し然らざるものは僅かに生命を維持するのみ。今、和蘭の瓜哇以下に行ふ所を見るに、此古風なる殖民政策を、僅少の變形の下に行ふのみ。政府が全島の土地を官有地として之より生ずる所の物品を歐洲に賣りて、其得る所より統治費を控除して餘る所を母國政府に取るは、同一の租稅を土人に課して、之を母國に取ると何の異なる所かある。若し和蘭が疾くに斯の如き政策を捨て、殖民地より得たる財用は、只だ陸軍費の如きものに對して母國に獻金せしむるの外、悉く之を殖民地改良の費用に投ぜしめしならば、其物產の製出、工業の勃興、購買力の增加より、本國との貿易を

奬勵するもの一々擧ぐるに堪へざるものありしならん。然れば東印度在留の和蘭人が、近來本國政府の政策を非難して、殖民地より得たるものは、之を殖民地に投ぜよと論ずるもの多きは自然の勢と云ふべし。然れども顧れば和蘭も已に老いたり、暮景頽年また遠大の計を案ずる能はざるものか。果して然らば、空しくマレー海中にある天惠の寶庫を開く能はずして終らん。是れ實に惜むべきなり。

**マレー海の天富**

余は蘭領印度に於ける多くの島嶼を數へたり。然れども其能く開拓せられたるは瓜哇本島のみ。スマトラは猶ほ未開の地多く、マデユラは官鹽を供給するのみ。バンカは錫山が支那人によりて開かるゝのみ。其他の島嶼に至りては、草木榛々、禽獸狂々、和蘭人は僅かに官吏となりて其租稅を取るのみ。此等の山水によりて封ぜられたる富庫は未だ開かれざるなり。セレベス島の一土酋曾て瓜哇の稻垣氏に黑檀の一大樹を無代價にて贈與せんことを提供す。但し之を伐採して船に

西貢附近チョロンに於ける安南人の演劇



西貢府に於けるガルニエー將軍の像

積むまでの事業は、該土酋の受負たらしむべしとの條件を以てす。稲垣氏乃ち人を遣して之を見せしむるに、其周圍は三十二人の手を繋ぎて漸く圍繞すべく、高さ半空に聳えて目測すべからず。其巨大雄偉なる、聞く所に勝る。然れども之を伐採して船に積まんとせば、先づ黒檀を斬りて轉墜下降して海に至らしむるの道路を作らんが爲め、悉く途上の樹木を伐除せざるべからず。而して黒檀は海中に投ずれば石の如くに沈下するの恐あるを以て、之を浮ばしめんにはランブウ樹を伐りて筏を作らざるべからず。而して筏已に成り、黒檀已に浮びて、之を船上に引上げるに幾何の力ある起重機を要するかと問ふに、七八千噸の巨船に備へられたるものにあらずんば之を揭ぐるの力なし。然れども七八千噸の商船を此地方に運ぶの便なきを以て、到底此無代價の巨樹を引受くるの方法なかりしと云ふ。然れども是豈に孤立の黒檀ならんや。黒檀の此地方に於ける、松柏の我國にあるが如く、則すら黒檀にて製作せ

らるゝを見ては驚くに堪へたりと云ふべし。右は自然が何如に寶貨をマレー海に封じ蘭人が如何に之を開く能はざるかを示さんとする一例のみ。マレー海島にブリヤン樹あり、樹質硬堅にして鋼鐵の如し。歐洲人之を呼んで鐵木となす。此木は從來土人が輕柔、桐の如きランブウ樹と相摩して火を發し、其火をランプに受くるの用に供するに過ぎざりしが、近年之を伐りて鐵道の枕木とするに至るに、火に燒けず、水に腐れず。廣東、シンガポール地方に於ては、日本の枕木を驅逐して之に代りつつあり。グッタペルチャの木は數千年の前より榕樹の如く其液汁を樹下の土中に沒下し、今人は唯だ其土を掘れば、即ちグッタペルチャのゴムを得べし。歐洲人が苦心して發明したるカンフォルチンキの藥液は、マレー土人が已に數千年前より野生の樹液より之を取りて醫藥に供してミテヤボテと號したるものなり。其他セレベスにはダイヤモンドあり、ミナドには眞珠あり、アンボルにはセーゴ樹あり一本の生ずる所、一家三ケ月を支ふるに足る。以上は貿易表に現れざる一二の事物に就き、如何に天物の暴殄せられつゝあるかを示すに過ぎず。一言にして云へば、山に金玉あり、海に珠瑙ありと云ふもの、實にマレー海島の光景なり。若し科學と資本の力をを以て之を開くものあらば、即ち世界最大富庫の鍵を握るものなり。余は蘭領印度を後に見て北歸せんとする時、感慨無限、低徊躊躇、殆んど去るに忍びざるものありたりき。

以上印刷に附せられたる後、瓜哇千九百十年の歲計を得たり、其示す所によれば歲出二億一千八百三十三萬五千〇六十二グルデンにして、中、本國勘定四千七百十五萬六千百七十四グルデン、印度勘定一億七千一百十七萬八千八百八十八グルデンなりとす。また歲入は本國勘定二千一百九十六萬五千〇四十六グルデン、印度勘定一億七千二百三十五萬三千二百八十四グルデンにして、差引不足

額二千四百〇一萬六千七百三十二グルデンなりとす。（明治四十三年三月）

亦た近時土地國有法を實行するが爲め、往々外國人と紛議を生ず。即ちチヤセムランヂンのバマスウカン領に於て、英人が大地積の土地を有するを見て、政府そを買上げんとして現に爭論中なるが如き是なり。

交趾支那の土酋

印度支那米田耕作の圖

# 第六　佛領印度支那

**佛國郵船ラセーヌ**

余已に蘭領東印度諸島を見て積年の志望を達す。然れども大陸に於けるマレー人の生活を見て之を蘭領諸島に比するも、また無益の業にあらざるべしと信じ、印度支那のデルタを訪はんと欲し、佛國郵船ラセーヌ號に頼りて新嘉坡に歸る。ラセーヌは甲板のチーク樹最早や木理なきまでに摩擦せられ、周圍の鐵板より低きこと三四分に達す。一見して老船たるを知るべし。然かも佛國メサジリー、マリチーム會社に屬して、佛國政府の保護金を受く。余、船長に船齢を問ふに、船長笑うて、最早四十歳の老女なりと云ふ。然れども流石に佛人の船なれば食卓の上には美味を上ぼすことを怠らず。料理長また甚敏にして細心、能く客の心を攫る。余は彼を愛するを禁ずる能はず。船中、ジャヴア、スマトラに出稼する勞働者及び音

樂師の一隊あり。佛國船員は英人の如く土人に對して傲岸ならず、樂隊と相戯れ舞妓、伶人また嬉笑して歌舞するが爲め、船中の無聊も爲めに少しく慰めらる。此より新嘉坡にてアウストラリヤンヌ號に乘替へて西貢に向ふ。余、アウストラリヤンヌの船員に告ぐるにラセーヌ號老廢の事を以てす。船員曰く、四十歳の老女とは虚言のみ多分五十歳ならん。足下再び彼の船に乘ことあるも、決して甲板上に舞踏する勿れ、甲板破れて下に沈下するの恐あればなりと大笑す。余は此の如き老船に保護金を與ふる佛國政府の無頓着に驚かざるを得ず。已にして余が東京に歸着したる後、佛領印度支那の友人よりラセーヌ號が英船に衝突してマレー海にて沈没したるを報じ來るを見て、今昔の感に堪へず。知らず余が愛したる料理長は無事なるを得たりや。船員の愛撫する所となりし犬の運命や如何。憶ふ四年前、余の米國に赴くや、米船ダコタ號に乘る。已にして歐洲を經過して歸るや、久しからずしてダコタは房州沖に於て暗礁に觸れて碎破す。余と破船とは宿世如何なる因縁にや。

**西貢河を遡る**

アウストラリヤンヌはマルセーユ港と西貢日本を連絡する客船の一にして、噸數は八千に近く、年齢已に二十に達し、日英獨の新船に對しては稍舊式なりと雖も、二十年前已に此巨船と設備を有したることを思へば、佛人の氣力才幹また侮るべからずと云ふべし。船客は佛國より印度支那に向ふ官吏、十の八九を占め、他に二三の英人、二三の商人、一二の支那人と余とあるのみ。船客中の陸軍中佐は恰かも元帥の如くにして、少佐は大中將のごとく威風邊りを拂ふ。佛國商人曰く、是れ余が國の病根なり。凡そ佛領印度支那の文武官、毎二年滯在の後には一個年の休暇を得て本國に居住するを得べし。而して軈て期滿ればまた此の如くして殖民地に來る。故に佛國船は其乘客の十中七八は官吏のみ。是れ他の船客の同乘するを好まざる所以なりと。果して然るや否や。余は唯だ其説を敬聽するのみ。新嘉

坡より西貢までは八百海里に近し。余等の船は三日目の午後一時、西貢河口に近づく。河口の右岸、丘陵あり、名けてサン、ジャックと云ふ。丘陵の尖崎は岩石にして之あるがため僅に此邊の風光の單調を破る。岩石の上に一大館閣あり。曾て佛領印度支那の總督として大名を遺したるボール、ドウメーが其離宮とせんとして建築したるものにて、其名を記念せんが爲めに、ドウメー館と名く。左方を望むにデルタの上に長草短樹の雜生するを見るのみにして、遂く望むに際涯なく、滿目荒凉、些の趣味あるなし。此間、虎、往々形を現はすことありと云ふ。余等の船は此沼澤の間を流るゝ河を遡ること四十マイルにして漸く西貢府に着し、船は直に河岸の壁端に繫がる。即ち余等は今や安南の舊帝國内に入りしものにして、三色旗が岸上處々、風に飜るを見る。已にして余はヲテル、コンチネンタルより遣はしたる馬車に乘りてホテルに投じ、一切の行李はホテルより遣はしたる小蠻に托したれども、些の而倒も間違もなくして受取られたり。

**西貢市の光景**　西貢は久しき間東洋の巴理と稱せらる。其ブールヴァールの大なる、家屋の構造の美術的なる、國家の保護によりて存在する演劇場ある、其店舗の飾付など、如何にも巴理を模したりと思はるゝもの少からず。且つ其アブニウにはタマリンドの樹を植ゆるなど、風趣極めて饒なり。然れども最も人をして巴理を聯想せしむるものは、恐らくはカフエーにあらん。通街大道に對する料理店の軒先にカフエーを設け、衆客此に群居し行人を望見しながら飲食談笑するは英國には之なく、歐洲大陸に多き所にして、佛人が此の制度を西貢に移すや、自然に本國よりも一層盛んに發達す。何となれば西貢の炎熱は人の知る所にして、炎威が獨り白晝に於て盛なるのみならず、夜陰に於ても猶ほ衰へざるを以て、都人は唯だ此カフエーに出入して、其無聊を消すの一事あるのみ。去れば西貢府に於けるカフエーの盛なる、巴

理のそれよりも盛にして、八九時以後の社會は唯だ此カフエーの生きたるあるのみテテルヒ、コンチネンタルの如きも、一半はホテルにして一半はカフエーなり。客は日中はホテルにて食事すれども、夜は則ちカフエーに入りて食事す。是れ暑熱は唯だ斯の如くして避くるを得ればなり。ホテルの客室の後方には一坪半ほどの小室あり、甃石を以て敷きつめ、水道の栓を抜きて水浴するの便あり。余は白晝水浴を試むること二回、夜は十二時より曉に達するまでの間に之を試むること三回、猶ほ汗の湧くが如くなるを覺えたることありき。以て西貢の炎熱の如何に甚だしきかを想像すべし。然れども下水の掃除の行屆くが爲め、蚊は割合に多からず。余は七時より十二時まで、室内にて唯一蚊子の來襲せるを見たるのみ。

## 總督に會ふ

西貢は交趾支那殖民地の首府にして、千八百五十九年佛國が此地を占領したる當時にありては、人口僅かに五千人に過ぎざりしが、今は四萬五千人に

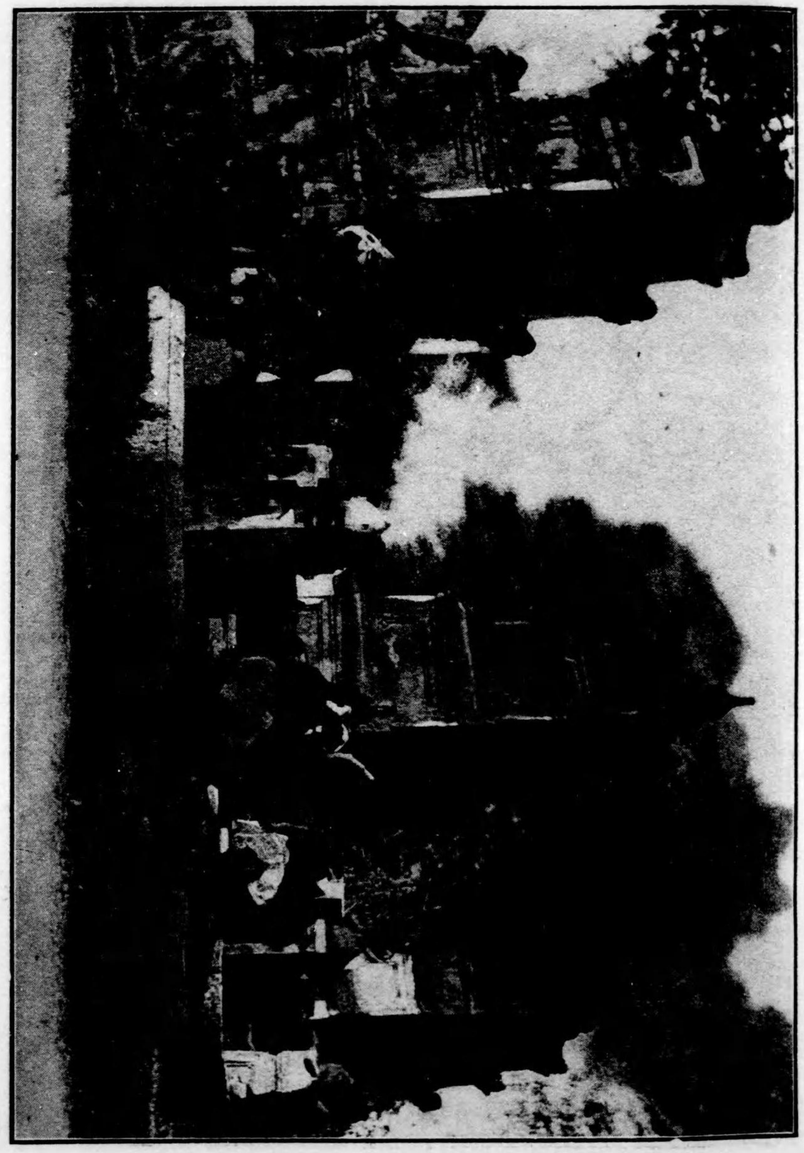
交趾は其土人夫妻足を交へて寢ぬるを以て名づけしなりとの憶說あり

達す。此中、佛人は三千三百人のみ。其地は安南人二萬五千四百人、支那人一萬四千人より成ると云ふに至りては、此殖民地は依然として支那人の土地たるを知るべきのみ。佛人は斯の如くに少しと雖も、流石に其趣味天才は凡て市區經營の上に現はれ、道路は巴理の如くに作られて、恰かも玉突臺の如く平坦にして且つ整正を極む。ブウルバアルを歩して市の中央に至れば、ガムベッタの石像あり、議會に臨みて、『諸君、東京を見よ』と發聲せる態を示す。是より進んで總督の宮殿に至れば、その壯麗なること更に巴理の建築の或るものに劣らざるを見る。蓋し佛領印度支那の總督は多く河内府にあるを常とすと雖も、時々、其發祥殖民地たる西貢に來りて土民と相會するの必要あるを以て、此宮殿を置く。余が西貢に入るや、當時總督、アクロブコウスキー氏、適ま河内より來りて西貢にあり。余、乃ち氏を其宮殿に訪問して來意を告げしに、氏深く之れを悅び、慇懃に余を待ち、且つ余の爲め電信を發して

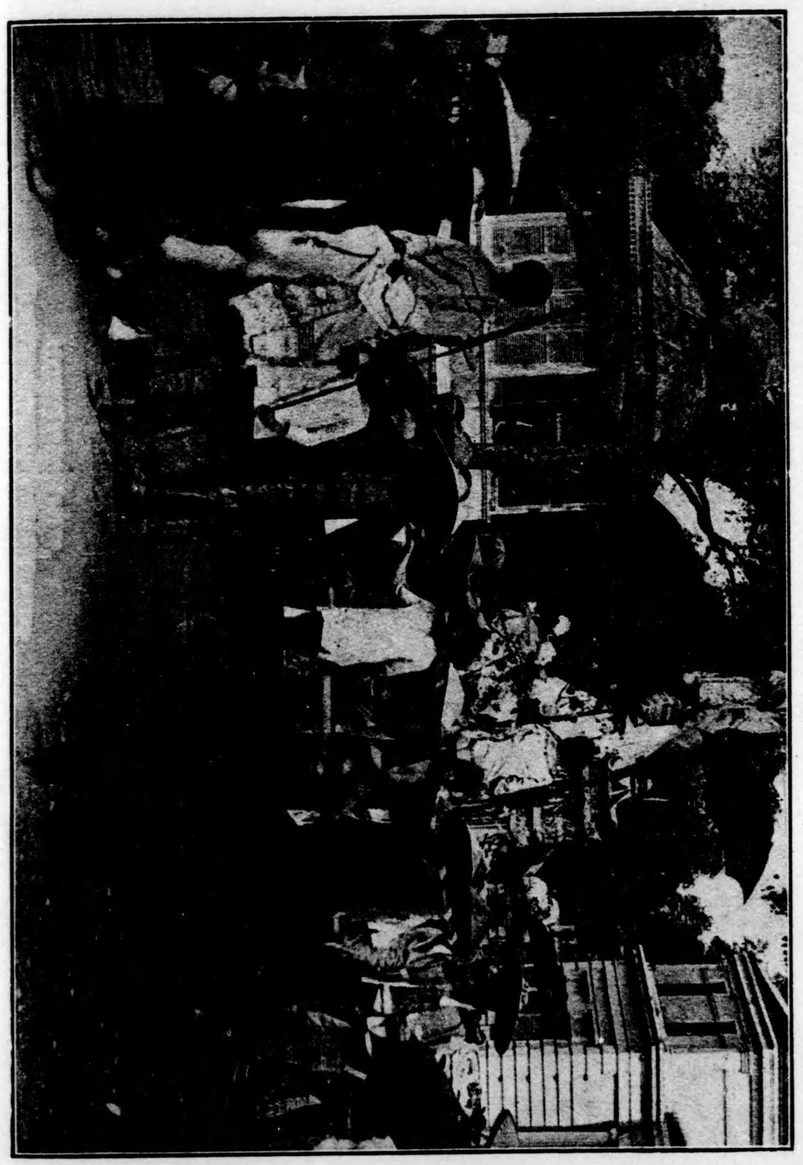
處々の政廳に、余の爲に便宜を與へんことを命ず。之より余至る所、頗る歡待せられ、顯官自から停車場に出でゝ余を迎ふる者あり。余が佛領旅行中快樂の一半は、同地官憲の賜なり。余は玆に之を書して感謝せざるべからず。

**西貢に於ける佛人**

オテル、コンチネンタルの左傍に劇場トラヴナタあり。其建築費二百萬フランにして西貢政廳之れを作り、政廳自から之を維持すること猶ほ巴理のテヤートルフランセーの如し。佛人はかゝる天涯にありて猶ほ演劇なしに生活すること能はざるは、猶ほ日本人か地角を極めても澤庵なしに生活すること能はざるが如し。然れどもかゝる僻遠の殖民地にある演劇なりとて輕侮すべきにはあらず。此演劇場にての成功は、やがて巴理に於ても成功すべき推薦狀となるものゝ如し。佛人は西貢に於てかゝる贅澤なるものを有するのみならず、別に植物園と公園とを有し、其の規模の壯大なる、流石に佛人の氣魄を示すに足る。然れども氣魄ある佛人



西貢に於ける佛蘭西の寺院



英國支那町の繁華

も、自然力の威壓には堪へざるものゝ如く、男女青白にして、衰弱其面貌に現はるるもの多し。蓋し室内九十六七度、室外百〇二三度と云ふ熱度は、日本にありても、一年に一度は之なきにあらず、而して此炎熱の後は、人身の疲勞甚だしきは我等の經驗する處なり。然るに西貢に於ては斯の如き熱日は決して一日にあらず。而して炎威は往々にして夜に至りても衰へざることあればなり。

**佛領に於ける支那人**

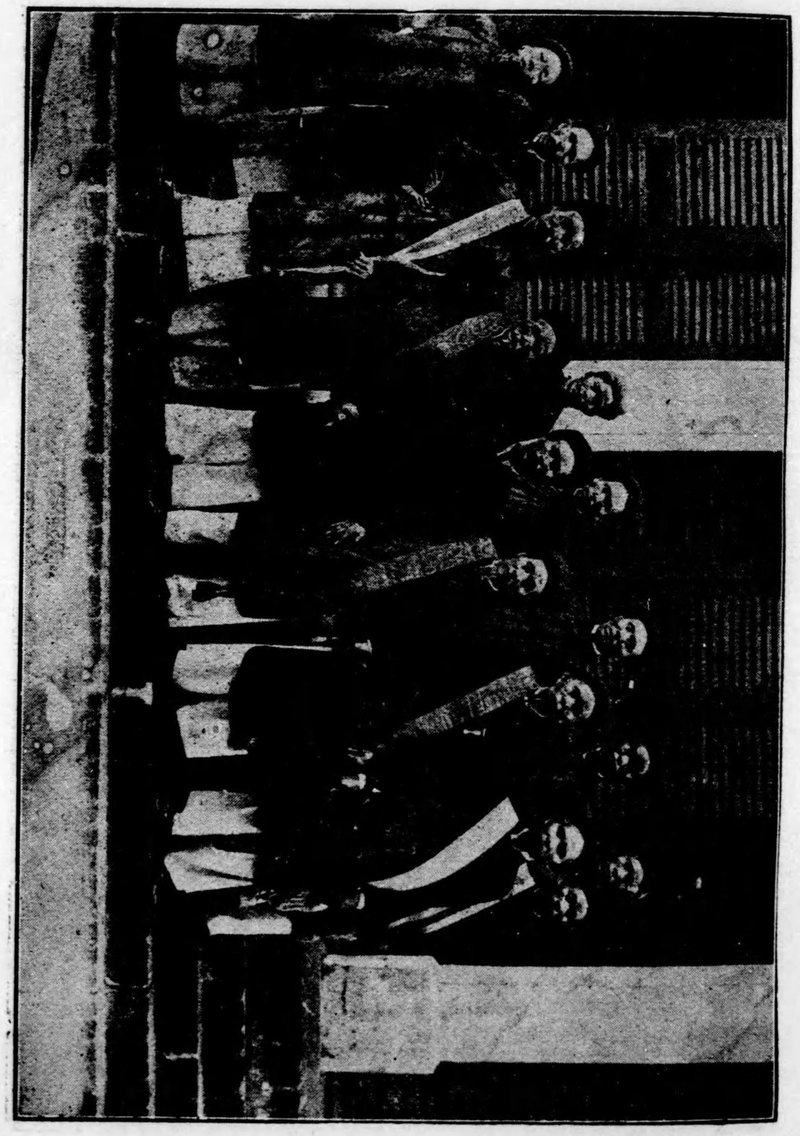
佛人が西貢の炎熱に苦しむに方りて支那人は平然として生活し、繁殖し、其利權を佛國旗の下に於て樹立しつゝあり。世人、交趾支那と云へば直ちに西貢を數ふるも、西貢よりも人口饒多の都會其附近にあり、即ち提岸是なり。提岸は西貢より西北四マイルの地にありて、人口十六萬を數へ、今は西貢と同市を作る。而して此中支那人の數四萬二千人を數ふるに至りてはまた盛なりと云はざるべからず。此地方の產物は米を大宗とし、而して提岸は運河によりて土產を集散する

中心市場にして、運河の兩岸、大小の精米所林立す。其事業の大半が支那人の掌中にあるは言ふまでもなし。余は提岸の市中を歩行し、八萬五千以上の安南土人が、大半支那人に壓伏せられ、利權を吸收せらるゝを見て、悲慘の情の催すを禁ずべからざるものあり。然れども兩人種の容貌體格の、遙かに相異なるを見ては、また如何ともすべからざるものあるを認むるの外なし。余は唯だ支那人身心の雄偉を嘆美するのみ。支那人は唯だ此地に於て優者なるのみならず、佛領印度支那全體に散在し南は安南より、北は東京に至るまで、マレー人の國に於ける經濟上の權力は、支那人之れを掌把し、佛人は其上に立ちて政權を取るのみ。余は其の土人を覽るに瓜哇其の他のマレー人の如く、唇頭朱の如く赤くして、齒は木蓮子の如くに黑く、一見しては其檳榔子を嚙むものなるを知るを得べし。然るに其人民の衣服を見るに、明代支那の衣服にして恰かも朝鮮服に似たるものあり。其土酋の佛人化せざるもの、衣服を見れば、益す明代の儒服に近きを覺ゆ。其寺院の荒草中に埋沒したるものを見るに、純然たる印度風にして、王宮等の廢跡を見るに、支那李唐時代の風を存するを見れば、此地に於ても瓜哇の如く、印度と支那の文明は相湊合したるものなるを見るべく、其國を交趾と號し、或は安南と號し、更に大越と號し、支那流の年號を立てしを見れば、宗教は印度に則り、政治は支那に則りしと云ふを以て適當なりとすべきか。清初、交趾の使、支那に至り西湖に遊びて咄嗟筆を取りて一樹楊柳幾度花、醉飲西湖賣酒家、我國繁華不如此、春來滿地是桑麻と咏じたりと云ふを見れば清初既に支那の學問が土人の間に普及したるを見るべし。其年號を立てしは紀元九百七十年、丁氏が大瞿越の朝を建て太平元年と稱したるに初まるを見れば、北宋の學問が交趾の朝廷に敬重せられしを想像するに難からず。夫れ支那人の此國に於ける一日行旅の關係にあらざる此の如し。然れば佛人の此國を治むる理宜しく、支

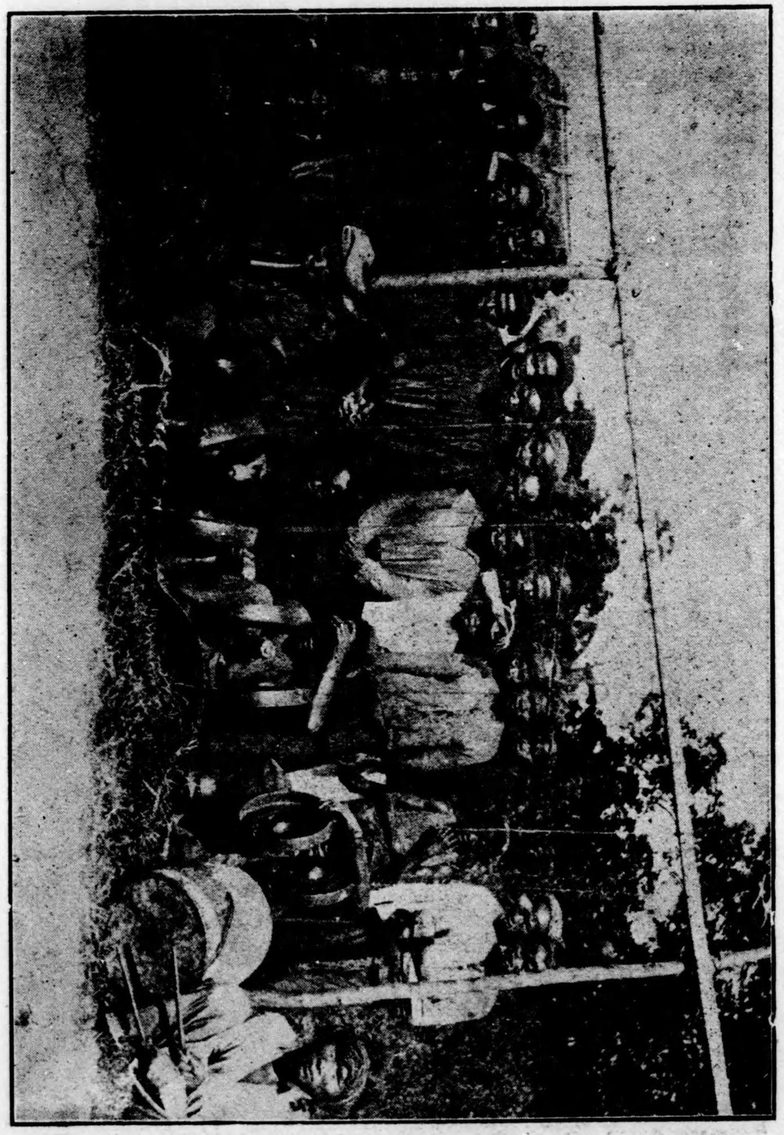
那人を寛容し、勢ひ宜しく支那人と協同すべし。然るに事實を見れば支那人の此國内に於ける壓迫抑制せらるゝこと、瓜哇に於けるが如し。余は此間に於て英佛兩國殖民政策の異同を感ぜざる能はず。

**虐遇せらるゝ支那人**

人若し交趾支那に於ける都邑を歩行せんには、市街に於ける大商店の主人、田野に於ける大農夫等は、主として支那人なるを發見し、交趾國と云はずして、交趾支那と云ふの適切なるを感ずるならん。假りに此等の支那人を國外に放逐し得たりとせんか。殘る處は懶怠にして無智なるマレー人のみ。工業之れが爲めに衰へ、農業之れか爲めに退くべし。然るに佛國政府は此勤勉にして善良なる支那人を招徠するを勉めず、壓抑百端試みざるはなし。例へば支那人は老若男女を問はず、毎年毎人十四圓五十錢の人頭税を徵せらる。夫れ人頭税を納むること已に容易にあらず。其金額が毎一人十四圓五十錢に達するに至りては客旅の支那人とし



支那人の十字



交趾支那の音樂隊

ては一大負擔と云はざるを得ず。然るに佛國政府の支那人を苦しむる此に止らず、更に支那人使雇稅なるものを設け、傭主は少きは毎年七十圓より、多きは二百四十圓を徵せらる。故に事業家は成るべく支那人を使雇せざらんことを欲するに至る。此外支那人は國内を轉移するに方りても、旅行免狀を要すと云ふに至りては、佛人の支那人に對する川意嚴肅を極めたりと云はざるべからず。然らば則ち佛人は支那人を驅逐して、其利權を吸集し得るかと云へば然らず。彈力に富みたる支那人は、山岳壓し來るが如き此壓抑の下に於て、汲々孜々、産業を勉め、利權を吸ふ。何となれば歐洲人は其體質に於て、到底熱帶地に於ては支那人の敵にあらざればなり。夫れ此の如くして支那人驅逐の目的は遂げず、而して餘る所のものは支那人をして佛國の壓抑を慣らしむるのみ。余は政治の天才ある佛人が、何故に此一事を曉らざるかを怪しむ。

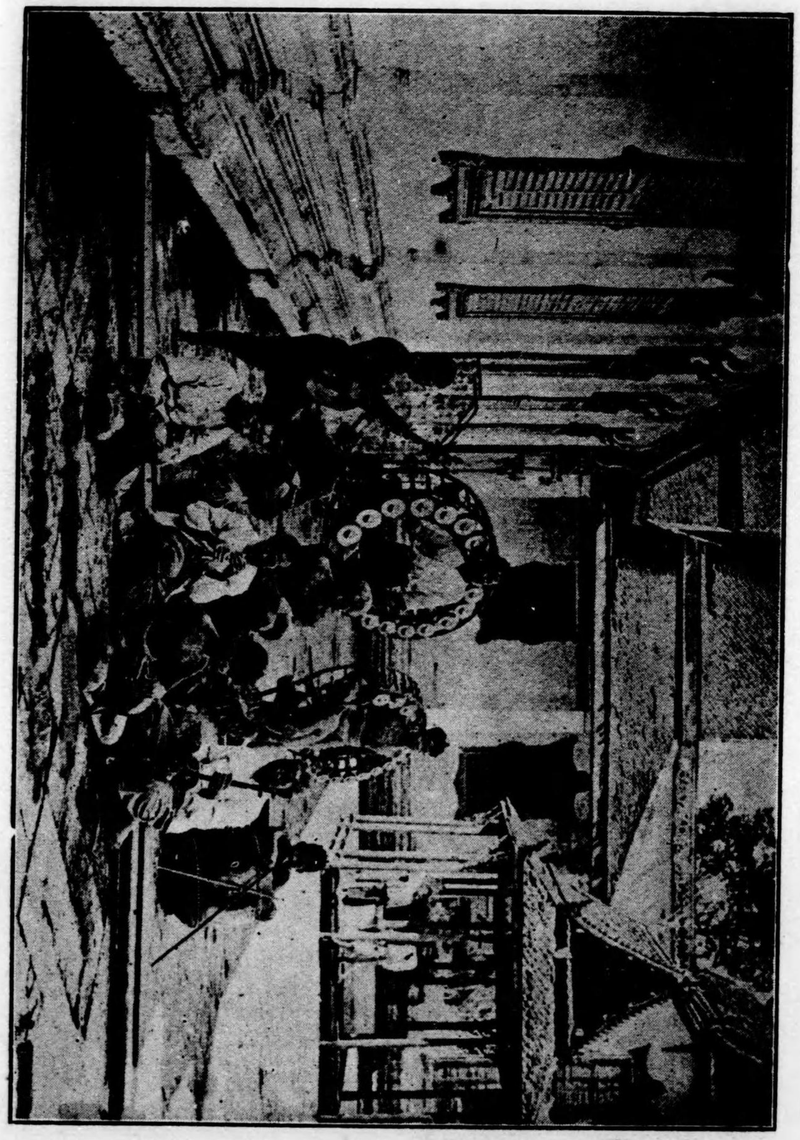
**佛領の人口土地**

所謂佛領印度支那は右の交趾支那殖民の外に、安南保護國、東京及びラテス保護國、柬埔寨保護國あり。以上の殖民地、四保護國は合して、佛領印度支那と號し、一の總督府の下に之を統率す。總督府は東京保護國の首府河内にありて、別に支那より租借したる廣州灣を有す。全領の面積二十四萬六千方里と稱せらるも、果して然るや否、容易に信を措きがたし。然る所以のものは、隣國暹羅との境界甚だ不明にして、常に紛爭絕えざればなり。從つて其の人口の千八百二十三萬人と云ふも、また容易に信じかたし。是れ以上の理由の外、戸籍なき地方多ければなり。其の人種は大別してマレー人、支那人なりと雖も、之れを小別すれば安南人、柬堡塞人、シャン人、マレー人、支那人とす。而してシャン人は支那人に屬し安南、柬堡塞人はマレ一種に屬す。交趾支那の人種は、多く安南人と支那人として其河海によりて外客と交通すること久しきを以て、佛領印度支那中智見最も開けたるものなりとせらる。此地概して雲南より來る大江の持ち來りし沃土より成りたる冲積洲なるを以て、地味肥沃、加ふるに氣熱、炎熱にして萬物を鬱生するがため物のあらざるはなし。日本人が南京米と稱する米も、緬甸及び此地方より出るものとす。其耕作法を見るに、農夫は唯だ稻種を水田に放下するのみにして、肥料を與ふることなし。然るに陽光と大地とは農夫に代りて之れを育成す。此の如きもの數年にして、地味枯渇の恐れある頃は、洪水氾濫、河底の沃土を平地に散布して肥料に代ふ。此の如く大地已に冲積土より成るを以て、全國概して平坦にして、山岳少なくメー山は該殖民地に於ける最高山岳として知らるゝに係はらず、六百メートルあるに過ぎず。三百間の山は日本に於ては一の丘陵に過ぎず。また以て該殖民地の低平なるを想像するに足らん。故に至る所平野にして一望盡きず。小川大溝、其間を縱横して灌漑すべからざるの地なし。從來、安南政府の惡政の下に於てすら、田野遠く

開けたるに加へて、近年、佛國殖民地となりて以來、生命財産の安全の保證せらるるに至りしより、田野益々開け、山材數澤を夷平開拓して米田とすもの愈よ多く、殖民地の面積五百一萬千二百七十七ヘクテール中、百五十萬ヘクテールは開拓せられたりと信ぜらる。而して此中の水田は百三十五萬八千ヘクテールあり。産物は米を主として砂糖、ゴム、胡椒、ベテルナツト、サフラン、藍、シンコナ、煙草、綿、メーズ、コプラ等なり。故に交趾支那の財政は割合に良好にして佛領印度支那總督府が他の保護國蕩平のため、無用の資財を費やすを嫌ふて、往々にして總督府の治下を脱し、別個の獨立殖民地たらんことを欲するもの少からず。

**【四郊壘多し】** サイゴンに佛人サリエージ氏あり。佛領印度に於て種々の事業に關係を有するヲグリヤストロ商店の重役にして慧敏、仁愛、善く日本人を待つ。氏年來日本名譽領事として日佛兩國の利益を增進せんと欲して頗る勉むる所あり。夫人は

東埔塞貴族の小兒



柬埔寨音樂隊

英國に生じ、其才色雙秀、西貢社會の名花たり。余は一日サリエージ氏の自働車を動かして郊外に到るに、車道縱横、坦々として砥の如く、夕陽西山に落ちんとする頃佛人が車馬を驅りて四郊に遊ぶもの雲霧の如く、嬉々として熱帶地にあるを忘れ、老の將さに至らんとするを知らざるが如く、此南荒に來りて猶ほボアド、ブーロンニュに遊ぶが如き心地を有するは流石に佛人の面目と云ふべし。余は行き行きて植物園の西方に行きたる時、土壘の隆起するを見て、同行の日本人に問ふて其砲臺なるを知り、併せて其日露戰爭に際して急造せられたるものなるを知る。余は、安南土人が果して當時、如何に動搖せしかを知らず。然れども土壘が累々として四郊に起つを見ては、此地方に於ける佛國官憲の當時の心理狀態を說明するに足るを信ず。

**柬埔寨王國**

交趾支那の西北に柬埔寨保護國あり。西は暹羅に接し南は海により て限られ、北はラオスに續く。メーコンの大江、國中を縱貫し、霖雨至れば汎濫

四出、浩蕩茫洋、際涯する所なし。而して其去りたる後は、沃土を留むること、恰かも埃及のナイル河の如し。故に土人メーコンを呼んで尊きメーコンと云ふ。これを以て土地豐穰、萬物産せざるなし。其山林有要の樹木八十有餘種ありと云ふを聞きては其天富を想像するに難からざるべし。然れども人民懶怠にして氣力なく、此富源を開發するを知らず。ある所の商業も、一に支那人に占有せられて、省みる所なし。首府をプノンペンと云ふ。國王此にあつて佛國保護の下に王政を布く。土人文武の官僚は國王の任免する所なりと雖も、佛國は此地に高等理事官を置き其財政司法、稅關、收稅、土木等の政治は佛國官吏之を行ふを以て、事實に於ては佛人の政治あるのみ。道路は歐洲風に修築せられ、裁判所、郵便局、病院、登記局、警視廳、土木局、商業博物館、印度支那銀行等、歐洲風の建築、甍を並べて、恰かも西貢を縮少したるもの、如し。此廢殘朝廷の舊都に電氣燈を見るは佛人の賜と云ふべきのみ。處々の殘樓廢閣より見れば、佛領印度支那中、柬堡寨の文化は曾て頗る高度に發達したるを想像し得べし。前年、柬堡寨王、其官伎を從へて巴里に來遊し、頻りに新聞三面に記事を供給せる頃、余、王と半面の知あれども、余は徒らに佛人の誤解を招かんことを恐れて、之れを訪問せざりき。

**西貢より東京**　印度支那北方の港灣に海防港あり、東京保護國の海口にして、西貢と海防との交通は曾て鐵道によらしめんとして計畫せられたれども、鐵道未た成らずして、資金已に盡き、今は處々斷續の鐵道あるのみにして縱貫鐵道なく、此間の交通は唯た海船によるのみ。而して海船には佛國郵船會社と、地方の郵船會社との二線あり、共に等しく政府の保護を受く。然れとも西貢海防間に於ては寧ろ地方郵船に對する同情深きもの、如く、余が最近海防行の汽船の時日を質したるに官憲もホテルも皆な答ふるに地方郵船の時日を以てし、また佛國郵船の時日を以て答ふ

るものなし。然れども余は新聞紙の廣告によりて佛國郵船の出發、數日早きを知り該會社の汽船カシヤ號に搭乘す。カシヤ號は朝の五時に開帆すべしとのことなれば余は前夜に乘込むの寧ろ便宜なるべきを思ふて、夜十二時、船室に入りて一夜を此に明したれども、世評に言ふが如き蚊害もなく、最も安靜に睡眠するを得たりき。蓋し西貢河の蚊害の如きは十數年前、此地方の未だ開けざりし時代の昔話ならんのみ。余等の船は西貢河を下りて再びサンジャックの尖頭を經過し、左に折れて北に向ふ。是より蒼海渺茫、唯だ海波の音と、龍骨の響きを聞くのみ。此夜十二時頃まで余等甲板にあり。船員左方の雲山を示めし、カムラン灣は其下にありと言ふ。是れ即ち日露戰爭に際してバルチック艦隊が二十四時間法を利用して、石炭の供給を得たる土地なりとす。翌朝六時、船、ナアトラン灣に入り、佛國政府軍隊の需給品と、數人の土人旅客を上陸せしむ。ナアトランは港灣大ならざるも、三方繞らすに岩山を以てし、海水深湛、極めて要害の地とす。此間余はジャヴァに於て見たるが如く、籠の船を見、涅齒、朱唇の男女を見ては、愈々マレー人と日本人との間の歷史以前の關係を想像するを禁ずる能はず。余試みに籠船に乘りて上陸するに、極めて輕快にして、而して左右舷側の水底を見るに、長さ四五尺の魚あり、優遊浮沈す。其鼻頭尖銳、形體狹長、恰かも我針魚に似たり。余其名を逸したれども、此邊極めて魚族に富み、輸出物の重なるものは、乾魚、鹽魚なりと云はる。余等の船は港内に止ること八時間にして、再び開帆、翌日午後五時トアラン港に入る。是れ舊南安帝國の首都ユエー府の海口にして、海口より首府まで六十八マイルは鐵道によりて聯絡す。此港遠淺にして船よりトアラン市街に行かんとするには小蒸氣によらざるべからず。余は本船の事務長と共に上陸し、トアランホテルに入りて晩餐し、夜十時本船に歸れば、出發の汽笛已に鳴りつゝあり。倉皇、船に上る。昔し王朝時代の阿部仲麿

が唐より日本に歸らんとして、海風に流されて漂着したりと云ふは此地方にして、頭上天邊の月は曾て是れ彼が『三笠の山に出でし月かも』と無限の感慨を寄せたる月なりと思へば、尋常一樣の月光も、また深く詩興あるを覺ゆ。余等の船は此の如くして安南と海南島間の東京灣を走ること二十七時にして、有名なる海賊島などを右方に見つゝ、午前四時と云ふに海防港に達す。海防港と云ふも、其實は猶ほ未だ紅河の下流にして、汚泥、大船を遣るべからざるを以て、潮待すること九時間、洋上微風すらも吹き來らず。炎陽人に誇らんばかりに、頭上より照射し來るを以て、船客皆な日射病を恐れしが、十二時頃、漸やく錨を抜き、蜿蜒屈曲したる紅河を遡ること四時間にして、午後三時始めて眞の海防港に入る。西貢より此に至るまで、八百五十海里にして、九十六時間を費すに至りて、また、遲緩と云はざるべからず。

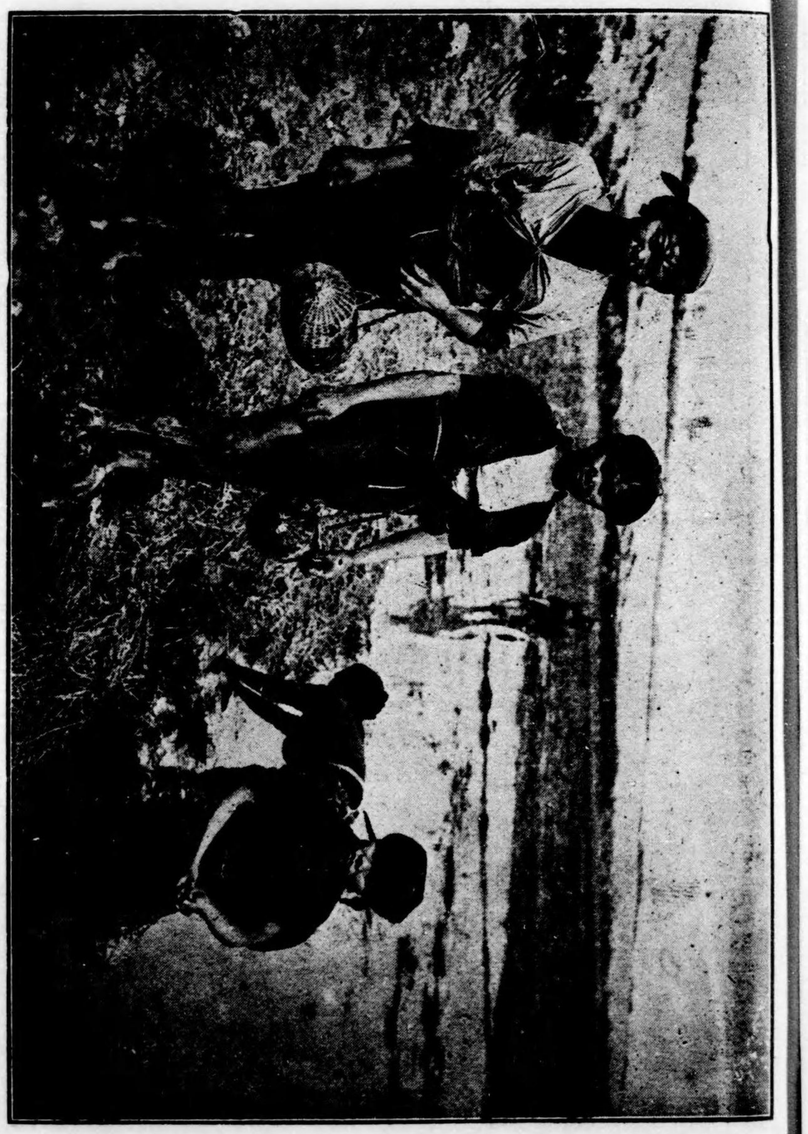
**海防港に入る**

海防は固と沼澤より成りし一寒邑にして、土地卑濕、極めて瘴癘毒多く、而して河外には海賊島の名を帶ぶる島嶼あるほどにして。河流屈曲、海角出入多く、海賊の生活に便なるが爲め、殆んど匪徒賊盜の巢窟なりしが、千八百八十四年佛人此地を占領して以來、鋭意河口を改修し市街を築造し、盜賊を夷滅せるが爲め、今は安靖愉快なる港市となる。余等の搭乘したるカシヤは四千噸の船なれども直ちに棧橋に接着するを得、猶ほ之れよりも巨大なる船舶の河上に止るを見たり。余が宿するヲテル、ジュ、コンメルスは此地第一壯麗のホテルにして、最も涼しかるべしと思ふ一室を取り得たれども、猶ほ炎熱甚しく、半夜全身に汗するを見たり。全市の人口二萬人、此中安南人一萬二千人餘にして支那人は依然として多く、六千人あり。而して佛人は僅かに九百人のみ。此地に於ては日本雜貨店二軒あり。市街の建築、生活、皆な佛國風にして、純然たる佛人の都會なりとす。かゝる小都會にありても、水道は清水を供給し、電燈は街上を照らし、日暮に至れば馬車を驅つて郊

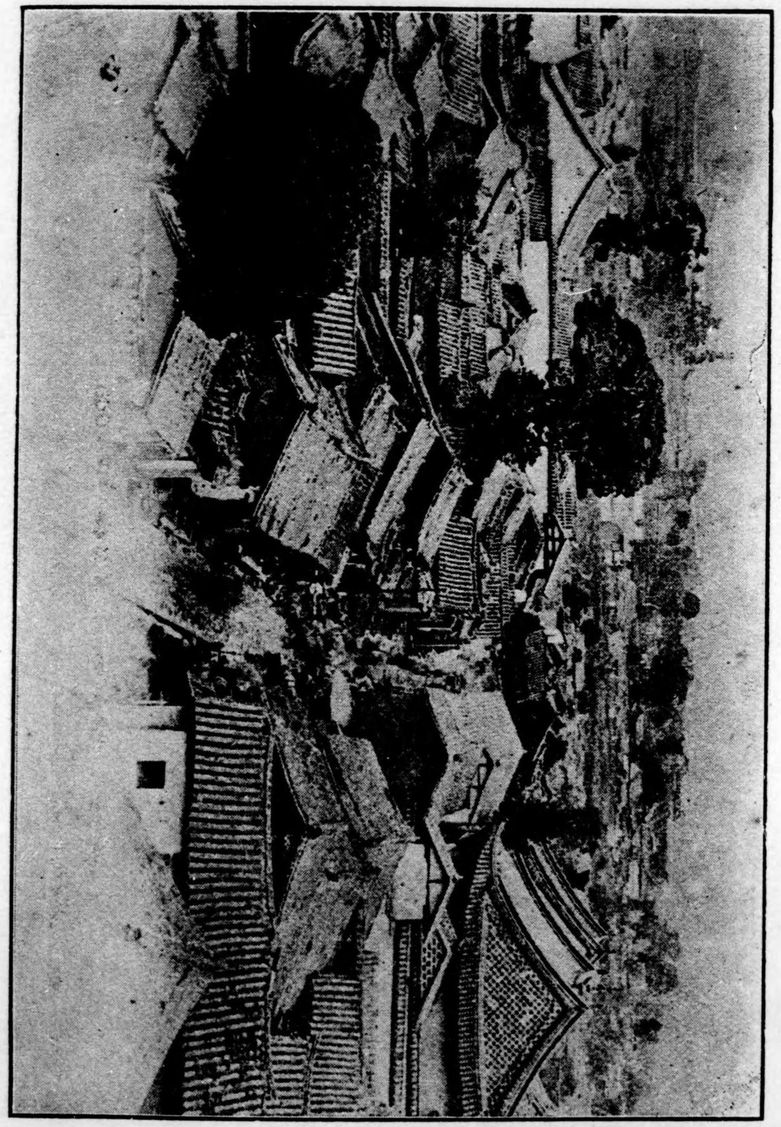
外に至ること、猶ほ歐洲の都會に於けるが如く、馬は日本馬より小なれども體格整正にして駿足のもの少なからず。此地一方には印度支那より支那雲南省に入る鐵道の發起點にして、一方には日本、支那と東京州との貿易の要關なるを以て、其將來の發達は計るべからざるものあり。已に沼澤海賊の巣窟を變じて、一大都會となしたる佛人は、必らず其前途にある大事業に應ずるの幹能あるや疑ふべきにあらず。若し佛人にして眞に其幹能を發揮するの日は、上海、シンガポール、香港と相頡頏すること決して難きにあらざるべし。

**極端なる保護主義**

然れども佛人にして眞に海防を變じて、一大海港たらしめんと欲せば、先づ爲すべき幾多の事業あり。余は佛人が先づ其海關稅に就きて一考せんことを希はざるを得ず。佛國に於ては、近時佛國傳來の殖民政策たる同化畫一政策を非として、英國流の土情適應主義を賞揚する者多きに係はらず、殖民地の稅則に於



東京光の土人



支那雲南省蒙自府

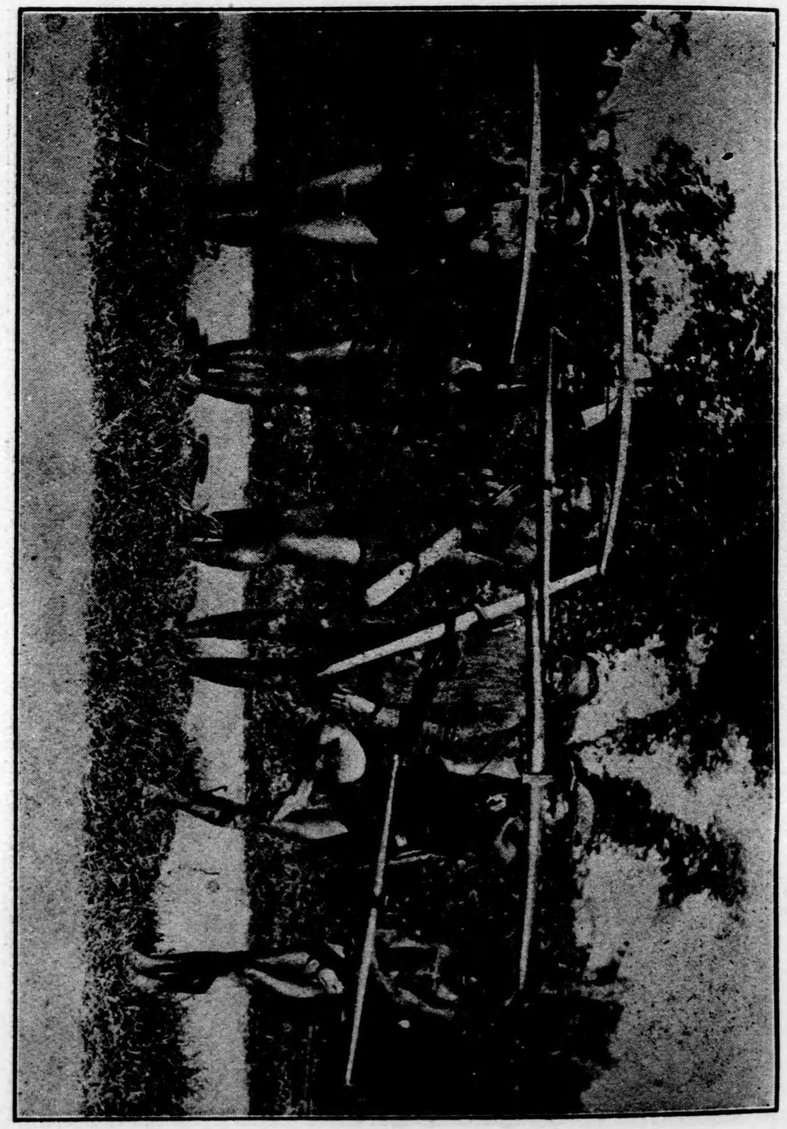
ては、依然として排他主義を取り、寸毫協同政策に出づる意志なきは、頗る佛人の爲めに之を惜しまざるを得ず。佛人は印度支那全體に對して千八百九十二年の本國海關法を適用し、佛國の製造品にあらざる歐洲貨物に對しては、十分高率なる關稅を賦課し、印度支那の貿易は之を佛國本土との間のみに限局せんと欲するもの、如し。但し佛國より供給する能はざる貨物、例へば麻囊の如きは新舊とも無稅輸入品の中に數へられ、また通常佛國本國の海關法によりては課稅せらるべき性質の貨物なるも、佛國より廉價に輸入し能はざるもの、則ち動物、生乳、支那產の野菜、菓物、薯、及び材木の如きは、無稅品として取扱はる。然るに佛國より輸入し得べきもの、中、靴の如きは若し他國より輸入せんには、百キロ毎に五十フランを課し、陶磁器は六フラン、紙、文房具は十三フラン、ガラス器具は二十五フランを徵す。然るに此等の物品が若し佛國より輸入せられんには、一切皆無稅なりとす。他の諸

國は如何ぞ此の如き高率の輸入稅を拂ふて、無稅の佛國品と競爭し得べき。此地方の貿易は殆んど佛人の手中に歸しつゝあるもの自然の勢のみ。然らば則ち佛國商人は此地に向つて貿易を勉め、產業を起すに熱心なりやと云ふに、其體質と嗜好と、生活狀態とは彼等をして幸福を此地方に享受せしむるに適せざるを以て、佛國は他人に禁じて飲食せしめざると共に、己もまた飲食せざるが如き境遇に立ち、其結果として土人と在留佛人は、高價を拂ふて撰擇の自由なき狹隘なる市場より、貨物を購はんことを强ひらる。而して之れにより何人が利するかと云へば、唯だ佛國に於ける少數の製造業者のみ。

**日本品に對する待遇**

殊に余が遺憾に堪へざるは佛國官吏の日本商品に對する態度なりとす。日本より佛蘭西本國に輸出する商品は、他の諸國より輸入する同一物品に課せらるゝより多くの輸入稅を課せらるゝことなかるべきは、日佛協約の示す所なるに係はらず、日本より佛領印度支那に輸入する日本商品は、最高率の輸入稅を課せらる。日佛條約は佛國若し好まば、之れを印度支那に適用し得るものなるに係はらず、佛國政府は遂に之れを適用せざりしものは、印度支那官憲の異論のためなりしと信ぜらる。然れども千八百九十六年の日佛條約締結當時にありては日佛の間今日の如き關係にあらざりしが故に、印度支那の官憲が異論を唱へたるとも恕すべからざるにあらずと雖も、日佛協約が印度支那を主題として締結せられたる今日に於て、日本品が猶ほ極めて高率にして殆んど禁止稅に近き課稅を受くるに至りては、咄々怪事と云はざるべからず。また日佛條約によれば、兩國の臣民、共に兩國に於ては通過稅を課せられざるべしと約束せらるゝに係はらず、日本商品は印度支那を通過して、支那の雲南省に入るに當りては、輸入稅の五分の一を課稅せらるゝは、また更に一大怪事と云はざるべからず。勿論日佛協約は印度支那に適應せられざる

ものなりと雖も、印度支那政府は、文明國の通義として、かゝる惡稅を課せずして以て日佛條約の精神を尊重するは其通義なるべきに、平然として通過稅を課するに至りては、驚くべき政治と云はざるべからず。而して更らに甚だしきは、日本品と佛國品と、鐵道運賃に相異あること是れなり。日本より假りに食料ビール等を海防より、雲南省蒙自まで送らんとするに、一噸の貨車を借切とせんに、五十弗を徵せられ、而して佛國品ならば三十四弗にて送るを得べし。日本品は輸入稅の五分の一の通過稅を徵せられて、更に一噸の運賃につき、佛國品より十六弗高く徵せらるるに至りては、果して公平なる政治と云ふことを得べきか。佛國政府が他の文明國と共に、支那の釐金稅に對して數ば抗議したるは、余の記憶する所なり。然るに佛國自から其殖民地保護國に於て、通過稅の名の下に一種の釐金稅を徵するに至りては、己の目に梁木あるを知らざるものと云はざるべからず。若し日本政府に



東京市の土塀

東京に於て土産物を購買する支那人

して朝鮮若しくは滿洲にて、通過稅を徵するが如きことあらば、列國の愁訴それ如何ぞや。余は佛國に對して極めて親善なる感情を有するものにして、率先して日佛協約の必要を說きたるものなるが故に、日佛協約の生じたる兩國親善の精神が猶ほ未だ此地方に實現せざるを見ては、他人よりも一層深く遺憾に堪へず。余は此次に來るべき關稅改正協約に際しては、日本と印度支那との間に、友愛協同の精神を以て、雙方の利益を計る條約の締結せられんことを希ふて已む能はず。之と同時に、日本の船舶が東京灣にも浮び、財產と地位ある我商人の東京に止りて、日佛兩國の士人が、相互に尊重するに至らんことを希ふて止む能はず。

**矛盾せる關稅政策**

印度支那政府は以上の如き手段によりて、他國よりの輸入品に重稅を課すと雖も、土人の生活甚だ低くして、購買力少なきが爲め、政府が輸入稅より得る所甚だ多からざるを以て、他の熱帶殖民地にあるが如く、輸出品に課

稅して、歲計の平均を得んと欲し、動物、蜂蜜、魚類、菓物、種物、木材等は悉く之に課稅し、若し特に規定する所なくんば、從價百分の三を課せられ、米及び籾は若し三割二分以上の糠あるものは、一百キロに付、七十六サンチーム、三割以下の糠あるものは、四十二サンチームを課し、白米は三十二サンチームを課す。是れ成るべく精製品の輸出を奬勵せんがためなりとす。而して以上の輸出品も、若し佛國に向つて輸出せらるゝときは、無稅品となるが故に、歐洲行の輸出品は、自然に佛國を經るに至る。政府は此の如く極端なる保護稅政策を實行するに係はらず、其千八百九十八年支那政府より廣州灣を租借するや、之れを以て自由港となし、一切の貨物、無稅にて出入せしむ。是れ蓋し香港と相對抗して、其繁昌を奪はんと欲するがためなるべしと雖も、一方に極端なる保護稅主義を實行するものが、一方に自由港政策を行ふに至りては、天下矛盾の極ならざるべからず。余は廣州灣に於て自由港政策の利を知りたる佛人が、せめては印度支那に於ては、寛大なる保護稅政策位に退却せんことを望まざるを得ず。

**自給殖民地**

印度支那に於ける保護稅主義は、以上の如くに極端に走ると雖も、其此に至りたる動機を考ふるに、また深く恕すべきものなきにあらず。千八百八十三年佛國が東京を略取したる以來支那黑旗軍の殘黨と、安南の土匪と年々歲々蜂起して殆んど寧日なく、東京を略取したりと云ふも、權利上のみに止まりて、全國擾亂を極め、之れを平定せんが爲め、佛國は人命と財用とを用ゆること限りなし。千八百八十七年より九十六年に至る九年間に、本國より東京に送りたる財用は七億二千萬フランに上り、之れが爲め數ば內政の危機を釀し、幾多の政治家を墜落せしめ、東京と云へば、人之れを冷笑して、殆んど誇大にして事を好むの意なりとするに至る。佛國政府が東京に費す所、此の如くに巨多なるも、需むる所多くして、與ふる所少

きを以て、印度支那政府は千八百九十六年、更に八千萬フランの公債を本國に募るに至れり。佛國の官僚は、殖民政治に就きては多くは狹隘にして性急なる畫一同化派に屬するを以て、機會さへあらば殖民地の政務に干渉せんと欲するに加へて、政治家は殖民地問題を孤注として、政權を爭はんと企つる者多く、本國より補助費を供給するを機會とし、政府、議會、共に相從へて殖民地に干渉して其弊に堪へず。此に於てか印度支那政廳の官吏は、何人が首唱するともなく本國の干渉を離るゝにあらずんば、殖民地は統治すべからず、而して本國の干渉は主として財用の補助より來るを以て、殖民地を財政上より自給自治ならしむるは、即ち一般政治上にも自治なるを得る所以なりとして、鋭意して財政自給を謀り、千九百四年よりは、已に其目的を達して本國の補助を受けざるのみならず、本國より派遣する陸海軍費として、年々一千三百萬フランの金額を本國に納付するに至れり。夫れ印度支那政廳は

東京文官衣冠の圖

東京土匪巢首の圖

此の如き目的を有するが爲め、あらゆる手段によりて其歲計の均衡を維持せざるべからず。是れ輸出品にも課稅する所以、輸入稅には重稅を課する所以の一なるべし。然れども其動機の何處にあるを論ぜず、佛人が印度支那に於ける財政及び經濟政策は、全然其主義に於て誤謬なりと云はざるべからず。

**廉價なる土地**

横山正修氏は大阪毎日新聞の通信員にして、海防港に滯留して佛領印度の研究し、頗る土情に通ず。彼の語る所によれば、海防附近に三千五百町歩の賣地あり。中一千五百町歩は現に水田にして、米を生じつゝあり。七百町歩はゴム樹を植ゑ、三四年の後はゴム液を採收し得べし。殘る所の一千三百町歩も曾て東京王政時代には水田なりしも、兵亂多年なりし爲め、人民の逃散相繼ぎて、數年、荒蕪に委したるが爲め野地となりしものにして、一たび鋤鍬を入るれば、直ちに水田となすを得べし。而して紅河の支流、此地に添うて流るゝが爲め、灌漑の利は十分な

りとす。右の持主は佛人にして、早くも東京の生活に倦みて、歸心矢の如くなるが爲め、十五萬圓にて之れを賣らんことを望むと。それ一年二作の水田にして、一町歩四十二圓八十錢と云ふに至りては、是れ一年一作の朝鮮の寒田よりも廉價なるものにして、殆んど世人、意想の外にあり。此の如きものは佛人が政權により、資本により、智能によりて、優勝の地に立ちながら、茲に土着して自から産業を望むの心が、如何に稀薄なるかを示して餘りありと云はざるべからず。佛人已に此地方が提供する膳羞を食ふ能はずんば、宜しく他人をして食はしめて、自から地主たるの利益を享受するに止まらざるべからず。然るに佛人は自から食ふ能はずして、他人にも食はしめざらんとす。其結果は他の歐洲人や日本人は、寸毫も印度支那の産業貿易によりて利せず、而して佛人の最も厭惡する支那人のみ其利を占む。余は佛人の政治の賢智を疑はざらんと欲するも得ざるなり。

## 海防より河内

海防は東京州の關門にして、河内は其首府且つ印度支那全體の首都たり。河内は汽車によりて海防と聯絡し、其間六十マイルにして、僅かに二時間を要するのみ。余の海防に入りし數日前より大雨あり、河内、海防の間、河水汎濫、鐵道を水底に沒して汽車を動かす能はざるを以て、余はジエプセンの獨逸汽船によりて、河流を遡り、ダプコウに至り、此より汽車に乘りて河内に入る。ダプコウは首府河内より支那廣西省の境に達する鐵道のステーションにして、余等の船は午後六時に海防を發して、翌日の午前六時ダプコウに着し、之れより汽車によりて河内に入りしは、午前八時半なりき。汽車によれば二時間程の道を一夜舟行するに至りては、また極めて創世的の旅行と云はざるべからず。案ずるに東京州は古來獨立の一王國にして、千八百二年安南國の爲めに併呑せられて其郡縣となり、安南王の目代河内府に駐りて政治を行ひしが、千八百八十四年東京州を佛國保護の下に置く。

全州の面積四萬六千方里にして、十縣八千村に分たれ、人口六百萬を數ふ。此中支那人は卅萬三千人にして、歐洲人は軍隊を除きては四千人に過ぎず。日本人は一百人を數ふと雖も、十二三を除くの外は、香しからぬ人種に屬するは、余が旅行者として數ば耻かしく思ふ所なりき。

**河内府の光景**

余は河内ステーションを出でゝ、一歩河内府に入りたる時、第一に其街道の廣大にして、四五臺の自働車をも並馳し得る程なるに感じ、第二には其純然たる歐洲流の都會なるに感じ、第三には其靜平にして人の來往少なく、車馬の音響なく、西貢より此地に入りては恰かも紐育よりワシントンに入るが如くなるに感ず。余が投宿したるヲテル、メトロポールは此地第一のホテルにして滯留の客の外、晩餐のみを此に取らんとする外來客の爲め、食堂常に充滿し、其食事の甘美なる巴理にて食ふものと略ほ等差あるなし。而して食卓には常に紅白二種の葡萄酒を備へて、客の自由に飲むに任す。炎南萬里、開拓の事業に伴ふ寂寞と無趣味とを救ふて、多少の慰樂となるものは、かゝるホテルの存在なりと思へば、此ホテルも、佛人の殖民歴史には、確かに數行の記事を要求するに足るものと言はざるべからず。(余は曾て外人より此ホテルの事を聞知して、政府の補助ありと臺灣統治誌に記したれども、事實は然らず、個人の自由營業なり)此地曾て大市と號して、安南時代より樞要の地なりしが、佛人之れを取つて以來、頻りに市街を改良して、溝渠を通じ、惡水を排し、道路を改良するもの已に五十里に及び、水道を作り、電燈を給し、今は純然たる最新式の歐洲風の都會となる。余は河内の風景として數へらるゝ小湖、大湖、植物園を見、博物館に入り、街衢を徘徊し、兵營を見、總督府に出入し、喟然として此地を取りし佛人氣魄の大なるを嘆美するを禁ずる能はず。佛人が最初に占領した印度支那は、交趾支那の一區域にして西貢を以て其首府とする南方の一局のみ。然

るに其一旦東京を占領するや、即ち都を北の方、河内に移して、蠻夷跳梁の間に突入す。是れ恰かも明の成祖が南に起りて、歴世の首都たる南京を捨てゝ、北京に移り、以て北方を威壓せんとしたるが如し。經綸規模あるにあらずんば、焉ぞ能く此の如くなるを得んや。

**官吏の社會**

余は官人に接し、學校を見、螺鈿細工を見、土人の町に入りしが、電燈が土人の住居をも照して、土人が余等を呼びかくるに、モッシュの佛語を以てするに會ふては、佛人の大好物なる同化主義の一端を見て、破顔一笑するを禁ずる能はざりき。全市の人口十五萬人を數ふれども、歐洲人は武官兵士を除きては三千一百人に過ぎず。而して支那人は却て八千人ありと云ふに至りては、支那人の繁殖力は、例によりて驚くべしと云はざるべからず。佛人の多數は官吏にして商人少なく商人あるも小賣商人にして、事業家に乏し。而して文武の官、二年を此地に經過すれば、一年の間、本國に歸休するを得るを以て、此地を以て腰掛の地となすもの多く、眞に此地の事を以て終身の事業となすもの少なし。今佛人の印度支那にある者を數ふるに、二萬人にして、別に八千の軍隊あり、印度支那在留佛國官吏の數を計るに、官員錄に記さるゝ文官のみにても五千五百餘人あり。而して此官吏の大部分は河内府にあるを以て、河内府は殆んど官吏の都會にして、事業少なく、從て勞銀甚だ廉なりとす。故に物價また甚だ低廉なりとす。余は安南土人の家に就きて白絽を買ひたるに一反(二丈八尺)七圓六十錢なりき。勿論此絽たるや染上げて日本絽の如き光澤なしと雖も、七圓六十錢はまた非常の廉價なりと云はざるべからず。之を以て凡ての勞銀物價を類推するに足らん。

**在留佛人の不平**

東京は佛國に於ては一時好大にして失敗したる事業の代名詞の如くに使用せられたる時代もありたりき。然れども今や秩序回復して、また往時の紛

トキンキ府に於ける佛國化したる土人



亂を見ず。總督クロブコオスキー氏、久しく各國に使臣として經驗を積み、寛大にして聰明、其政治は產業を興隆し、交通機關を整理し、土人を開發するを主とするが爲め、境內漸やく靖安、中外望を屬すと雖も、印度支那の痼疾たる官僚政治の病患、容易に拔け去らず。總督の仁政が土民を潤さんとするを妨ぐるもの少からず。また何れの殖民地にもあるが如く、殖民地在留の佛人は、其貪婪飽くなき望みを滿たさんとして、土人を掠奪せんとして得ざるや、其咎を總督の政治に歸するあり。本國の議會には、また突飛なる人道論者ありて、總督の政治を尤めて土人に不仁なりとするものあり。若し在留佛人の言ふ所を眞なりとせば、現今の總督は、土人の利益を尊重して、本國人の利益を輕んずる者なるが如く、若し本國の議會に於ける人道論者の言ふ所を眞なりとせば、現總督の政治は土人の利權を蹂躪して、顧みる所なく、殘虐無道なるが如し。一人の政治に對して、腹背相反したる非難ある

佛領印度支那に於ける歌妓



は不思議の極なりと雖も、是れ土人と殖民と利害相反したる土地に在りて、公平なる政治を布かんとするものが、往々受くる所の非難にして、已むべからざるの勢ひと云ふべきのみ。蓋し佛國は其軍隊の善戰善謀によりて東京を占領したる後は、善謀の將軍は愚政の痴人にして、多くの惡政を行ふて、其寵愛する佛人を利せんとしたること少からず。即ち印度支那の海岸一帶に鹽を產するに係らず、食鹽は佛國のアーブルより輸入せざるべからずと規定し、印度支那は全體粘土より成るに係はらず、煉瓦は凡てマウセーユ若しくはボルドウより輸入せざるべからずと規定したるが如き是なり。かゝる偏狹なる政略の後を受けて公正なる政治を行はんとせば、非難は免るべからざるのみ。余は佛國の利益と殖民地の利益は、依然として現總督の寛大公平なる政治にあるを疑はずっ

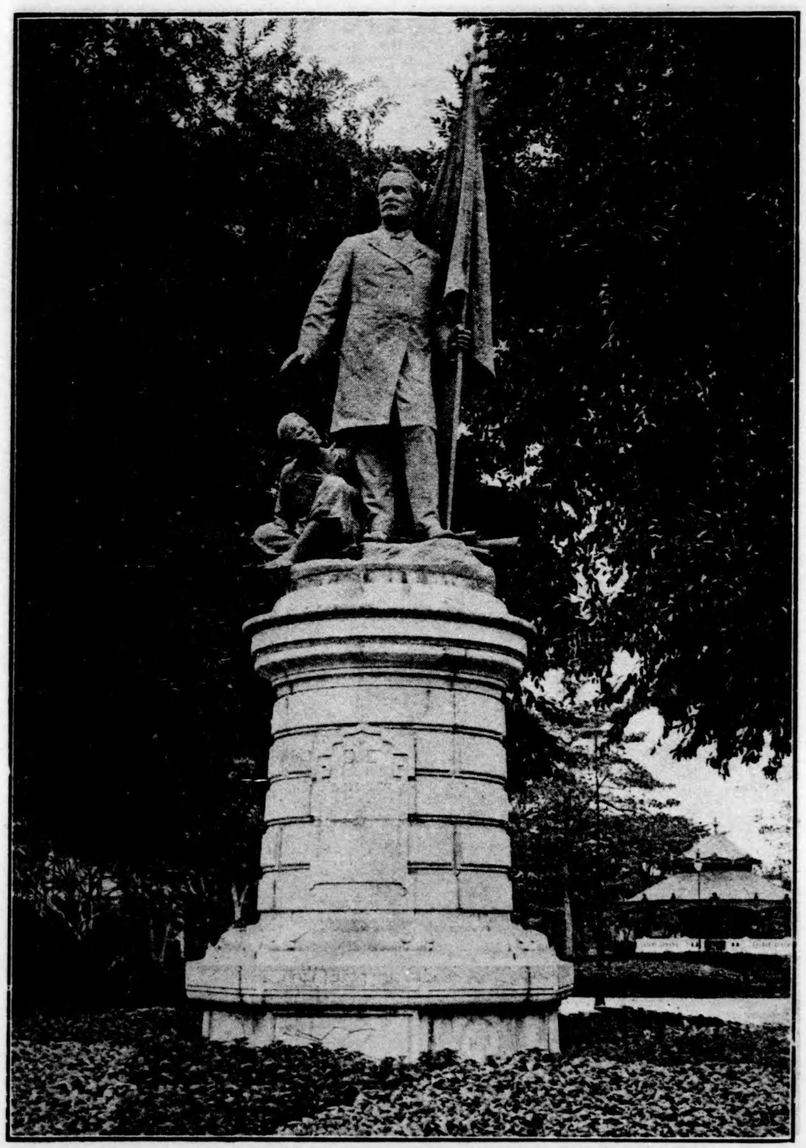
**匪徒の出沒**

東京は東北、支那の廣西省と境を接し、西北、雲南省と境を接する

を以て、匪徒互に出入して、踪跡すべからず。是れ從來東京を難治の地と稱したる所以なりとす。余其村落を見るに、一村悉く一郭をなし、一郭は繞らすに竹林、若くは叢澤を以てし、唯一個の關門によりて出入す。また到る處公會堂の如きものあり。米穀の買賣、計量等多く此に於て爲さる。故に一村は一族の如し。是れマレー人種の特色にして、從來刑賞、課稅等、また一村の責任たりし所以なりとす。故に若し匪徒を出す時、一村が悉く之れを隱匿せんには政府之れを物色すること容易ならず。是また東京の治め難き所以なりとす。余が河内にあるや、日曜日に於ても一個の兵士の、街衢を徘徊するを見ず。余が汽車によりて河内附近を旅行するや、往々隊伍を作りたる兵士と大砲と、汽車に出入するを見る。余怪しみて之れを傍人を問ふて、河内附近に匪徒あり、勢ひ、猖獗なるが爲め、大兵四出して之れを掃蕩せんとし、河内に一兵を止めざるものなるを知る。一昨年七月、土兵數名、相謀つて其上長官たる佛人を毒殺するや、佛人狼狽して其禍源を極めんとし、株連蔓延、頗る土人を動搖せしめ、結局其首領二名を斬り、其首級を河内總督官邸の門前に梟す。蓋し死刑廢止論の起るほどなる佛國が、其殖民地に於て梟首律を行ふは、矛盾に似たりと雖も、東京は保護國にして、佛人直接政治の所にあらず、安南王の舊法の行はるゝ所たり。其梟首の掲示もまた維新第二年の年號を以て公布せられたるを見れば、必ずしも怪むべきにあらざるのみならず、余は佛人が此一事の如く、百事を行ひ、土人には土人の習慣あるを解せば、其殖民政治は必らずや一層見るべきものあるを信じて疑はざるのみ。流石に佛人も梟首の一事は之れを天下に公知せらるるを憚りたるにや、傍觀の日本人中、現狀を寫眞したるものを押收して、公刊を禁じたりしが、後數日、之れを公許したり云ふ。此一事、佛人は見て以て土人の心膽を寒からしめたりと信ずるに係はらず、却つて土人の心を動搖せしめ、少からぬ困

難を生じたり。之より先き、河内附近に土匪の首領あり、官軍攻戰に苦しみて之れを招徠するや、匪首また窮乏の餘、欣然として歸順せしも、狼心虎志、久うして後、形跡頗る疑ふべきものあり。殊に以上七月の梟首を見てより稍動搖の兆あるを以て、昨年の夏佛人襲ふて之れを捕へんとして、其備なきを擊ちしが、匪首、偵して之れを知り、疾風の如くに逸出してより、意を決して佛軍に抗す。即ち河内に於て隻兵の影を見ざるものは、右の匪首と戰はんがため悉く大兵を發したるものにして、事態の容易ならざるを見るべし。而して余の最も驚きたるは、此土匪の蜂起が河内を去る二十マイル内外の地にあること是なり。思ふに廣西の國境、諒山の土匪地方とは、間道相通ずるを得べしと云へば、佛人が其高壓政略のみに依賴せず、土人と親しみ、土語を解し、土情を察するを以て、殖民政策の要義とするに至らずんば、全國を靖安するは、容易の業にあらざるべし。

トンキン府の僧侶



トンキン府に於けるポールベール孫

## 河内より雲南

河内より身を汽車に投じて東北に向へば七時間にして諒山に達すべし。諒山より一驛を越ゆれば、即ち支那廣西省と接境の地にして、新州太平を越えて南寧に出れば、汽船により西江を下り、廣東港に下るを得べし。更にまた河内より汽車によりて西北に向ふて進むこと十二時間なれば老開に達すべし。老開は停車場看板などに於ては牢該と書す。皆な土音ラヲカイの當字のみ。老開は即ち南掌國の一部にして、諸葛孔明が孟獲と戰ふて七擒七縱したりと云ふ南蠻の地の一部とす。老開は南溪河と江河を隔て、雲南省と相望む。南溪河は一名盤江にして即ち古の臨安元江なりとす。余は印度支那旅行の途次、幸に雲南を一見せんと欲し、朝の六時、河内停車場を出發せしが、河内より安沛邊までは、平地にして山容水態、安南普通の風光にして、特に記すべきものなし。余等の汽車は安沛にて老開より來る汽車と相會ひ、乘客をして晝食せしめんが爲め、三十分間此に停車す。余等は驛内の

小料理店に入りて食事するに、かゝる田舍驛にても佛蘭西風の料理と、赤白の葡萄酒とは依然として附き纏ふ。食事終りて汽車に入りて北行すれば、須臾にして右方丘岳を見、左方大河を見る、河は即ち紅河にして、水色丹氣を帶び、水勢汪洋、恰かも揚子江に似たり。汽船によりて上は老開に通じ、下は河内に通ずるを得べし。河の兩岸藪澤にして、掩ふに芭蕉を以てし、長草短樹其間に點綴す。想見せよ、大河の兩岸に發生したる千百萬の芭蕉が、紫紅の花を葉心に點じて、太陽の光を受くるの光景は、如何に壯麗なるか、如何に雄大なるか、詩も歌ふべからず、畫も畫くべからず。嘆美とは夫かゝる場合、無限の感情を言はんが爲めに與へたる文字なるべし。行き行きて更に行き行けば、右方の丘岳愈々高く、樹林益密に、千年の樟枝、天を掩ふて暗らく、百尺の榕樹、地に垂れて廣し。所々の樹枝、猿猴の上下するを見、一聲兩聲、哀音耳に入り來る。然れども啼猿は自から愁へず、愁は行人の心より來るならん。此地方に於て如何に久しく南蠻と支那人との間に、人種的抗爭が行はれたるか、南掌帝國も亡び、清國も亡び、南越も亡び、今や佛國は三色旗を揚げて、鐵道を此地に遣るとは、如何なる變化ぞや。此邊一體に鳥影を見ず、鳥音を聞かざるは、人里の遠きがためにやあらん。丘岳の斷續する間の平地には、往々にして新たに開墾を試みつゝあるものあり。其容貌を見るにマレー人よりは寧ろ支那人に近きは、其地支那本土に近くして、支那的血液の多きがためか。處々乘降の上等客は、軍人か鐵道官吏のみ。汽車を分ちて上中下、及び土人車となす。下等車中に士官あり。其家人臣下を率ゐ、余の通譯を介して、頻りに土情を語らんとするも、余は聞くも益なく、事に害あるを以て、之れを辭謝す。午後六時、老開に着す。老開は河を隔てゝ支那雲南省の河口と相對す。此夜急雨淋浪、大氣清澄、夜、蟲聲を聞く。河口の右方に高丘ありて支那の兵營あり。其砲口は老開にある佛國の兵